
ある武者の希有な物語

白鳩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある武者の希有な物語

【Nコード】

N1674N

【作者名】

白鳩

【あらすじ】

一時期鬼神とも呼ばれた武者が自身の仕えていた將軍の妻に濡れ衣を着せられ、仲間の武士たちに追い詰められることからこの物語は始まります。

ブローグ

ブローグ

ガツガツガツという馬の蹄が土を抉る音が真冬の林道に響く。

その音はとても力強く、確実に前へ、前へと栗毛の見事な馬と鎧兜を身につけ、刀を腰にさした武者を進めていることがよくわかる。

しかし、その馬の力もだんだん衰えてきていた。

なぜならばもう一晩中休むこともなく全速力で何十キロもの鉄の塊のような重さをもつ主人である武者を乗せて駆られていたからである。その証拠にこの馬の息遣いは荒く、口元から唾液が垂れ流しになり、目の焦点が定まっていない。

この武者はとある地方の強力な将軍に追われていた。

まだ将軍に仕えていたあの頃の武者は数十……いや、数百弱もの人を斬り、数々の手柄を立てたとても優秀な一般の武士であった。

一時期鬼神という異名がつけられるなど、その武者は凄まじかった。それに人柄もよく、同じ主に仕えているほかの武士の信頼も人一倍厚く、よく慕われていた。

しかし、それを快く思わないものの中にはいた。

それはその将軍の妻である。

数々の功績をあげ、良い人柄で慕われていた武者を将軍の妻は危険視していた。

（このままではいつしかあの武者を中心とした大きな反乱が起こる危険性がある）

この妻は非常に疑り深く、自分が気に入らない相手には悪質な悪戯や狡猾な罠で虐め、時には他人に濡れ衣を着せて処刑したりするこ

ともあつた。

この妻にとつて、この出来すぎた武者はとても危険な存在だった。あまり配下の武士たちに信頼されていない自分の臆病でわがままでまぬけな表情を顔に張り付けている権力しか誇れるものがない夫の立場が危うい状況に陥ることが妻にとつて最も避けたいことのひとつであつた。

あるとき、妻は自身の二人の子供である男児のうち、弟をその手にかけた。バカな自身の子供を一太刀で斬り殺したのだ。その残骸を見つけた武者に將軍の妻は濡れ衣を着せた。

夫はそのことをまともに信じ込み、激怒した。夫は何のためらいもなくこれまで信頼を寄せていた武者を殺すことを自身の配下に命令した。

しかし、配下の武士たちはとても信じられないと命令を頑なに拒んだ。

それを見た將軍の妻はいつも後ろに仕えている配下の一人にある物を持ってこさせた。

それは血がべつとりとついたあの武者の二本あるうちの一つの刀であつた。

ご丁寧にもこの妻はあの武者の刀で自身の子供を手にかけていたのだ。

この刀を見た武士たちは唇を噛みしめ、渋々あの武者を殺すために馬を走らせた。

そして現在に至る。

「くそつさすがに追いついてきたでござるな」

武者は短く舌打ちをすると馬の手綱を強く握った。馬は自身に鞭打ち、自身の主の要望にこたえようと速度を上げる。

しかし、追手と武者の距離はどんどん縮まっている。

何事かと武者はさらに強く手綱を握り、心の中で馬に命令した。だ

が武者の馬の速度がこれ以上上がる気配がない。

そこで武者は漸く気がついた。自身の馬の疲労はピークに達しており、限界が来ていることに。

（もうここまででござるか。春風よ）

自身の愛馬、春風の限界を悟った武者はこれまで無理を強いてきた春風に心の中で謝った。

（よく頑張ったでござるな。これまで無理を強いてきて申し訳ないでござる）

その心の言葉を聞いた春風は疲労で足を挫き、林道に派手に転んだ。蔵からとばされた武者は受け身を取り、春風に駆け寄る。春風は口から泡を吹き、既に息絶えていた。

申し訳ないと武者は春風に謝り、武者は春風の脇に転がっている自身の家の家宝である刀を片手に遠くへ、遠くへと走り出した。

鎧が重く、普段よりも速度が出てないが武者は速かった。

あの將軍に仕えている中ではとても速いほうであつたと武者は思っている。

しかしそんな武者でも馬には敵わず、すぐに追いつかれてしまった。馬から降りた追手の武士たちがそれぞれ刀を抜き、構える。

武者は舌打ちをし、後ろに後退していく。

追手の武者たちはいつでも斬りかけられる状態であつたが、何故か斬りかかることをせず、ジリジリと武者との距離を詰める。

その時、一人の武士がどこか悲しそうな顔をして武者に問いかけた。

「本当に、あなたが斬り殺したのですか？」

武者は首を振り、武士たちに否定の意思を見せる。

「拙者は斬り殺していないでござる」

「では何故、あの場に猩星様を斬り殺したと思われる刀があなたの刀なのですか？」

えっ？と武者は言葉に詰まった。

確かに数日前にあった自身の刀の一本が紛失しており、何処かおかしいなとは思っていたがまさか……………。

「その刀の柄にはあなたの家の家紋である美しい椿の花が刻まれていました」

やられた。まんまと自分に悪意のある誰かに濡れ衣を着せられた。

「しかし、拙者は斬り殺していないでござる」

「…………… 本当に？」

「本当でござるー！」

武士たちはお互いに顔を見合わせ、やはりなという納得したような顔をしていた。
が、

「しかし、將軍様の命令に逆らうことはできません。我々にとってはできれば斬り殺したくはないのですが…………… 榊、ここで大人しく斬られてください」

武士たちは決意を込めた顔で武者…………… もとい榊に斬りかかってきた。

榊は仲間たちに刀を向けられて心底悲しそうな表情で、自身の刀を鞘に収めたまま武士たちの刀を弾く。

そして一人、また一人と武士たちを気絶させていく。

それは見事な技であった。

流れるような動作で刀を弾き、そのまま手刀や鞘におさめた自身の刀で次々と気絶させているではないか。

しかし、なにしろ数が多い武士たちに押されまた一步、また一步シリジリと後ろに後退させられている。

榊の見事な技をもつてしても、殺さずにこの数の武士たちをおしかえすのは無理があつた。

榊がちつと舌打ちをしたその刹那――

「っ……………！」

ガラッという音とともに小石が崖の下に落ち、崖の下にある海に落ちた。

いつの間にか崖のほうへ押されていたのを榊は気づいた。

榊はこの日何度目になるかわからない舌打ちをする。

それは上段から振り下ろされた刀を自身の刀でうけ、弾きとばされたタイミングと同じタイミングでしていた。

勢いよく海に落下する榊は心の中で人生最初で最後の悔しい気持ちになった。

そして榊の意識は極寒の冬の海の冷たさを全身に感じ、何か海の生物の口に入るような食べられる恐怖にかられて途切れた。

プロローグ（後書き）

とても久しぶりに書く小説で、このようなサイトに投稿するのは初めてです。

とても素人で文法なんかが全然できていないと思います。
指摘、感想、などを一言でもいただけたら嬉しいです。

壱話 釣られる。

壱話 釣られる。

(……………？ここは噂に聞く地獄でござるか？)

食べられてからしばらくして榊が目を覚ました場所はとても薄暗い洞窟のようなところであった。

かつて幾人もの人を斬り殺してきた榊にとって、彼のような武士は基本的に地獄におちるのが当然である。

人を斬り殺すというのはとても大きな犯罪である。

たった一人でもその罪は重いというのに、榊の場合は桁が違う。

地獄にいると噂される閻魔大王にとっては気色悪い笑顔を浮かべながらウエルカムと歓迎できるほどの人間だ。

「それにしてもなんか臭いでござるな」

榊は食べ物腐ったような臭いやなんかの動物の死体の悪臭が混ざったような臭いに鼻を手でつまむ。

しかし榊は鼻を手でつまんだ瞬間ふと疑問に思った。

(？なんか声がおかしいでござるな)

榊は試しに声をあーと出してみる。

甘く、少し高い声が喉元から聞こえた。

(！？)

榊は自分の籠手はずし、自身の喉元に手をあてる。いつもならそこにあるゴツイ喉仏が無くなっていた。おまけに自身の腕が多少細くなり、短くなっている。

薄暗いのでよく見えないが、将軍に仕えていた頃に城下町で見た町娘にそっくりな腕をしていることがよくわかる。

榊は絶句した。

今ここに鏡があれば今すぐにでも見たいという衝動に駆られる。

榊はとりあえずじっとしていてもはじまらないと思い、籠手をつけてから榊の近く周辺を調べてまわることにした。

（地獄は最悪でござるな。臭いしなんかヌルヌルしている物が多いし、ごちゃごちゃしているしおまけに体が重いでござる）

体が重いのは地獄のせいではなく、榊が幾分か背が縮んだことが関係しているが榊は気がつかない。

なんだかさつきから調べていて見つかるものが白骨化した死体やら古くなった木造の家具だとか金貨の入った宝箱ばかりで榊は調べ始めて早々に飽き始めていた。

「つまらんとっても地獄なのだからしょうがないでござるな」

甘い声が誰もいない空間に空しく響く。

それにしても、と榊はあというため息とともにひとつわかったことがある。

（さすが地獄でござる。かなり広いでござる）

榊はもう数キロ近く歩いているはずなのだが、いつこうに進んでいく感じがしない。

死体なんかは無視していたが、金貨は無視することができずに近く

に落ちていた手頃な麻の袋に詰めている。

「何処の国の物かは知らないでござるが集めておいて損はないはずでござる」

榊は昔から金銭を集めるのが好きだった。

というか少しばかり強欲であつたことは自分でも自覚している。

盗人をとらえたときにちよつとばかり盗人の所持金からくすねておいてから盗人に盗まれた金銭を商人に渡したりなどして、將軍に褒美に多額の金銭を要求して貰つたりすることがたまにあつたのが良い例だ。

今思い出すとなんてことをしたんだろうなと榊は苦笑いをせずにはいられなかった。

ところはかわつて、ある海に浮かぶ小船。

「なんか今日は全然釣れませんね」

「そうだな。こういう天氣の良い日に限って釣れないな」

金髪碧眼の若い青年たちはのんきに釣りを楽しんでいた。

二人でのんきに釣りをしているさまはまるで二人並んでお茶をすすめる老人の雰囲気似ていなくもない。

この二人は料理人見習いである。

いつもはどこかの大きな屋敷の厨房でガタイの良く、強面な通称親方の料理長にビビりまくりながらきびきびと皿洗いをしたり、厨房を掃除したり、庖丁を研いだりetc.....と数えきれないくらいの仕事をやっている。

今日は偶々親方に魚を釣ってこいと言われ二人して喜び、嬉々として船をこぎだす。

そして海に糸をたらし数時間このままで現在に至る。

「それにしても、あの鯨でかくないですか？」

「そうだな。なんかかなりデカイ鯨だな」

一見美少年風の青年は左手ですぐ近くにいた鯨を指差す。

それにああ。と答えるちよつと髭が伸びてきている見た目おじさんのような青年興味なさそうである。

この二人は二人揃って屋敷の中ではのんびり屋、悪く言うとサボりという印象がもたれている。

ちよつと二年前から親方はこの二人に目をつけて教育をしているけれども、この二人は二年前からいつこうに変わる気配がない。

親方はこの頃頭痛がするとかしいとか。

「あつボル。鯨が潮吹いた」

「本当だな。傘をさすか」

ボルと呼ばれたおっさん風の青年はビニールの傘を美少年風の青年に放り投げる。

それを美少年風の青年は釣り竿を左手に持ち替え、右手でキャッチする。

ありがとうございますというお礼の言葉を添えながら。

サアアアという小雨のような潮が上から降ってくる。

「おおっ虹だ！見てみるよ。ゴールド」

「いつ見ても虹というものは綺麗ですねえ」

ゴールドと呼ばれた美少年風の青年はのんきに空を見上げる。

と、その時何かがドッパンという派手な音をたて、水飛沫を二人にかけながら船の近くに落ちた。

「なんか落ちましたね」

「気にするな。それよりも濡れちまったな。最悪だ」

せつかく新しい服だったのにとボルは唇を尖がらせて鯨にキレかかっている。

それをゴールドはなだめて、そろそろ帰りましょうかとボルに提案する。

「そうだな。帰るか」

服がぬれてしまい、風邪をひきそうだった二人はそろそろひきあげることにした。

一方船の近くの海中

（溺れる！拙者は泳げないのでござるよお！）

榊は金貨集めの最中に鯨の潮吹きによって吹き飛ばされた。

あまりに突然のことに頭がパニック状態になっている榊は必死に海中でもがくも、鎧兜や刀、金貨等の重さのせいかどんどん沈んでいく。

もうだめかとあきらめかけた時、榊は見慣れた系につながった釣針のようなものを見つけた。

（不幸中の幸いでござるな。ひきあげてもらつとすゝむでござる）

榊は上にあがりかかっている釣針につながった釣り糸をまるで神の救いの手かのように感謝しながらつかまる。
そして力強くひく。

「なんだあ？」

「魚ですかね？ひきあげてみましょう」

上から聞こえてきた二人の青年の声に感謝しながら榊は早くひきあげてくれと願う。

「ん？こりやかなり重いな」

「手伝いましょうか？」

「ああ。頼む」

「それではいきますよ」

せえのつという合図とともに榊は一気に引き上げられた。
ふうと榊は息をはくと二人の青年と目があつた。

「リリースしますか？」

「そうするか」

言葉の意味はわからなかったが、海に戻されそうになったので榊は慌てて手を合わせて懇願する。

「戻さないでくれでござる！拙者は泳げないのでござるよ！」

その言葉に二人は顔を見合わせた。

まさか生きてるとは思わなかったからである。

「取り合えず、このお嬢さんをひきあげますか？」
「そうだな」

その言葉に榊はむっとしながらも助けてもらったことにはかわらない
と思い、二人に改めて感謝する。

そして榊は徐々にひきあげられていったのであった。

壱話 釣られる。(後書き)

なぜか榊の性別が変わっていたことに自分でもびっくりです。
当初の予定では性別を変えるつもりはなかったのですがねえ。

指摘、悪い点、良い点、感想など一言もらえたら嬉しいです。

式話 驚く。

式話 驚く。

よいしょという青年たちの掛け声と同時にひきあげられた榊は全身から力を抜いて、ふうと小さく息を吐いた。

（いやあ、拙者はまだ死んでいなかったのでござるな。よもや地獄だと思っていた場所が鯨の中だとは全然気付かなかった）

そのようなことを青年たちから聞いた榊は内心ほつとしていた。自身が死んだ身ではないとわかり、少しばかり安心したからである。さつきからけっして広くない船のなかでうろうろしながらこつちをジロジロみている青年二人の視線が多少気になったが無視することにする。

「しかし、ここはどこでござる？」

「それはですね……………ここはリユート湾の真ん中よりもちよつとずれた位置にある船の上ですよ」

うわつと榊は自分の声なのかと疑いたくなるほどの驚きの声をあげて後ろを振り返る。

そこには榊から見ても美少年と思わせるような顔をした青年がニコニコしながら立っていた。

（拙者の背後がとられるとは……………一生の不覚でござる）

榊は背後をとられたことに心底落ち込んだような表情を顔に浮かべる。

そんなことはお構いなしに美少年風の青年はなにやらペラペラと喋

っている。

数十分後にやっと気持ちを切り替えた榊の耳に聞こえてきたのはどうやら女性を口説くときのような褒め言葉や、今度食事にも行きませんか？というような誘いの言葉であった。

男である榊はそんな言葉を聞いても嫌悪感や吐き気がしてついついうつぶと口を押さえてしまった。

「大丈夫ですか？もしかして船酔いなんかしやすいタイプの方ですか？」

「大丈夫でござる。船にはよってはいない。むしろ、そなたの言葉についつい吐き気がしていたでござる」

「あっそれはすいません。あまりにもお綺麗だったものですからついつい熱がはいってしまいました」

てへつと舌を少しだして謝る美少年風の青年の仕草を見て榊は背筋がぞつとするような、鯨に飲み込まれた時のような時のような恐怖を味わった。

その様子を遠くから見ていた一見おっさん風の青年は両手を合わせて謝っていた。

榊はその謝りがなかったらあまりの恐怖で命の恩人であるこの美少年風の青年を斬り殺してしまうところであった。

と、榊は重大なことに気がつく。

「そなたは拙者のことが綺麗だと言ったでござるか？」

「はい。それはもう」

やめい！と榊は頬をぽつと染める美少年風の青年を見ながら榊は激しくそう思った。

女にやられるとこの上なく気分が良くなるが、男にやられると榊は激しく気分が悪くなるのであった。

そして、榊は何を思い立ったか手をぱんと打つ。

「青年よ。鏡はあるでござるか？」

「はい。ここに」

恐ろしいくらいの速さで美少年風の青年は手鏡をさしだしてきた。それを受けとり、兜をはずしてからじっと鏡を見つめる。

そこに映っていたのはうすく髭を生やしたゴツイ若者ではなく、大きな黄緑のちよつとつりがちな瞳の他に人参のように鮮やかな橙色の髪にととのった眉やら唇やら色白の頬やらetc……など黒目黒髪だったら榊のストライクゾーンをぶち抜くような美少女が驚愕の表情で鏡の中を覗き込んでいた。

試しに榊は口を開いたり閉じたりしてみる。

鏡の中の美少女も同時に開けたり閉じたりしている。

今度は左の頬を抓ったりしてみる。

（痛いでござる）

同じように鏡の中の美少女も左の頬をおさえて痛がっていた。

榊は最終確認として、近くに来ていたおっさん風の青年に尋ねる。

「拙者の顔はどんな感じでござるか？」

「一言でいえば美少女だな」

榊は声にならないような高い金切り声のような悲鳴を上げた。

悲鳴をあげてからしばらくして、榊は諦めたのか手鏡を美少年風の青年に返す。

そして懷から短刀を取り出し、鞘から抜く。

銀色の刃が太陽の光を反射して輝く。

「ああ、思えば人生は短かった」

榊は刃を腹にもっていき、勢いよくつく。
が、その刃は腹に刺さることはなかった。

「お譲ちゃん。いきなり自害しようとするなんてよくないぜ？」

おっさん風の青年は榊の短刀を自身左手で握り、腹に刺さるのを防いでいた。

ぼたぼたと赤黒い血が垂れ、おっさん風の青年の左手の下に水たまりのようなものができていた。

それを見た美少年風の青年は急いで救急箱をとりに行く。

「なっ……………」

おっさん風の青年は榊から短刀を奪い取ると後ろに放り投げた。
短刀はくるくると回転して海に落ち、沈んでいく。

「なんで止めたでござるか」

「そんなの簡単だろ。命を粗末にしてほしくないからだ」

榊の質問におっさん風の青年は左手を痛そうに右手を傷口にあてる。

「せっかく助けた人に目の前で死んでほしくなかったのも理由の一つだ。それがお譲ちゃんのような美少女だったらなおさらだ」

「拙者は男であり武士でござる。それゆえに女になり戦えなくなる
と拙者の存在意義が無くなる。そんな拙者は自分でも嫌だ。自害し
ようとするのは拙者の勝手であらう」

その言葉を聞いたおっさん風の青年は顔を顰める。

「お譲ちゃん……いや、あんた。ふざけんなよ？」
「……っ？」

おっさん風の青年は一気に顔を激怒の表情に変えた。
その表情に榊はびくつとする。

どこか、自分の今は亡き父親の面影を感じたような感じがしたと榊は思う。

「あんたの事情なんて知ったことじゃねえけど、いくらなんでも自害はやりすぎじゃねえ？戦う以外にも生き方があるだろ？」

「……拙者には戦うこと以外にはなにもできないでござる。勉強もあまりできない、字も少ししか読めない。拙者には武しかないのでござる」

「そんなの、俺も料理以外にはほとんど何も出来ねえよ。勉強なんて良くて百点のテストで九点取ったことしかねえよ」

榊はその言葉に絶句した。

自分の父親にとてもよく似ていたことに。
本当に良く似ている。

「もし、あんたに武しかないにしてもまだ戦えないと決まったわけではないだろ？」

「女でも戦えるでござるか？」

「当たり前だろ！？家のおふくろなめんなよ？かなり強いからな」
「ほう。そなたの母様は何をしているのでござるか？」

榊はおっさん風の青年に質問をする。

その嬉々とした榊の質問に怒りの色をなくしたおっさん風の青年はふふんと鼻を鳴らす。

「家のおふくろは大傭兵団「焔」の団長、エイアだ！」

「それはすごい人物なのでござるか？」

「当たり前だ。家のおふくろの二丁拳銃の前には敵は全員蜂の巣よ！」

「女でそのような者がいるとは……………世界は広いでござるな。ところで銃とは火縄銃のこととござるか？」

「火縄銃？大昔にそんなものがあつたような気がするが、それは何億年も前の異世界の話だ。あんな旧式の武器は存在しねえよ」

異世界！？その単語に榊は驚いた。

聞きなれないような単語であつたし、何より將軍に仕えていた頃に聞いた噂では今自分たちがいる世界とは別の世界らしいということだけだ。

兎にも角にも、榊は自分はまだ戦えるかもしれないということに期待で胸を膨らませていた。

榊の心の中にはもう自害のじの字も無かつた。

弐話 驚く。(後書き)

弐話更新。

指摘、感想、など一言でもいただけたら嬉しいです。
それでは。

参話 連れ帰られる。

参話 連れ帰られる。

あの後、青年の二人の名前などを教えてもらうなどして榊は二人の青年と仲良くなった。

これから榊は第二の人生を………女として、一人の武士として、過ごすことを決めた。

榊はこれまで女は戦ってはいけないとばかり思っていたが、その思い込みは間違いであり、別に戦っても問題はないということを青年………ボルから言われ、嬉しかった。

自分自身の武を捨てなくてよくなったことが榊にとってはなによりも嬉しかったのだ。

榊が喜んでいる間に榊達が乗っている小船は大自然の森にぽつんと寂しそうにある栈橋にたどりついた。

若い男二人がかりで漕げば案外早く着くものである。

「それでは、案内しますね」

「よろしく頼むが、本当に大丈夫でござるか？」

「大丈夫ですよ！スーお譲さまはとてもお優しい方ですからね」

榊の心配………雇ってもらうもとい、仕えられることができるのかという心配で榊の胸ははちきれそうなくらいに不安で一杯であった。

新たな主に一生の忠誠を誓えるのか、忠誠を誓うほどの器がある主人なのか、そもそも雇ってもらえるのかということができるのか………

………考えれば考えるほど榊の気持ちは落ち込んでいった。そんな時、榊の鎧で覆われた肩をボルがポンと軽くたたく。

「ゴルドの言うとおりだ。大丈夫だぜ？ 榊譲ちゃん」
「譲ちゃんはいらんでござる。榊でいい」

兜に覆われた榊から聞こえる甘い声にボルは内心声に癒されるなど
思いながらへいへいと頷いた。

「心配してくれたのは素直にうれしいでござる。ありがとう」
「どういたしまして」

そうさつきから変わらぬ態度で答えながらボルは内心いやっほう！
とうかれていた。

（幸せそうですね。ボルは）

ゴルドはボルの榊に惚れているのではないかということにさつきか
ら気がついていった。

ボルと大体いつも一緒にいるゴルドはいつの間にかボルの心が読め
るようになっていた。

態度が変わらなくても声や顔の些細な変化でわかってしまうゴルド
はボルのことを考えてため息をついた。

（あなたの恋は多分今回も失敗しますよ）

ボルはこれまでおっさんのような髭の濃さや雰囲気で女性にモテた
ためしがなかった。

しかも今回はレベルが高い。

本人が言うには元男だったというのだから男には興味ない。

全戦無敗の自称ラブハンターの自分がアタックしてみても吐かれそ
うになったくらいだ。ボルはてんで駄目だろう。

（まったく、なんでボルは本当に難しい恋をするんですかねえ？）

まあ、あのくらいの美少女であつたならば恋をしても無理はないだろう。

ゴルドは今回もボルを温かい目で見守ることにした。

「それにしても重いでござるな」

榊は以前とは大きさのあわなくなった鎧兜を着込んでいるせいか動きが危なくなつていった。

刀も重そうに見えるが実を言つと、榊の刀は昔からそんなに重くない。

榊の今の刀は昔から同じで、榊の家の家宝であつた。

代々受け継がれてきたもので、その刀はとても頑丈なくせにととても軽い。

おまけに斬れ味もよく、斬れぬものはないといわれるほどだ。

異世界から持ち込まれたものだといわれているが本当のことは誰も知らない。

榊の家のもので。

「榊、なんかぶかぶかで歩きにくいだろ。鎧脱ぐか？」

「武士の誇りでござる。脱ぐ気はない」

「じゃあ、刀重そうだから持つてやるよ」

「武士の誇りでござる。自分で持つ」

「じゃあ、兜だけでも」

「武士の誇りでござる。脱ぐ気もなければ持つてもらつ気もない」

「ボル。無駄ですよ」

「むう。気遣つただけだな」

その言葉に榊は反応を示すかと思えば、今度は何の反応もなかった。

（あれ？）

（あなたには無理ですよ。この方は男の時の心のほうが強い。それゆえに男には微塵も興味がない。諦めなさい）

青年二人のアイコンタクトに気付いた榊は頭に？マークを浮かべていたが二人は気にしない。

諦めきれないボルはゴールドに再びアイコンタクトをとる。

（最終手段として襲ってみるかな？）

この方は鬼神と呼ばれていたそうです。死にたければどうぞ、ご勝手に

「おい。ボルよ、お前は良からぬことでも考えているのではないかな？」

その榊の何でもないような言葉にボルは絶句した。考えていることが見抜かれているなんて……………。

「そんなことはない。なあ、ゴールド？」

「どうでしょうかね？案外そうかもしれないよ」

おい！ボルは内心舌打ちした。

こいつ……………とボルはゴールドを睨みつける。

「はは。怖いですよ、ボル」

「お前なあ……………」

「どうやら凶星のようでござるな。成敗してくれる」

シャツと榊の刀が抜かれる。

銀色に光り輝く刀身はこの上なくおっかない。

「まで、落ち着け榊！落ち着くんだ！」

「拙者は女の敵になりさがったボルを許しはせんでござる。覚悟！」

「お前は確か男……………」

「元でござる。今は女だ」

ゴルドは周りを愉快に走りまわる内心愉快ではない榊とボルを微笑みながら眺める。

それにしても、ここが森で良かったですね。榊。市街地で刀を振り回して人を追いかけていたら間違いなく捕まりますからね

ゴルドはそんな事を思いながら立ち上がり、手をパンパンと二人に聞こえるように叩く。

その音を聞いて一瞬止まる榊とボル。

しかし、文字通り一瞬であった。

すぐにまた走る。

「そろそろ屋敷につきますよ！」

「何！？」

その言葉を聞いてボルは急停止する。

「せいやっ！」

「のわあ！」

間一髪ボルは榊の上段からの振りをかわす。
そこから榊は突きにもっていく。

「諦めるでござるー！」

「榊、雇われたくないのですか？」
「うっ……………」

ボルの首元で榊の刃が止まる。

ボルは目を瞑り、死を覚悟したような顔で口をパクパクしながら手を合わせていた。

榊はちつと舌打ちをして刀をひき、鞘に戻す。

「ここでこのようなけしからん奴を成敗できぬとは悔しいでござる」
「助かったのか？」

「榊、殺すのはやりすぎです。痛めつける程度のほうが良いと思います」

「お前、俺の味方じゃないのか？」

「僕は誰の味方でもありませんよ」

にっこりと、笑う。

その笑みはボルにとって悪魔の笑みであった。

「ほら、屋敷はもう目の前です。早く行きましょう。あまり遅いと親方に怒られます」

「そうだな」

ボルよ。いつか貴様を……………」

結果的にボル達は魚ではなく、榊を釣り上げて連れ帰ることになった。

親方にたつぷり怒られることを覚悟しながら二人は榊を連れて屋敷の扉を開けた。

参話 連れ帰られる。(後書き)

なんか文章が雑になったような気がします。
暑さのせいでしょうか？

感想、指摘など一言お待ちしております。

四話 いただく。

四話 いただく。

木製の古い扉がギィ……………という音をたてながら開く。

その扉はなんだか無駄に厚く、重そうであった。

そんな扉とは対照的に中から温かな光が漏れ、桝達を照らす。

「親方！只今帰りました！」

扉を開けて、桝の目にとびこんできた物は大きな厨房だった。

いくつもの白いいろんな食器やら鍋やらの料理器具がたんまりとつめられている収納机が間隔をあけてどこまでも続いているんじゃないかと思わせるくらいにズラツと並んでいる。

そして、桝が一番最初に感じ取ったものは匂いであった。

肉や魚の焼ける香りや、果実の甘い匂いなど、桝の腹がきゅううとなるような匂いが厨房内に充満していた。

「おい、桝。腹が鳴ってるぞ」

「すまん。拙者、一晩なにも食っていない。腹の虫がここにきてから騒いでるでござる」

「いや、しかしな。途切れずに鳴り続けているのは不自然だろ」

ボルはさつきから可愛く鳴り続けている桝の腹の音ににやにやしゃばなしであった。

ボルはどうしようもない変態であった。

ゴルドはボルを見て呆れていた。

こればかりはゴルドでも嫌悪感を抱く。

そこでゴールドは何か思い出したように自身の腰についているポーチから包みを取り出した。

「榊、口を開けてください」

「!？」

榊の口に入れられたのは、一口サイズのゴールド特性塩結びであった。もちもちの米と少々控え目な塩分が見事にマッチしている、ゴールドの自信作であった。

「いきなり何を食わせるのかと思えば、塩結びでござるか。懐かしいでござるな！」

「味はどうですか？」

「母様の物に味がとても似ているでござる。正直、旨い」

「それはよかったです」

ゴールドがにっこりとほほ笑む。

榊が嬉しそうに頷いているのを見るとなぜか頬が緩むのは気のせいではないらしい。

ボルも気色悪い笑顔を顔にはりつけているからだ。

おっさん顔で笑顔は合わないとゴールドは思った。

しかし、榊の腹の虫は鎮まるところか強く鳴りだした。

「っ……………なんかすごく恥ずかしいでござる」

「いまちよつと響いたからな」

なにせ、人がいつもよりも疎らだった。

昼はもう終わって、皿洗いも済んでいるのを見ると、町に買い出しにでも行っているかもしれない。

「おい、ボルにゴールド。さっきの音はなんだ？」

厨房の奥から大きな足音をたてて、巨漢でゴツイ強面の男がこちらに歩いてきた。

多分あの男が親方だろうなと榊は思った。

「ああ、親方。いらしたんですか」

いたのかよクソ野郎

「誰がクソ野郎だ？ボル？」

「そんなこと言ってないっすよ親方」

「ふん。どうだか」

親方と呼ばれた人物の目がとても怖い。

どこか人斬りの目に近い感じがしたが気のせいだろう。

で、と親方は榊のほうに視線をやる。

「まず最初にこいつは誰だ？そして次にさっきの音はなんだ？最後に魚は釣れたのか？順番に答えろ」

「はい」

ゴールド頼む

わかってますよ

親方は自分が疑問に思っていることをペラペラと喋った。

その説明にボルはゴールドにあとはまかしたというアイコンタクトを送り、ゴールドは了解した。

「まず最初にこの方は榊。元男で話を聞くところ異世界の人間であり、武士という職業についていたそうです」

「元？」

榊

わかった

ゴルドのアイコンタクトで榊は兜をとった。

最初にさらっとした腰に届きそうなくらい長い髪の毛が現れ、次に美しい色白の顔が親方の目の前に現れた。

「こいつがか？信じられる話じゃないな。どっからみても品のあるどこぞのお嬢様って感じだろ？」

「お初にお目にかかる。拙者の名は榊。以後よろしく頼むでござる」

「拙者？ござる？珍しいしゃべり方をするな。俺の名はゴンザ。料理長って呼んでくれ。くれぐれもそのバカ二人のような呼び方はしないようにな？」

「承知したでござる」

榊はにつこりとほほ笑むとゴンザに了解の意思を伝える。

その榊を見たゴンザは一瞬あまりの可愛さで理性の箍がとびそうだったが、なんとか耐える。

「まあ細かいことは後だ。次」

「さっきの音は、この方のお腹の音です」

「？なんだ。お前腹減ってるのか？」

「恥ずかしながら、一晩何も食べてないでござる」

「そりゃ駄目だ。健康には朝昼晩の三食を抜いたらいかん。後で軽くなんか作ってやる」

「それはありがたいでござる。ご馳走になる」

再び榊はにつこりとほほ笑む。

今度はお辞儀もつけて。

ゴンザの理性がまたもやとびそうだったが、意地と根性でつなぎとめる。

「次」

「魚は釣れませんでした。かわりにこの方が釣れました」

「は？なんで魚じゃなく、人が釣れるんだ？」

「さあ？」

「さあ？じゃねえよ」

「怒らないでほしいでござる。この二人は拙者の命の恩人でござる」
「なに？」

「拙者が鯨に吹きとばされ、海に落ちているところを親切にひきあげてくれたのでござる」

「そんな漫画みたいな話……………」

ゴンザはそこで言葉に詰まった。

無理もないだろう。榊が目を潤ませて必死に二人を守ろうとゴンザにうつたえている姿を直に見てしまったのだ。

ゴンザの中の意地と根性でできた理性の箍も耐えきれず、はずれそうにあった。

いや、もう音をたててはずれてしまった。

「うおおおおおっ！」

「ひゃっ！」

いきなりゴンザが獣のような声をはっしたかと思うと、ゴンザは榊にとびかかろうとしていた。

いきなりすることに榊は情けない声を出して尻もちをつく。

「親方！理性を取り戻してください！」

「くそっ、榊、下がってろ」

ボルがゴンザをおさえている間にゴールドがバケツ一杯の水を持って

くる。

それをゴルドはボルが全体重を乗せてゴンザを床におさえつけた一瞬の間にゴンザの頭の上で逆さにする。

バシャアと水がゴンザの頭に音をたてて降り注ぐ。

「ん？俺は何をしようとしていたんだ？」

「間違いなく、男として最低なことをしようとしてました」

「ほんと、危ないところだったな」

その言葉を聞いて尻もちをついている榊のほうを見る。

そしてゴンザはあちゃあと額に手をあてた。

「すまなかった榊。まさか理性がとぶとは思わなかった」

「こつちこそ何かしたような感じなので謝るでござる」

ふむ。女つぽくやってみるとこれほどの力が生まれるとは……予想外でござる

この後、榊はお詫びの印として和食を作ってもらい、たらふく食べさせてもらった。

意外にも榊が大食いでおかわりしすぎたせいか材料がほぼ無くなってしまった。

「ボルにゴルド。町に買い出しに行つて来い」

「ええー。自分で行けばいいじゃないですか」

「俺も向かう。しかし榊が予想外に食うものだから人手がほかにも必要になったんだ。文句を言わずに行つて来い。俺も後でいくから」
「へいへい。わかりましたよ」

渋々ゴルドとボルは身支度を整えて玄関に向かった。

「そういえば料理長殿。こちらは入り口ではないのでござるか？」
「そっちは裏口だ。入り口はここからでて右にまっすぐに行くところ」

ゴンザは今さつきボル達がでていった桝達がいる厨房の一番左側にある金属製の扉を指差しながら説明する。

「そうそう。スーお譲さまには話はさつきお前さんが食べてるときに通しといた。入り口の近くにあるエレベーターにのって十階のボタンをおせ。ついてエレベーターからでたら目の前にある扉にノックして部屋に入れ」

「？」

「お前さん、ここで働きたいんだろ？それも戦闘系で。そういうことしたいんならお嬢様の指示に従いな」

「それはありがたいでござる。しかし、えれべーたーというものは何なのでござるか？」

「お前さんの世界にはないだろう乗り物だ。とにかく入り口付近に行け」

「わかったでござる。それではご馳走様。世話になったでござる」
「ああ。じゃあな」

桝は金属製の扉の隙間から見えるゴンザに手をふる。

ゴンザは後ろ向きに左手をパタパタさせていた。

「さて、いくでござるか」

桝は心を落ち着かせると、力強く歩きだした。

四話 いただく。（後書き）

今回はちよつといつもより長いです。

そのぶん、雑になっているかもしれませんが、お楽しみいただけ
ら嬉しいです。

指摘、感想など一言お待ちしております。

それでは。

伍話 従者

伍話 従者。

「それにしても」

榊は、はあっとため息をついた。

歩きだしてかれこれ何分経っただろうか………いまだに終わりが見えてこない廊下を榊は大きな合わない鎧をガシャガシャいわせ、よろよろしながら歩いていった。

榊の右横にも左横にも見えるのは木製や金属製の扉のみ。

疲れたわけではないのだが、いい加減違う風景が見たくなった。

先ほどから榊の横をフリフリのスカートを穿いた従者のような女性や、黒いスーツに身を包んだ同じく従者であろう紳士がなにか奇怪な乗り物に乗り、前に乗り物についている棒のような物を体と一緒に前に傾けながら進んでいるのをよく目にする。

しかしその奇怪な乗り物に乗っている従者たちは少数の切羽詰まった顔をしている者たちだけであった。

多くの者達は榊と同じく徒歩であった。

しかし、ガシャガシャいわせて騒がしく歩いているのは榊だけであった。

他に物音と言えはあの奇怪な乗り物から聞こえるウィーンという音だけである。

知らんぷりしていた榊だが、さつきから痛いほどの視線が榊に向けられていることに気づいていた。

兜していて良かったでござる

榊はあの後しつかりと兜をつけていた。
無論、人の目から自分の顔を隠すためである。

「ちょっとその女性よ。質問をしてもよいか？」

「！？……………どうぞ」

この人女性！？

榊はちょうどま横を歩いていた女性の従者に声をかけた。

女性はまさか榊が女であることはまったく気づいてなく、男なのか
なと思っていた。

まあともかくちょっと厄介そうな人に話しかけられたなど日頃の自
分の趣味の人間観察を呪った。

「おぬしらが乗っている奇怪な乗り物は何なのでござるか？」

「はい。あの乗り物はセグウェイという乗り物です。体を前に傾け
ると前進し、後ろにレバーと一緒に体を傾けると停止する仕組みに
なっております」

この人ござるって言ったー！漫画でしか見たことない

「せぐウェイ？」

「まあ、発音はどうでもいいですね。はい」

女性従者にはつこりとほぼ笑みながら奇怪な乗り物について説明す
る。それを榊は口を半開きにしてはあとなにやら難しそうに聞い
ている。

榊にとってまたもや意味のわからない物が増えた瞬間であった。
女性従者は目の前の鎧兜と刀を身に付けた人物に興味がわいた。

「それでは、私からも質問させていただきます。あなたって、もし
やコスプレしてるんですか？」

「こすぷれ？なんのことでござるか？」

「知らないんですね。今の質問は気にしないでください」
もしかして本物のサムライだったりするのかな？

「その剣って本物ですか？」

「刀でござる。よく切れるでござるよ。なんならここでお主を斬って見せようか？」

「やめてください。その言葉は冗談ですよね？」

従者の女性は榊に質問をする。

榊はにやつと意地の悪そうな顔を女性に向けた。

「拙者、生まれて十数年……一度も冗談を言ったことはないでござる」

「すいませんでした」

「遠慮することはないでござるよ？」

「遠慮していません。あなたはそういうこととして平気なんですか？」

ああ。と榊は従者の女性に答えた。

その瞬間従者の女性は内心怯えていた。

「もう、数なんて関係ないでござるからなあ。一人二人……いや、数十人斬り殺すことなんて朝飯前でござる」

「それ、本当ですか？」

「拙者、嘘はあまりつかぬでござる」

「あまり!？」

「まあ人斬りであるということは事実でござるよ」

嘘……と従者の女性は信じられなかった。

こんな自分と年が近い人、ましてやこんなに可愛くて面白い人が人斬りなんて思わなかったからだ。

よし。と従者の女性は榊に質問する。

「あなたはサムライですか？」

「ああ。そうとも言っな。拙者の職業は武士でござる」

もしかして本当にいるとは思わなかった。

この国からずつと東にある国でもうだいぶ衰退した職業に就いている人間がいるとは……。

自分にとっては小さい頃に見た漫画の主人公が就いていた職業がサムライで、とてもかつこよく思い、船でわざわざ探しに行った覚えがある。

それほど印象に残った職業の人物がいま自分の目の前にいることに従者の女性はとても感動した。

「すいません、握手してください！そしてこの色紙にサインをくださいっ！」

「いきなりどうしたでござるかっ！？あまりにも従者らしくないぞ！？」

「この際自分の見た目なんて無視です。さあ、握手を！そしてサインを！」

榊は驚きながらもなんとか握手をする。

それに従者の女性はきやああっという黄色い声をあげ、榊にマジックと色紙を渡す。

「拙者……自分の名前しかかけないでござる。さいんというものは……」

「それで良いんです！さっ、どうぞ」

「はあ。ところで筆と墨はないのでござるか？これの使い方はわからんでござる」

「あ、やっぱりそうですよね！さすがです。すぐ用意しますね」

「？何がさすがなんでござろうか……」

榊は何がさすがなのか意味不明であったが考えるだけ無駄だと思い考えるのをやめ、邪魔にならないように廊下の右側によった。

「床に置いて書いても良いでござるか？」

「あ、やっぱりそうですね。それではこちらにどうぞ」

榊はやっぱりという言葉の意味を考えるのはやめた。理由はさつきと同じである。

ちょうど榊がいたところの木製の扉を女性の従者は開ける。

扉の向こうは十畳ほどの畳が敷かれた和室だった。

その和室を見て榊はふと懐かしく思った。

こんな変な屋敷にも和室があるとは……………やすらぐ

榊は今にも鎧兜と刀をとって着物に身をつつみ、昼寝でもしたい気分になったが女性の従者が騒いでるのでさっさとさいんとやらを書くことにする。

「あ、サヨへって最初書いてくださいね？それからサインを書いてください」

「承知した」

……………あ、

「サヨとはどういう字を書くでござるか？」

「ああ、こんな風に書いてください」

サヨがさしだしてきたメモ用紙には可愛い丸文字でサヨと書かれて

いた。

それを見て榊は頷くと、筆に墨をつけて一気に書きあげた。

「これで良いでござるか？」

「うわああつ！思ったとおり達筆ですね。一生大事にします」

「はあ。それはどうも……………う」

一気に書きあげた時にどつと疲れが出てしまったのか榊は強力な睡魔に襲われた。

その睡魔に榊は疲れのせいもあってか抵抗できずにのまれ、意識が夢の中へと連れて行かれた。

「あらあら。お疲れでしたのね」

女性の従者もといサヨは榊の寝顔を見てクスリと笑う。

そして榊の手に握りっぱなしだった筆を墨とセットで片づけた。

伍話 従者（後書き）

なかなか話が思ったよりも進みませんね。

このまま順調にいくと話数がすごいことになるそうです。

指摘、感想など一言お待ちしております。

それでは。

六話 えれべーた！。

六話 えれべーた！。

「ん？」

榊は睡魔の魔の手から意識を取り戻し、目を開ける。

「あら、榊様。よくお眠りになっていましたね。もう夜になってしまいましたよ」

「……………なに？それは本当でござるか？」

目を開けて一番最初に目に映った大きな黒目と金髪の若干長めのツインテールをもつ色白の従者の女性、サヨに榊は尋ねた。

「ええ。もうかれこれ約六時間はお眠りになっていましたね」

「そうか。しかし、サヨよ。拙者はなぜ仰向けに寝ておるのだ？」

「それはそのほうがお眠りになりやすいのかと思いましたがうつ伏せから仰向けの姿勢に変えさせてもらいました」

「では、拙者の頭の下にある柔らかい物は枕か？」

「ええ。枕といっても膝ですけどね」

「ぬうわあああつ！！」

榊はサヨの発言に慌てて跳ね起きる。

まったく自分はなんてことを約六時間もの間されていたのかと榊は自分の体温が徐々に上がっていく感じがした。

「もう。そんなに照れてしまって……………本当に可愛いですね」

榊の顔から湯気がでるかと思わせるほど、榊の顔は赤くなっていた。しかし、ふと榊はあることに気がついた。自分の体がさつきより縮んでいることに。

恐る恐る近くにあった大きな鏡の前に行き、自分の体を映してみる。そこに映し出されたのは黒い質素な着物を着たでるところはでて、ひっこむところはひっこんでいるという恵まれた体を持つ現代での表し方だと女子中高生ぐらいの少女であった。

口をパクパクと動かしている榊にサヨは右手を自分の頬にあててはあため息をついた。

「まったく……羨ましいです。その可愛さに恵まれた体。多くの女性の憧れの的ですね」

「拙者の……鍛え抜かれた肉体が……こんなことに……どこに行ってしまったのだ？筋肉の鎧よ」

「え？今何と……？」

「実は……」

サヨの悲鳴のような驚きの声が室内に響いた。榊は指で耳を塞ぎ、顔を顰める。

「それ本当ですか！？……一度でいいから男の榊様のお姿を拝見してみたかった」

「本当でござる。自分で言うのもなんだが、あれはまさしく筋肉でできた鎧であつたと思うでござる」

ああ、もう嘆いたところであの肉体が戻ることはないか。もはや過去の栄光でござるな

「でも今の榊様も十分良いと思います。こちらに来てから男性の方に言い寄られたことはないのですか？」

「ある。まったく……危うく襲われそうになったでござる」

「うわあ。やっぱり」

サヨは何故か同情していたが榊は無視をする。

「それにしても、良く簡単に信じることができるでござるな。疑ったりしないのでござるか？」

「こちらの世界はほぼ何でもありですから。そんなことでいちいち疑うなんてことはしませんよ」

あははとサヨは笑う。

その言葉に榊ははあという言葉しか返せない。

無論、「何でもあり」という言葉にである。

ということとは、あの忌まわしき妖術も例外ではないということでござるな

榊は自分の心の奥底から溢れ出てくる暗い記憶を無意識のうちに封じ込めていた。

「榊様？どうしたんですか？そんな怖い顔をして」

「なんでもないでござる。気にしないでくれ」

そうですか？とサヨは心配そうな表情をうかべ、榊の顔色をうかがってくるが、榊は無視し、なんでもないという表情を顔に張り付ける。

「それはそうと、拙者の鎧兜と刀はどこに行ったでござるか？」

榊は話題を変えるために先ほどから気になっていたことをサヨに問う。

「ああ！あれはですね、さっきお嬢様と執事の方がこちらにお見えになりました。榊様のお部屋にもっていつてしまいましたよ」

「はあっ！？拙者の部屋とは……いつの間にそんなものが」

「良かったですねえ。十階ですよ？榊様のお部屋は」

「そうじゃなくて、なんでこの屋敷に拙者の部屋があるのかと聞いているでござる」

「いやあ、新しい友達ができるなんて言っていたものですから。お嬢様張り切っちゃって。全く使っていない物置を榊様のお部屋にしてしまったのですよ」

「随分と展開が早いでござるな」

「気にしてはいけませんよ」

「そうなのでござるか？」

「そうなんですよ」

サヨは心配そうな表情からすぐに元のニコニコとした万人にうける笑顔で榊の質問に答えた。

そのサヨの返答に榊はむうと唇を尖らせる。

そんな榊を見たサヨの顔は、ニコニコとした笑顔からニタニタしたいやらしい笑顔に変わり、ぶつぶつと何かをつぶやいているが榊は気にしないことにした。

「ところで、えれべーたーという乗り物はどこにあるでござるか？」

榊の発音にサヨはプツと吹き出すも、榊の変な物を見る視線に耐えかね、元の笑顔に戻す。

「エレベーターはこの屋敷のいたるところにありますか？どのエレベーターですか？」

「なんでも入り口近くのエレベーターだと料理長ゴンザは言っていたでござる」

ええっ！あのゴリラ男が！？

「ああ。大エレベーターのことですね。これからご案内させてもらってもよろしいですか？」

「うむ。よろしく頼むでござる」

なんだか会話の途中にゴリラ男なんていう言葉がサヨの口から聞こえてきたが榊は気にしないことにする。

「それでは参りましょう」

「それにしても大きいでござるな」

「大エレベーターですからね」

あの部屋から出て、約十五分歩くと大きな柱が榊達を出迎える。

榊はこの柱が故郷にある樹齢何千何百年くらいの神木のように大きいと感じた。

さてというサヨの言葉に促されて榊は柱の真ん中あたりについている扉の前に行き、その中へ入る。

「これまた無駄に広いでござるなあ」

「無駄は余計だと思いますよ？」

榊は真っ白で無機質な空間で思ったことを口にした。

それに何食わぬ顔で突っ込む。

榊が「無駄に」と口にしたとおり、エレベーターの中は広がった。百人ぐらいは普通に乘れる広さだとぱっと見から理解できる。

榊達の他には両手で数えられるほどの従者たちしか乗っていないた

め、榊達の声は案外目立つ。

「それにしても、ここに来るまでの間の人の視線が痛かったでござる」

「榊様の恰好は珍しいですからね。まあ何人かけしからん視線をむけていた従者もいるようですが」

榊は元男だったため、ここの紳士風な従者たちの気持ちは分からなくでもない。

自分もついつい目がいつてしまっただろうと榊は思う。

「まったく……………これだから男というものは」

と、サヨは何故か自分の体と榊の体を見比べる。
そしてうつとりと榊を眺める。

「どうした。拙者に何処がおかしいところがあるのでござるか？」
「いえいえいえ！なんでもございません」

何故かいえを三回言うサヨのことを榊は変な奴だなと思う。
なんでもないと言うわりに自分の体と榊の体を比べるサヨは一種の変人かもしれない。

ウィーン……………チーン！

「あ、着いたようですね」

「そのようでござるな」

気がつけば榊達以外の人間はもう乗っていなかった。
そのせいか、榊は柄にもなく緊張していた。

榊はハア……とため息をつく。

「緊張してますか？」

「ああ」

「大丈夫ですよ。気楽にいきましょう」

「そうでござるな」

榊は気を引き締めると、サヨとともに大エレベーターの扉にむかつて歩きだした。

六話 えれべーた！。（後書き）

随分とお待たせしました。

（まだ読んでくれている方がいらっしやるのかわかりませんが）
今回なんか急展開してる感じがしますけどどうでしょう？

指摘、感想など一言もらえると嬉しいです。
それでは。

七話 契約（前書き）

すいません。

来週から学校があるので投稿ペースが遅くなります。
それではお待たせしました。どうぞ。

七話 契約。

七話 契約。

トントン。

「はい。どうぞ」

「失礼するでござる」

「失礼します」

柵は白い大きな木製の扉にサヨから教えてもらったノックをする。中から低い、男性の物と思われる声が柵達の入室を許可する。白い大きな木製の扉を開け、柵達は部屋の中へ入る。

こりゃこりゃ……真っ白でござる

柵は部屋の家具やら壁やら床やらが全て白で統一されていることに驚き、瞬きをする。

塵一つない、とても小奇麗で大きな部屋だ。

日光が大きな窓から燦燦と降り注ぐ部屋には比較的到手前のほうにある白い大きなピアノや、奥にある大きな長テーブルと白い大きな椅子が目立ち、他の物はタンスやクローゼットにショーケース等の白い家具が周囲の風景と同化していた。

部屋の奥には燕尾色のスーツを着た短い白髪のお紳士が機械的な動作で白いテーブルに置かれた白いカップに黒い飲み物を注いでおり、その隣には白い大きな椅子に腰かけた雪のように全身が白く、大きな白い丸眼鏡をかけた柵よりかは若干若そうな少女が柵達のほうを見てニコニコと微笑んでいた。

その丸渕眼鏡はまるでサングラスかと思わせるほどにレンズの白が濃く、瞳が全く見えなかった。

こうしてみると、部屋や眼鏡少女とは異なる色を持つ老紳士とサヨと榊はとても目立っていた。

まるでパレットの上の絵具みたいな感じだなとサヨはいつ来ても思う。

「おや？その黒い貴女は料理長の紹介にあつた榊嬢か？」

「はい。拙者の名は榊。以後よろしく」

「私の名はクランツ。そして、こちらのお方はスー・R・ユガ様だ」

スーと呼ばれた白い少女はぺこりと頭を下げる。

その姿を見て、榊も慌ててワンテンポ遅れながらも頭を下げる。

「あ、膝を床につけなくてもよいですよー。汚れちゃいますからねえ」

「あ、つい癖で……ははは」

榊はこの床が畳じゃないにも関わらず膝を床につけて頭を下げた自分が恥ずかしくなった。

「そういえばー、榊さんって異世界の人なんですよねえ？」

「よくわからないでござるが、そのようござるな」

本当に榊は世界があーだらこーだらという難しいことはわからなかった。

本当に、これ以上いろんな情報が一日で榊の頭に入ってきたら容量オーバーで爆発するだろう。

んー？とスーは唇と思われるところ 白すぎて、唇の赤みがほぼないため 到人差し指をあて、考え込む。

「ねえ、あなたは最初鯨の中にいたんですかー？」

「そうでござる。最初は地獄かと思っただでござる」

「へえ。それで鯨の潮吹きによって吹きとばされて、海に落ち、見習いたちに釣り上げられたわけですね。なんか漫画っぽいなあ」

「事実でござる」

「最初は漫画っぽいと普通の人は思いますからねー。そう思うですよ？クランツ」

スーは隣の老紳士に尋ねる。

老紳士は短く「そうですね」という返答を無表情で返す。

その言葉を聞いて「そうだよー」と実に軽い感じに会話をするスー。

まったく、変な組み合わせだなと榊は思う。

無表情で機械的な返答と動作をする老紳士の従者クランツ。

語尾をやたらのはし、実に軽い感じで会話をする表情豊かなスー。

なんか変な違和感を榊は覚えたが、いつも通り気にしないことにする。

「でも、スーは普通の人じゃないですから信じるんですよ」

「普通じゃないとは？」

えへへーとスーは年相応の笑顔をうかべる。

無邪気でもとても可愛らしいが、言っていることは変だ。

「普通じゃない」とはなんなのか。

この言葉に榊は興味がわいた。

自分も普通の人じゃないという感じがする榊は目の前の普通じゃないという純白の少女、スーの発言がとても気になった。

「それはですねえ……………スーは魔法使いだからですよー」

「魔法？妖術のような物でござるか？」

榊の質問にんー？とスーは説明を考えるが、途中で放棄した。

「妖術と同じというかあ、魔法と妖術は魔術の一部？みたいな感じかなー？」

「よくわからんでござる。というかなんかおかしい感じが……」

「わからなくていいよ。あなたみたいな人はこんな黒いことなんか気にしないほうがいいよ」

語尾をのばさない、真面目な口調でスーは答える。

榊はなんだか曖昧に答えを言われただけではなんか納得できないというどこか気に食わないような表情をしていたが、スーの真面目な口調での答えだったのでひとまずここは黙っとくことにする。

榊のむうーとしてる横顔を見たサヨはいつの間にか口元がにやけている自分に気づき、慌てていつもの笑顔に直した。

笑顔に直した際にサヨは鋭く刺さる克蘭ツの冷ややかな視線に気づいていたが気にしない。

いちいち気にしていたら身が持たないからだ。

余談だが従者のなかでは克蘭ツの絶対零度の視線をまともに見た人は鬱になると言われており、数人の従者はこの屋敷から去ってしまった事態が起こったことがある。

「ま、妖術は置いといてえ……スーのようなかなりレベルが高い魔法使いはこの世界に片手の指だけで間に合っちゃうほどしかないんですよー」

「お嬢様のようにレベルが高くない魔法使いはそこらへんにごろごろいますかね」

「克蘭ツう？そんな言い方は失礼だよー。魔法使いは皆頭が良い人ばかりだし繊細な人が多いんだよ？」

「私は事実を述べたまでです」

「そんな冷たいことばかり言ってるから従者が泣いてでていつちゃうんだよあ？少しは気をつけなきゃ」

「ははは。そんなこともありましたね」

クランツは笑って懐かしむような顔をしているようだが、実際には機械的に笑って無感情でぼそつと言う。ほぼ無表情なので大変気味が悪い。

榊はサヨにこの二人はなんだ？という視線を投げかけたが、サヨは困惑した顔でただただ首を横に振るだけである。

スーはぷーと頬を膨らませた表情から急に何かを思い出したようなはつとした表情になると「そうそう」と話を切り出した。

「そういえばあなたはここに働きに來たんですよねえ？戦闘関係ですかー？」

「そうでござる。拙者には武しかないでござるから」

「別に仕事を覚えればそのサヨみたいにメイドをやってもらっても構わないんだけどなあ。美人だし」

「断るでござる」

榊にとってあんなフリフリの物を着るのはまっぴらごめんである。

「そー？残念だなあ」

「そうですな」

「クランツ殿まで!？」

スーだけでなく、クランツまでもが残念がっているのはなぜだと榊は思う。

さつきから顎鬚を右手で弄り、目を細めて榊を眺めては値踏みをしているようだ。

そんなクランツを見てサヨは心底驚いたような表情をしていた。

「とにかく、めいどだけはごめんでござる」

「じゃあ、私の専属のボディーガードで」

「クランツ殿は必要ないのでは」

「冗談ですよ」

クランツが初めて笑みを表情で表わした。

その笑みはまさにクランツと正反対の好好爺の笑みそのものであった。

「じゃあ、この屋敷の戦力であるユガ邸軍隊での勤務とスーのボディーガードで」

「ぼでいーがーどとはなんでござるか？」

「簡単に言うとお、スーの護衛。あ、軍隊は必要な時だけ集まるから。鍛練は個人個人で。大体いつもスーの傍にいてくれればおっけーだよ」

「主の護衛でござるか。承知したでござる」

「それと……」

スーは榊の右手をとり自身の左手を翳すと、高速で何かを呟く。呟くこと数十秒。

榊の右手に紅い二つの剣が交差したような紋章が浮かびあがる。

「はあ、この模様はなんでござろうか？」

「それはねえ……スーの家の紋章だよ？ 契約の証し。色によっていろいろと役割が違っただけだね」

「はあ。とりあえずこれからよろしくでござるよ。主」

「うん。よろしく」

榊は新たな主に仕えることを決意する。

そのきゅっと締まった凜々しい表情を見てスーはくすつと笑う。

クランツさん。あんな目立つところに紅って……

随分気に入ったのだろう。まあ私はこれから榊譲がお嬢様と仲良くなってくれることを祈ろう

サヨとクランツの従者組はひそひそと従者同士の話を小声でする。

主と新たな契約者の今後はどうなるのかは二人にはわからない。

そんな主と新たな契約者の幸せを祈るクランツの顔はとても優しいかった。

七話 契約（後書き）

前書きに書いたとおり、投稿ペースが遅くなります。
楽しみにしているかたは申し訳ありません。

（いますかね？）

指摘、感想などの一言お待ちしております。
それでは。

七・伍話 夜 (前書き)

今回はちよいとグロいです。

七・伍話 夜。

七・伍話 夜。

はっはっは……………

満月の夜。

とある村に続く林道を少年は必死に走っていた。
体中血や泥に塗れながら、足の指の爪が割れて血がドクドク溢れる
痛みに耐えながら少年はただ走った。

途中で派手に転び、膝を擦りむきながらも拳を地面に打ち付け、体
に鞭打ち、立ち上がる。

「くそっこんな物！」

少年はボロボロでもう使い物にならない草履をそこら辺の草むらに
投げ捨てる。

目から溢れる涙を左手で拭い、少年はまた走り出す。

足の裏に尖った石が刺さっても。

何度も転んでも。

途中で吐いても。

涙が溢れても。

少年は全力で走る。

右手に長い刀をしっかりと握りしめながら。

「母様っ！皆っ！」

少年はそう叫びながら必死で走る。

自分の故郷の村を目指して。

しばらく走ると明りが見えた。

眩しいくらいの光が。

林の先から少年の目にとびこんでくる。

少年はだんだんと走るペースが落ちてきていた自分の足を左手で強く叩き、速度を上げる。

体中から悲鳴が聞こえたが無視する。

少年は唇を噛む。

さつきとは比べ物にはならないほどの涙が目から溢れる。

林に突っ込み、明りのほうへ突き進む。

鋭利に尖った葉が少年の体を切り刻むが少年は痛みを堪える。

「邪魔だあっ！！」

少年は周りの背の高い草や道を塞ぐ細い木々を自分の長い刀で斬り裂き、自分の進むべき道を切り開く。

もうすぐだ。

もうすぐ着く。

それまで無事でいてください。母様、皆。

「うらあっ！」

少年は道を塞ぐ大きな木を一太刀で切り捨てる。

よくこれだけの立派な木を切り捨てられたものだと感心するほどの巨木を。

ズザザザッ！

巨木は周りの木々を薙ぎ倒し、地面に自身の体を打ち付ける。

その巨木の切り株を超えて、少年は走る。

少年は切り株を超えて走り出した瞬間、その肌が熱を感じ取る。

とても熱い……熱風が少年の頬を擦る。

少年の唇が少年の歯によって裂けた。

血が下にポトポト落ちる。

「クソお！」

少年は数十メートル先にある光にむかって走り出した。

少年は目的地についた瞬間、絶句する。

村が……燃えている。

多くの家が、畑が、草花が、人が、動物が、燃えている。

少年は一目散にある家にむかう。
この村の中ではそれなりに大きい、自分の家へ。

母様！

何をどうしても最悪の場面ばかり頭に浮かんでくる。

少年は自分の家へ行く前に近くの井戸から水を燃えずに無事だった
桶で汲み、頭からかぶる。

ッ……！！

言葉で表せないような痛みが全身を駆け抜ける。
それを堪えて、少年は走り出す。

「畜生！」

少年は他と例外なく燃え盛っている我が家にとびこむ。
次から次にある障子を切り捨て、切り捨て、蹴破って、蹴破って、
目的の部屋を目指す。

途中我が家を支えていた大きな柱が降ってきたがそれも切り捨てる。

廊下をドタドタと、叱られるような走り方をして向かう。

「母様！」

目的の部屋の障子を蹴破った少年は咄嗟に鼻を塞ぐ。
生きた生物が焼ける何とも言えない吐き気を引き起こす悪臭が少年
の鼻をついたからだ。

堪え切れずに少年はその場に嘔吐する。

「げほ……母様！」

少年は口を拭うのも忘れて、部屋にとびこむ。
そこにいたのはかつて少年の母だったもの。

今は見る影もない。
既に死んでいた。

上と下がわかれた自分の母を見て少年はまたもや嘔吐する。

「母様………畜生！」

少年は焦げた畳に怒りで震える拳を打ち付ける。

「ははははっ！どうだ。思い知ったか小僧！」

高笑いと共に少年の後ろに杖を持ち、髪を腰まで伸ばし、顔が髪に隠れている白い布を身に纏ったガリガリの女が白い光を纏って現れた。

その姿を見て少年は絶句する。

「お前は俺が斬り殺したはずなのに……何故！？生きている！？」

クククと女は嗤う。

「簡単なこと。あれは私の分身だからだ。その証拠に貴様は私の死体を触って確認したか？」

「……」

手応えはあった。

真つ二つにしてやったからおそらく殺したものだと思った。
ろくに死体を確認せずにこちらに走ってきた。

「お前か？母様を、皆を殺り、村に火を放ったのは」
「いかにも！私の強力な術でかるーく滅ぼしてやつ」

ドゴオツ

「話してる最中に殴りかかるとはな。貴様の親父と似ておるなあ！
ハハハ！」

「お前え……生かしちゃおけない！」

少年は刀を構え、一気に距離を詰めて斬りかかる。

その一撃は女の体を斬り裂くが、女は煙となって消える。

「ははは、こつちだぞ！小僧」と女は少年の家の外へと転移していた。

ちつと少年は舌打ちをし外へ飛び出す。

「うらあつ！」

「そんな大振りでは当たるわけないだろう？」

女は軽々と少年の飛び出して助走をつけた上段からの振りを飛びのいて避ける。

着地し、女は杖を構え、高速で言葉を紡ぐ。

「ちょこまかと……このクソアマア！」

少年は叫ぶと渾身の力を込めて刀を投げる。

「奇抜なことを……無駄だ！」

周囲の家から炎が女の前に集まり、壁になる。
その炎の壁に弾かれ、刀はクルクルと回転しながら後方へ飛ばされ、
地面に刺さる。

「さて、そろそろ仕舞いにしようか？小う！？」

「それはこっちの台詞だクソアマ」

女後ろから女の左胸に小刀が深々と突き刺さり、心臓を穿つ。

「貴様……どうして……」

「俺の脚力はこの村の中じゃあ一番なんですね。かなり速いんだぞ？
それに俺の投げた刀にお前の注意がいつていたことが俺にとっての
好機であり、お前にとっての失敗だ」

少年は女に刺さった小刀をグルグルと回しながら引き抜く。

血がボタボタと地面に流れ落ち、女の白い布を赤く染め上げる。

少年は女を地面に叩き伏せると馬乗りになる。

「何をしようとするのだ！？」

「なに、簡単なことだ」

ぐさつと女の首に小刀を突き刺し、抜く。

次に首と体を切り離す。

勢いよく切り離れたためか、女の頭がごろごろと転がって燃え盛る
壁に激突する。

ゴッ！

「!？」

少年は女の手を持った杖で殴られ、くらっとするも頭をぶんぶんとして意識を保つ。

「くそ、気持ち悪い奴め！」

少年は女をバラバラにして全てを炎の中に放り投げる。

炎は何の例外もなく女の体を飲み込む。

その瞬間「ぎゃああああ」という絶叫が聞こえたが少年は無視することにする。

「自分の炎で焼かれて死んでしまえ」

少年は荒い息を整えながら、女にむかって言う。

やり遂げたという達成感からかは知らないが、少年の口の端はつりあがっていた。

「ん……と、拙者はまたあの夢を」

榊は自身の過去を夢に見た。

本当に忌々しい夢であるなと榊はいつも思う。

大体いつも夢を見るときはあの夢だ。

あの時の嫌なことがいつまでも自分の記憶にこびりついていることが榊にとっては嫌だった。

できるものなら忘れてしまいたい。

「あれえ？榊。その男は誰？」

「ああ、主の寝込みを襲おうとしてきたけしからん奴でござる。気絶させて縄で縛ってあるから大丈夫でござるよ」

榊の横には頭に大きなたんこぶをつけた黒装束の男が縄で縛られて気絶していた。

幻覚かなにかは知らないが頭の周りを鳥がとんでいるが、スーは気にしない。

「それにしても、榊はいつもあぐらをかいて刀を抱えた状態で寝てるの？」

「大体そうでござるな」

「へえ。すごいなあ」

「そういえば、いつから起きていたでござるか？」

ああとスーは「榊が何かを殴った音で目を覚ましたんだよ」と答える。

「それは悪いことをしたでござる」

「別にいいよ。それよりもなんかさっきからうなされていたみたいだけどー？」

「悪夢を見ていたでござる。なーに、もう大丈夫でござるよ」

「そう？ならいいんだけどなあ」

そういつてスーは気絶している男にむかって右手をのばし、高速で呪文を唱える。

男はまるで天に召されるようにすつと、神々しい光と共に消えた。

「どこにやったでござるか？」

「このユガ邸の地下牢にだよお？悪い人は閉じ込めるの常識だもん」

そういえばそうだった。

なんで自分は閉じ込めなかったのかと榊は自分に問いただす。
帰ってきた答えは睡魔に負けたというものだった。

それは仕方ないなと榊は心の中ではははと笑った。

「それじゃあ榊、スーはまた眠るからあ護衛お願いねー」

「承知したでござる」

スーはそんなことを言うたと自分の布団をかぶり、再び眠りについた。
それを確認すると、榊は部屋の扉にむかって言う。

「さてと、さつさと扉を開けてくるといい。曲者よ」

「ひいつ！？」

勢いよく榊は扉を開けて、先ほどの男の仲間と思われる者をぶん殴る。

その音でスーは再び目を覚ましたのは言うまでもない。

七・伍話 夜 (後書き)

なんか番外編みたいな感じで書いたんですけど、ちょっとグロかったですね？

それになんかいつもよりもヘタツピな感じがしますね。
指摘、感想等一言お待ちしております。

それでは。

八話 日常。

八話 日常。

「それにしても」

榊は白い空間の中でふと疑問に思うことがあった。

「どうしたのお？榊？」

「いえ、主。あのけしからん者共は今頃どうなっているのかとふと疑問に思ったでござる」

「ああ、あれねー」とスーはつい一週間くらい前に来た榊の言っけしからん者共もとい、夜の侵入者たちのことを思い出した。

自分の睡眠を妨げたあの者共のことはスーにとっては「あれ」と言えるほどどうでも良い者たちであった。

正直、牢に閉じ込めてからはろくに知らない。

そのことを榊にニコニコと微笑みながらスーは自分も知らないということを伝える。

「そうでござるか」

「まあ、でも大抵の場合は労働かあ一生閉じ込めとくかあ人買い商人に売るくらいだね。たまに公開処刑したりするけど」

「はあ」と榊は相変わらず軽く喋るスーの言葉を若干流しながら聞いている。

「人買い商人とは何でござるか？」

「んー？言葉の通りだよ？人を売ったり買ったりする商人のことを
そう言うんだよぉ？まあ大体売買される人は貧しい人たちだね」

知らなくて当然だねとスーは笑いながら話す。

聞かなくやよかったと榊は思う。この世界での表し方だと……カオ
スとでも言うのか。そんな暗い部分の一部分を榊はスーに実に軽い
かんじで教えられたのだ。

「ま、そこまでして稼がないと食べていけない人たちがいるのはか
わいそうだねー。でも、中には榊みたいに綺麗な人を拉致して売
り捌く人もいるから気をつけてねえ？」

「そんなけしからん奴がいるとは……始末するべきでござる」

「どれだけいると思ってるの？そんなことは不可能だよ。そんな人
間のクズは掃いて捨ててもどんどん虫が湧くかのようにそこらへん
からでてくるからね」

「……………」

いつにもなくスーは真剣な口調で喋る。

その顔に表情はなく、真っ白で精巧な蠟人形が喋っている様を見て
いるようで榊は寒気を感じた。

「まー、そんな暗くてカオスな話は置いてえ………なにか楽しい
お話でもしよー？」

「はあ………わかったでござる」

スーはさっきの無表情からにぱーとした笑顔に表情を変えて人身売
買の話から明るい話題へと変えようと榊に言う。

それに榊はまだ聞きたいような顔をしていたが、主の提案とあつて
か賛成の意思をスーに伝える。

「さて、何を話したらよいでござるか……」
「うーん……」

しかしいつもいろんなことが口について出てくるというのに今回はなかなか出てこない。

長い間の沈黙。

榊は気まずそうに視線を泳がせ、スーは笑った表情のまま蠟人形のように固まっている。

「フム。では私から。榊嬢は好きな男性でもいるのか？」

「あれ？クランツ、いたの？ごめんねー気付かなかった」

「同じく。クランツ殿の気配はまるで空気でござるな。拙者がそういうのだから誇っても良いでござるよ？」

「フム。笑いながらそういうことを言われるとさすがに私でもこたえますな」

クランツは無表情で淡々と語る。

本当にこたえているかわからないが、一応人なのでこたえているのであろう。

クランツは表情を変えことなく「榊嬢、答えは？」と答えを要求する。

「拙者、男に興味はないでござる」

「榊って……レス？」

「れずとは何でござるか？」

「知らないほうが良いと思うぞ？」

榊は自分の知らない言葉の意味を尋ねるが、クランツに却下される。榊の頭の中をもやもやが支配する。

むうと唇を尖らせる榊を見てスーは微笑する。

クラントはどこか残念そうな顔をしてため息をつく。

「それでは、好きな女性はあるのかな？」

クラントの残念そうな質問に榊は頬を染める。

ほんのりと桜色に染まる榊の頬を見てスーは身を乗り出して「いるんだね！？」と興奮気味に榊に聞く。

稀に見せる乙女の表情になったスーを見てクラントは眉を動かし、「ほお」と興味深そうに榊を見る。

「拙者が前に仕えていた將軍の一人娘、秋蓮様でござる」

「へー。今でも？」

「はい。いつも想っているでござる」

「想いを告げたりはしたのか？」

そこで榊はふるふると首を横に振る。

「なんでえ？」

「あの方は拙者ごときの武者にはもったいないでござる。それに將軍の娘。そんなことはできぬ」

「……ふーん」

「私たちの世界ではどんなかんじの恋なのだ？」

榊は少し頭をひねって答えをだす。

「一国の王の娘に恋をした兵士と言うところでござるかな。いや、大げさか」

「確かに。王の怒りをくらうのは目に見えているな」

「あららあ。そりやまた大変な恋を」

榊はため息をつく。「もはや完全に叶う恋ではないでござるな」と
呟きスー達に笑いかける。

「そんなことより、主には好きな人はいないのでござるか？」

「え？スーは皆好きだよ？クランツも榊もサヨも皆」

「それはそれは。とてもうれしいですな」

クランツはいつもと変わらぬ表情で言う。

しかし声が若干変化していることから嬉しいんだなと榊は思う。

「主は優しいのでござるな。こんな鬼神とも呼ばれる人殺しを好き
と言ってくれるとは」

「そんなことはないよ。優しくなんて」

照れるスーを見て榊は微笑む。

心の中の片隅では秋蓮のことを思いつつも、今は新しい主であるス
ーのために忠誠を誓おうと榊は改めて思った。

「それにしても榊はそんなに強かったんだあ。人もいっぱい斬った
りして」

「そうでござろうな。しかし斬ったと言えど、そんなに数は多くな
い。実際には一つの戦で十数人くらいしか斬っておらぬでござる」

「なんで？」

「拙者は相手を死なせることが好きではないでござる。それゆえ、
大抵は峰打ちで仕留めているでござる」

「じゃあ実際にはその峰打ちで仕留めた数も含めるとかなりの数に
なる？」

「そうでござるな。拙者が殺した数は多くないが、仕留めた数は多
いでござるな」

スーは感心する。あの混沌とした異世界の戦場で名を轟かせた鬼神、
榊ができる限り殺さずに仕留めていたことに。

榊がいた世界では殺した数だけ数えていたようだが、スーは榊の
実際の撃破数を数えてみたくなった。

「クランツ殿は好きな人はいないでござるか？」

ふと、またもや空気になりかけていたクランツに榊は質問する。

瞬間、榊はスーに手を叩かれた。

つい三日前に先立たれたばかりのクランツになに聞いているの！？
そうなのでござるか！？知らなかったのでつい……

スーは榊に耳打ちする。

そういえばクランツは三日前にかかってきた電話にでてから突然「
少し、お暇をください」と言ってスーの返事も聞かずにクランツは
屋敷の中を走りながら出て行った。

なにがあつたのかと榊は疑問に思っていたがまさか長年付き添って
いた妻に先立たれたとは。

「クランツ殿。すまないでござる」

「謝ることはない、榊嬢。もう過去のことだ」

クランツは相変わらず無表情で榊に言う。

「あれ？もう大丈夫なの？泣いたりとかはしない？」

「大丈夫です。泣く心配はありません。なにせ涙が枯れましたから」

いくら機械のようなクランツでも人間。

長年連れ添い、最も愛した妻に先立たれもすれば涙が枯れるのも頷

ける。

そんなことを淡々と語る無表情で機械のようなクランツが涙が枯れるほど泣いたということは到底信じられる話ではなかったが、スーの話を聞いている限りでは本当のことだと信じるしかない。

「さて、話題を変えましょうか？それともトランプをしますか？それとも外に出ますか？それとも柵讓を着せ替え人形にしましょうか？どうします？お嬢様」

「クランツが決めてー」

「わかりました」

クランツの目がキラんと輝く。

クランツの提案の中に寒気を感じる物があつた柵は身構える。

「そんなに警戒するな。柵嬢。ではお嬢様、外にでも行きましょうか」

「そうだねえ。柵も一緒にね？」

「承知したのでござる」

外に行くことを提案したクランツはどこか残念な表情をしていたが、すぐにスー専用の日傘を用意して、先に出て行ったスー達の後を追いかけた。

八話 日常。（後書き）

遅くなりました。

八話目投稿です。

少々雑ですが楽しんでくれたらうれしいです。

指摘、感想等一言お待ちしております。

それでは。

九話 外出。（前書き）

すいません。かなり遅くなりました。
申し訳ありません。

九話 外出。

九話 外出。

ユガ邸から少し離れた森林。

緑豊かでさまざまな動物が生息しているためか、学者や写真家等の人々が良く訪れる。

通称「ラファエルの森」

とてもネーミングセンスが無いと思われるような名前だが、実際にこの森を訪れて癒された者は数えきれないほどいる。

少し前から鬱病の治療のために適した場所だと医者からも絶賛されている。

癒しの天使の名前をつけられたこの森は人々から愛されていた。

しかし、いつも平穏なこの森にちょっとした問題が起きた。

この森の中を走る馬車の中から聞こえてくる悲鳴だ。

女性の物と思われる高いソプラノボイスがキンキンと森の中に響く。木々の枝にとまり、囀っていた色鮮やかな小鳥たちはその音にビビり一気に空に飛び立ち、その他の生物は巢に潜ったり馬車のほうを見て威嚇なんかしたりしている。

しかし、そのとんでもない悲鳴も数分もしないうちに止んだ。

何事か？この森の中を多くの食料品をもってユガ邸へと向かうゴリラ顔のユガ邸料理長ゴンザは馬車の前に立ちふさがった。

「その馬車。ちょっと良いか？」

「ええ、何でしょうか？」

馬を走らせていた定年間際の白髪まじりの温和そうなおじさんはゴ

リラ顔の巨漢にビビることなくその場に馬車を止める。

「さっきものすごい悲鳴が聞こえてきたんだがこの馬車からか？」

「ええ、その通りです。この馬車に乗っている三人のお嬢さんのうちの一人のものですね」

ほお……とゴンザは馬車に睨みつけるような視線をぶつける。

「ここはラファエルの森だということをわかっているのかね？そのお嬢さんは」

「まあわかっておられるとは思いますが……」

「よし、ちよつくら常識が欠如しているお嬢さんに説教してやる」

とゴンザは言うのと馬車の側面に回り込み、馬車についている窓のカーテンを開けた。

「あれー、料理長のゴリラがこんなところでなにしてるのぉ？」

「ゴリラじゃありません。ゴンザです」

「いいじゃんゴリラでー」

「……よくありません。スーお嬢様」

カーテンを開けて最初に目にとびこんできたのはゴンザの務める食堂がある屋敷「ユガ邸」の主、スーだった。

白く輝く「灯り要らず」の少女の顔が目の前に現れてゴンザは眩しさのあまり目を細めた。

スーはなぜかにやにやししながら自分の少々ずれた眼鏡を左の人差し指でくいと定位置にもどす。

定位置にもどす時に一瞬見えた灰色の瞳も白目と灰色の境目がわからないほどに白かった。

「お嬢様に聞きたいことがございます。この馬車から聞こえてきたと思われる悲鳴は何でしょうか？」

ゴンザは咳払いするとちよつと早口でスーに質問する。

スーはさつきよりもにやにやしながら自分の右隣りを白く細い指で指す。

ゴンザがスーの右隣りの人物に目を向けると、そこには全体が赤くふりふりのスカートが特徴的な「ユガ邸女従者服」を着こなしたオレンジ色の綺麗なストレートヘアーのなぜか「噉り泣いている」少女がいた。

「まったく……うちの従者ですか。ちよつくら説教しないといけないうですね」

ゴンザが鼻からフンと蒸気のような白い鼻息が勢いよく噴出する。その目には火がともっており、説教をする気満々のゴンザの心がよく見えている。

「別にねえ……そんなことしなくても良いよ。スー専属の人だし、それに少し驚いちゃっただけだからあ」

「そういうわけにはまいりません。従者のなんたるかをその従者に説いてさしあげます。おい！その」

ゴンザの野太い声がスーの横の従者を指名する。

その従者は体をびくつと震わせると、ゴンザのほうに涙で汚れた顔をむける。

色白の顔に大きな若干つりがちな黄緑色の瞳、他の整った各パーツ。それは絶世の美少女とも言える顔立ちをした少女であった。今はぐしゃぐしゃになっていてその魅力が落ちているが。

一生懸命抱きしめている鞘におさまった刀はとても存在感がある。

刀よりも従者のある部分がかなり存在感があるせいか普段は目立たないが。

今も圧迫されていて苦しそうに見えるのは多分気のせいだと思いたい。

この姿を見てゴンザは「またえらく可愛いやつだなおい」と従者に同情した。

これなら悲鳴をあげても仕方がないなとゴンザは思う。

何せ、この従者は一週間前まで男だったからである。

「おい榊。何やってんだ？」

「料理長殿……拙者………気がついたらこんな恰好をさせられていて……うつ」

榊はこの屋敷を訪れて一週間。

言葉から何から何まで女に近づいているが「ござる」と「拙者」がぬけないのは武者だからか。

女になって日が浅いからか、まだこんな恰好にも慣れていない。

そもそも女の体に慣れていない。

屋敷に来た初日なんて目隠ししないとともに風呂にも入れなかった。

それから日が経つにつれてマシにはなつていったけどそろそろ自分の体を見て鼻血を噴出させて風呂場を汚すのはやめてほしいとよくサヨに言われている。

「スーお嬢様の仕業ですか？」

「そうだよお。なかなか着てくれないからつい………」

「酷いでござる。主」

「まあ、ドンマイだな。榊、お前も少しは慣れる。な？」

榊は「えぐ……えぐ………」と子供みたいに泣いているが、そのうち

泣きやんだ。

榊の前にいるサヨからちり紙を受け取ると盛大にチーンと鼻をかむ。次にサヨからもらったハンカチで涙を拭くと榊は丁寧に畳んでサヨに返す。

「ごめんなさい料理長。私……まだ全然慣れていないものですから……つい」

「いや、それ以上は言わなくていい！じゃあな！それではお嬢様。失礼します」

「ご飯楽しみにしているよぉー！」

ゴンザはその場から全速力で立ち去った。顔を真っ赤に染めながら。

（それにしても、女口調で話すとこれほどまでに威力があるとは……考えものでござるな）

「榊……なんかあ同性のスーから見ても襲いたくなっちゃうような可愛さを振りまくのはどうかと思うよ？あ、たまには良いんだよ？しよっちゅうやられるとお……榊の身の保証ができないからねー？ほどほどにしてね？」

「心得たでござる」

（なんか羨ましいですね……）

「サヨ。なんか変なこと考えてないか？」

「いえ！別に何も……アハハ」

グサリとサヨの心に突き刺さるクランツの鋭い言葉と冷ややかな視線。

適当に返すサヨの額からは冷や汗がタラタラと流れていることはいつものことなので一同スルー。

再び馬車を走らせたおじさんは後ろから聞こえてくる楽しげ（？）

な会話を聞き、微笑む。

目的地の町までの道のりは長い。

ところ変わってユガ邸内食堂。

「ああ……あれは反則だろ」

とても元男だと思えないあのとても可愛らしい謝り方をした榊。
あの顔もやばければある一部分もやばい。

なんか動く度に効果音が聞こえてきそうでやばい。

「ああ……セーラ。お父さんは人としての道を踏み外しそうで怖いよ」

写真に写る我が子の写真に語りかけるゴンザ。

傍から見たら病気に見えそうなくらい必死に語りかけている。

その様子を「不幸にも」目撃したゴルドは回れ右をして食堂から出て行った。

九話 外出。（後書き）

九話 投稿しました。

なんかいつもよりもしかしたら短いかもしれません。
指摘、感想等一言お待ちしております。

それでは。

拾話 外出式。

拾話 外出式。

ゴリラ顔料理長のゴンザがいなくなってからどのくらいの時が経ったのだろうか……もう日が傾きはじめ、オレンジ色の光がラファエルの森の木々の葉に降り注ぎ葉がまるで鏡のように光を反射する。昼頃のラファエルの森も綺麗な翡翠の宝石のように輝き美しいが、夕方のラファエルの森はそれ以上、言葉に表せないほど美しい。この時間帯の森のカメラのシャッター音が一日の時間帯で一番多いのは夕方のラファエルの森の写真が高値で売買されているからか。その写真も、写りの具合等で値段もかなり変わってくる。この森の人気は計り知れない。

ラファエルの森の中を走る榊たちの乗る馬車の中にも光が降り注ぐ。サヨは欠伸をかみ殺し、克蘭ツは石像のように同じ姿勢のまま固まり、スーは時折大きな欠伸をしていかにも眠そうで、榊は夢の世界で冒険している。

「克蘭ツう……………まだ？」

「さすがにおかしいですね。もうとつくに着いているはずなのですが」

（眠いです！しかしお嬢様の前なので眠れません。榊さんが羨ましいです）

スーの我慢は限界に近づいていた。

今日はいっぱい買い物でもしたりして外での充実した一日を過ごそうと思っていた。

いつも家の中なのでそろそろモヤシになりかけていたからクランツの提案は嬉しかった。

「もういつそのことさあ、魔法で転移しちゃって良いかなー？」

「せっかくなら馬車で！と言ったのはお嬢様ですが？」

「そうだけどさ……」

「それに、転移などのレベルの高い魔法を使うと注目を浴びることになりますぞ？」

「そうか……」

と、ここで夢の世界から帰還した榊が突然話に加わってくる。

「もう日が暮れているでござるな。主。今日はもう屋敷に戻り、また明日来ることにするでござる」

「うーん……もうそうしようかあ」

せっかく榊を着せ替え人形にして遊ぼうとしたのに

スーは大きな欠伸を一つすると、「帰ろう」と榊たちに言う。

「残念ですな」とクランツはスーに同情する。

なにしろクランツもそれを楽しみにしていたからである。

榊着せ替え人形遊び。この従者と主は頭がおかしいのかそれともそっちの趣味があるのか。本当のことは誰も知らない。

一方、榊は主であるスーのその帰る発言を聞いて内心ガッツポーズをしていた。

このクソ恥ずかしい恰好で町に買い物に行かなくて済むという榊にとってはとても助かる発言だったというのは別に書かなくてもわかることだが、重要なことなので書く。

ついつい顔がほころぶ榊。

その榊の様子を見ていたスーは口の端をつりあげる。と……「ねえ、榊？」と妙に艶っぽい顔をして榊の耳に口元を寄せる。

榊には明日もその恰好で、ね？
は？冗談でござろう？

一気に榊の表情がひきつる。

これはね、お願いじゃなくて命令だよ？主からの。それとも何？
榊は主であるスーの命令を聞けない悪い娘なのかなあ？

くッ……………ご勘弁をッ……………

無―理―

スーはクスクスと笑う。

榊は背筋になにか冷たいものが走ったような感じがしたのかぞつとする。

ぎこちない動作で顔をスーのほうにむける。スーは笑っているが、目は笑っていないかった。

あれは本気の目だ。

この主は言動からか、とても幼く見えるが有言実行型でやるといったら必ずやり、命令も絶対であり、威圧感をかけて必ず実行させるので結構侮れない。

前の主である將軍とは違う。今の主は前の主とはまるで逆だ。そう言う自分は前の將軍のことを侮っていた。酷い言い方をすればなめていた。

まあ自分は実際にはあの將軍に仕えていたが、心の底から忠誠を誓い、仕えたのは將軍の娘の秋蓮様であると榊は思う。

「うー」

「そんな風にいい、膨れる榊もスーは好きだよ？」

榊の膨れっ面を見てスーは微笑むと榊の膨れた頬を指でつつく。

傍から見たら大変微笑ましい光景だ。榊の刀の存在を無視すればの話だが。抱きかかえられている“それ”はこの雰囲気をぶち壊すような気配をだしているが誰も気づかない。

まあ鞘に収まっているから無理もないが。

スーは榊の頬にたまった空気を抜くと、にっこりと年相応の少女の笑顔になる。その顔とは裏腹にわきわきとある部分にむかつて伸びるスーの腕はまるで別の生物ではないかと思わせるほどの動きをしていた

がし。

「むー」

「ははは。こればかりはいくら主であろうと駄目でございますよ？」

スーの両手を両手で掴み、スーの欲望を止める。

「いいじゃん別に」

「まったく。主はませているのでござるな。それに、その変態爺がじつと拙者のある一部分と主を見つめてくるのは如何なものかと思っております」

「変態ではない。私は“紳士”であり、スーお嬢様の執事だ。お嬢様のなさることを見守り、常にサポートし、過ちを犯そうとしている時は全力で止めるのが私の仕事だ」

「では今が全力で止める時ではないのでござるか？主は過ちを犯そうとしているが」

ふつとクランツは鼻で笑う。
そして自信満々な顔で言い放った。

「今は“全力で見守る時”だ」

このエロジジイ！

榊はクランツに対しての見方を変えた。

“主と一緒にとんだ頭のおかしい人間”だという風にこれから認識
することを榊は神に誓った。

とりあえず榊は片手でスーの腕を押さえつつもう片手でクランツの
視線からある一部分を守るように隠す。

完璧には隠れきれしていないことは今更書かなくてもわかることだ。

その大きな果実を掴もうとするスーの手。

その何から何までを熱心に見守り続けるクランツ。

そのクランツの横でいつも通りのスマイルのまま鼻から大きな風船
を作っている最近急激に髪が伸びたのかツインテールが長くなった
サヨ。わざわざ書かなくてもわかることだが、眠っている。ついに
おちたか。

誰一人として榊を助ける人物はいない。

この変態コンビが！

「そうだよお？スーは変態だよ？」

「私は“紳士”だ。それにしても榊嬢。改めて眺めてみると随分と
大振りな果実だな」

「やはり主はそうであつたか。拙者の目は確かであつた。しかしク
ランツ殿？その発言はちよつと……な？」

「私はただ思つた事を口にしたただけだ。気に障つたなら謝る。今ま
で見た中では珍しかったのでついつい」

「ついついじゃ済まされないと思うのは拙者だけか？」

「どうだか」

顔全体が赤くなり、感情的に言葉をかえす榊。

対して無表情で無感情に、淡々と機械のように言葉をかえすクラ
ツ。

あまりにも対照的だなということがよくわかる。

「確かに、大きいのは羨ましいですねー」

鼻風船が割れたと思ったたら会話の中に入ってくるサヨ。

今までちゃんと聞いていたのだろうか？それとも別の理由があるか
らなのかは誰にもわからない。

「まあサヨは板だからな」

「なんですってええええ！もう一度言ってみなさい！！」

「だから板だ」

ぱちんと平手打ちが良い音をたててクラッツの頬にヒットする。
表情を変えることなく、クラッツは赤くなった頬に手を添える。

「暴力的な女は嫌われるぞ。サヨ」

「デリカシーのない男は嫌われますよ？クラッツ様？」

ほぼ同時の発言。

「仲が良いでござるな。二人とも」

「はは。冗談を」

「どこがですか？全然良くないですよ？」

「その発言が同時というところとか……」

「隙ありっ！」

むにゅっとスーの両手が榊の果実にふれ、掴む。

その大きな果実は見た目よりかはとてもやわらかく、不思議な気持ちにスーを支配する。

「うわあ、大きいなあ。手に全然収まってるない」

むにゅによという効果音が聞こえてきそうなほどスーは榊の果実を揉みまくる。

「うわああああ！何をしているのでござるかあ主！！」

榊はスーの手を自分の果実から引きはがす。

そしてサヨのほうに預ける。

馬車は大きいので難なくスーは座ることができた。

「それに比べてサヨはねえ……ぺたぺたぺたんこだね」

サヨのある部分を撫でながらスーは残念そうに呟く。

「お嬢様あ！？いくらお嬢様でも許しませんよ？お尻ペンペンの刑です！！」

プチッという音がサヨの頭から聞こえてきた。

血管かなにかが切れたのだらうとクランツは冷静に分析する。

「やだやだ許してサヨ！お尻ペンペンは嫌あ！」

「いいえ、許しません。私はお嬢様のお母様から頼まれていますから。存分にやらせてもらいます」

「うわーん！サヨとお母様のバカー！」

薄暗くなりはじめたラファエルの森に、ぺちーんぺちーんという音と、少女の悲鳴が長く響き、榊たちの乗る馬車が再びいろんな生物の視線を集めることは容易に想像できた。

拾話 外出式。(後書き)

今回は少しはっちゃけてます。

なんだか思っていた展開とは違う感じで書けば書くほど元の設定から遠ざかっていく感じがします。

指摘、感想等一言お待ちしております。
それでは。

拾巻話 外出参。(前書き)

今回は少し長いです。

拾巻話 外出参。

拾巻話 外出参。

ドンパンドンパン！ドンパンドンパン！

空砲の大きな音が若干曇り気味の空に響く。

ラファエルの森を抜けて数キロ先にある町「スタイン」は他の町に比べたらとても大きな町だった。

町から町へ行き来する行商人が大勢この町の宿に泊まったり商売なんかしている。

そのためか、品も多く世にも珍しい品物が手に入ることもしばしば。いつもお祭り騒ぎなほど賑やかなこの町には貴族や平民等の身分も関係なく、様々な人間が買い物に訪れていた。

「ねえー榊、こっちの服なんかどう？」

「ふりふりが嫌でござる。却下」

「榊嬢。こっちなんかはどうだ？」

「布地面積が主の物に比べて極端に少ないと思うのだが？まったくんだ変態爺でござるなあ。クランツ殿」

スタインの町の中央。どでかくて美しいまさに水の彫刻と言える噴水の近くの大きな衣類専門の店「プリマメ」の女性服のコーナーにて。

スーはやたらとふりふりに拘り、クランツは布地面積が少ないのを勧めてくる。……男の性が。

ともかく、普段着が着物しかない状態を打破するべく榊たちは昨日できなかった買い物をしていた。

ふりふりは可愛いと単純に思う榊だが、流石に自分が着る姿を見る

と鼻血が噴出するので却下。

「こういう物は主が着たほうが似合う」と榊は思う。少女なのだし。そもそも自分にはサイズが合わない。いくらスーに体の年齢がこの中では一番近くても。色々と邪魔な部位があるのだし。

クランツは何故かこの体をもっと引き立てようとする。そんな過激な物を着て外なんかに出られるわけないのに。

まさか自分が観賞するために勧めているのかもしれないのではッ……！

ちらつとクランツのほうに顔をむける。

布地面積が少ない服を片っ端から選んで「うーん」と普段無表情という名の仮面をはずし、真剣に悩んでいる。

周りの客がとても痛い目で見ているが、気にしていないというか気づいてすらいないというか……なんだろうか。

昨日の“紳士”はもしかしたら“変態という名の紳士”の略なのではないのか……

こんなことを考えているうちに嫌な汗が止まらなくなっているのはなんでだろうかと榊は疑問に思いたい。

横から荷物持ちとなっているサヨが片手を空けてハンカチを取り出し、榊の額の汗を拭いてくれるのはとても助かると榊は思う。

「すみんでござる。サヨ」

「いえ。別に良いですよ。榊様のお綺麗な顔にそんな悪い汗なんて似合いません」

にこつとサヨは微笑むと、ハンカチをポケットにしまうと片方の手に持っていた荷物を両手で持ち直す。

とてもできた従者だと榊は思う。気が利いて、命令は忠実にこなし、綺麗好きで、料理がうまく、公私がしっかりしてる？ サヨはとても良くできた従者だ。

昨日は別人みたいだったか。

昨日のことを振り返って……………サヨに、板、ペタンコ、貧乳等の胸に關することが地雷だと發覺し、サヨの前で胸のワードをだすのは禁止された。

普段優しい人が怒ると怖いという話はよく耳にするが、まさかこれほどとは想像もつかなかった。

あの後スーの尻は赤く腫れ、普通に座ることができなかった。今はもう大分収まったが、まだひりひりするという。

「あ、これなんかどうですか？」

そういつてサヨが出してきたのは白の清楚なワンピース。

無駄な飾りが無く、比較的大人しいかんじのデザインの物で榊の好みであった。

「良いでござるな。サヨは見る目があるようでござる。ちょっとその試着室で着替えてみるでござる」

「どうぞー。終わったら言ってくださいね？」

早速榊は近くにあつた試着室に入る。

サヨは降ろしてればいいのに両手に荷物を持ったまま試着室をじっと見つめている。

スー達はそれぞれの好みの服を持ってサヨの隣でわくわくしながら待っている。一名無表情という名の仮面を装着中

数十分後。

「着替えたでござる」

「はい。じゃあ出てきてください」

榊が試着室のカーテンをすつと開ける。

おおつとクランツは無表情の仮面をはずし、驚いたような顔をしている。

サヨはいつものスマイル顔で「似合いますねー」という言葉と共に胸がかなり目立ってますけど　と小声で呟く。

スーは何にも言えないのかただあんぐりと驚きのあまり口をだらしなく空きっぱなしにしている。

そこにはお嬢様がいた。何気に麦わら帽子まで頭にのせ、微笑んでいる様はスーなんかよりもとてもお嬢様らしかった。

榊の果実がとても目立つが、ここまで清楚な恰好が似合うとは一同想定外だった。

「じゃあさ、次はこれ着てみてよお」

「？命令でござるか？」

「うん。言わなくても分かるでしょ？」

「承知したでござる」

と、少し上機嫌な榊にスーは世間一般的に「ゴスロリ」と呼ばれている黒い服を榊に手渡し、カーテンを閉める。

これだと次はどうなるのかとスーは頬を紅潮させ「まだかなまだかなあ？」同じ言葉を連呼し始めた。

それから数十分後。

「と……………とりあえず着れたでござるが……………ちょっとばかりキツイでござる」

「そー？とりあえずかーてんおーぶん！」

そこに現れたのはどこか病んでる人特有の空気を纏った榊であつた。榊が両手で抱えているウサギのぬいぐるみは、榊の果実に圧迫されてとても苦しそつに見えた。

克蘭ツは顎に手をあて、値踏みするように見つめ「なかなか」と呟いている。サヨは頬を染め「良いです良いですよ！榊様よいですよ」と何故か涎を拭いている。

スーは何故か無心に「あのウサギになりたい」と壊れたテーブルコーダーのように何回もぶつぶつ言っている。

「それにしても榊嬢？」

「何でござるか？」

「試着、楽しんでないか？」

克蘭ツがまた“無表情という名の仮面”をつけた状態ではそつと、あまりにも普通に言う。

は？と榊は首を傾げ、何を言っているのかわからないという表情をする。

「そうか」と克蘭ツは一言小さく呟くと、ビシッと右手の人差し指を榊にむけて口を開く。

「そのオーラはヤンデレと言われる者が発するオーラに酷似し、その目はいつもの威勢の良い目とは違い、とてもダークでまさに死んだ魚のようなとても病んだ人そのものの目だからだ。特にその目の下についている隈は墨のようにどす黒い。まさになりきっていると思われるのは私の見間違いか？」

「いや、そういうつもりじゃあ……………」

「しかし！まだ病んでる人には程遠い！！やるなら徹底的にやれ！」

「はあ……………」

「ならば次はこれを試着し、その道の人になりきってみせるがいい、
榊嬢！」

クランツは自分の選んだ物と一緒に榊を試着室に押し込む。
そしてカーテンをびつと音が鳴るくらいの力で閉める。

サヨお……クランツ壊れちゃったのかな？

多分あれが本来のクランツ様です。他のお客様の迷惑ですよ……
はあ………

クランツが腕組みすること数十分。

途中で「なんでこれはこんなに布面積が少ないんだー！てか水着じやないかつ！」という声が聞こえたが無視するスー達。

他のお客様のひそひそ声を聞いたサヨが片っ端から頭を下げまくっている。

対して、クランツは不動。

スーはおろおろ。

なんとも、クランツが暴走している感じがするのは気のせいだと思う。

「着れたでござるが、無性に恥ずかしいといつかなんといつか……

……とても見せられるものではない物なのでござるが………」

「スーお嬢様！」

「えーとお……カーてんおーぷん」

シャツと言う音と共に現れた榊は、一昔前に流行ったセクシーポーズを照れながら決めていた。

その姿を真正面にいたクランツは見た瞬間………ぶしー！！

「うわあっ！汚いでござるクランツ殿！早く止めるでござる」

「ふ……………それは……………無理なことだ、榊嬢……………それにしても凄すぎるウー!!」

クランツは、大量の鼻血と共に床に仰向けに倒れスタインの中央にある巨大な噴水に負けない、見事な血の噴水と化した。

「あれえ!?!……………この鼻血、いくらティッシュ詰めても……………と、止まらないよお!?!」

「榊様!早く着替えてください」

「了解したでござる……………と!?!」

手を真っ赤に染めて半泣きになるスー。その様子を見て荷物を置き、クランツに駆け寄るサヨ。着替えるべくカーテンを閉める榊。

「くつ……………誰かぁ!お嬢様、私たちだけではどうにもなりません。

応援を呼びましょう!」

「そうだね。いくよお!」

スーは血の汚れをおとした後に、片手を高々と上げ叫ぶ。

『私の名、スー・R・ユガのもとに。私と契約せし我が従者、ユガ邸衛生兵召喚!!!』

ちなみにこの世界の呼び出し系の魔法の詠唱には最低限自分の名と呼びだす物の名が必要であり、他は適当でも何とかなると榊はスーに聞いたのを思い出した。

「御呼びでしょうか、お嬢様?」

「この変態爺もとい、クランツの鼻血を止めて!後他言したら喉斬るからそのつもりで」

「サー、イエッサー！」

ぱつと光と共に現れたユガ邸衛生兵はざつと五人程度だった。そんな少人数で足りるのかとサヨは思ったがどうやら大丈夫そうだった。

「それでは」

「うん。助かったよお。じゃあねえ」

光と共に、ユガ邸衛生部隊は役目を終えると消え去った。

十分という短い時間の中であつさりとクランツの鼻血は止まった。今はよろつとしているが時期に治るとのこと。

その言葉を聞いて安心したのはほかでもない榊だ。

もう若くないのだし、こんなに出血してよいものだろうかと心配だったがこの変態爺は思ったよりも大丈夫そうだった。

「サヨ、主。一つ尋ねたいことが……………」

「なーにー？」

「どうしました？」

「えーとっ」と榊は軽く咳払いしながら決心した顔で口を開く。

「あの、その…………拙者の水着姿はどうだったのでござるか？」

「ああ」と二人は顔を赤く染め、言葉を選んでいるような仕草を見せる。

そして頭に古風な豆電球が浮かび、光がつくと同時に「あ」と声をあげる。

なにか思いついたようだ。

「なんというかねえ、効果は抜群だったんだよ。クランツに」

「少し布がずれてましたからね。あらぬものが見えたのではないかと……」

「そうでない！ “拙者の水着はどうだったのか” ということを聞いているでござる」

榊は顔をかあつと赤く染めながらも二人に問うた。

「一言で言つと、同じ女性であつても鼻血が出そうになるほど凄くエロかったです」

「もう十八禁みたいな感じの。スーみたいなお子様にはまだまだ免疫が……」

湯気がでるのではないかと思わせるほどに赤くなる榊。

もう水着は着ないと心に決めたのであつた。

そんな出来事から大分経ち、買い物が済んだ榊たちは中央の噴水の近くにある長いベンチに四人で座っていた。

あの後、鼻血で汚れた物はお買い上げとなり随分と多くの物を買った。

もちろん克蘭ツの自腹で。

今、心身共に白くなり、克蘭ツの心と財布に残っているかすを風に残らず奪い取られた克蘭ツはベンチで白くなっていた。

サヨは今近くを通っているパレードを見てにこにこしており、スーは片手に風船。片手にペロペロキャンディを持ち、とてもきやつきやとしている。

今日はまことに疲れたなあと榊はため息をつく。

まあでも楽しかったから良いかと、少し眠ろうかと欠伸をした。

その刹那。

「っ！主！伏せるでござる！！」
「え？」

ダンッギンッ

その言葉の数秒後にスーの耳に銃声と何かを斬る音が聞こえた。聞こえたと思った時スーは既にクランツによって地べたに強引に倒され、クランツはその上に覆いかぶさっていた。一瞬何が起こったのか理解できなかったスー。しかし、すぐに自分は殺されかけたと気づく。どうやら斬る音は櫛が銃弾を斬る音だったらしく、着弾したような音は聞こえなかった。

現に、榊は刀を抜いてまっすぐに何かを見つめていた。

少し顔をあげて榊の視線を追う。そこにあるのはさっきまでの賑やかな音が消え、静まったパレード隊。その突然の銃声に驚き辺りを見回す青い服の集団の中に他のトランペットと同じ作りをしているが、音を出す口のような部分が若干小さいトランペットを持った青年がちつと舌打ちしている姿が見えた。

そのトランペットから出るわずかな煙は曇っている灰色の空に同化している。

ぞつとスーの背中になにか冷たい物が走った。

ドンッ

突然のことにびっくりしていると、スーの近くで新たな銃声が響いた。

音の主は誰かと顔をあげると、そこにはリボルバーを片手で撃ったサヨの姿が見えた。あのふりふりのスカートの中に常に隠し持っていたのだらうとスーは思う。

もうもうと白い煙が銃口から漏れる。

サヨは顔はいつものスマイル顔だったが、目は笑ってなかった。当たり前か。

新たな銃声が響いた数秒後、舌打ちした男は突然その場に倒れた。

「動かないでください。その奇妙なトランペットを持った男を捕まえてください。私の仕えるお嬢様を狙撃した輩です。捕まえ次第、簀巻きにしてなんの楽器も持たずに手を頭の後ろにやって噴水のほうに集まってください。逃げようとしたらその男みたいに容赦なく撃ちますので大人しく従ってくださいね？あ、簀巻き用のロープをそちらにお渡しします」

そうペラペラと喋った後にサヨはどこから取り出したのか結構な量の縄を投げ渡した。

それを太鼓を担当していた大柄な大男が見事にキャッチし、急いで青年を簀巻きにする。

その際、大男はびっくりした。

青年の撃たれたと思われる腹から一滴も血がでていないことだった。殺傷弾ではなくゴム弾か何かだと男は理解した。

「縛りました」

「それじゃあ噴水の周りに集まってください。あ、その刀を持った人の近くで良いです」

パレード隊の面々は手を頭の後ろにやって次々と噴水のほうに移動した。

皆怯えたような表情をしている。

「さてと」

サヨはパレード隊が残っていた楽器の中にある奇妙なトランペットと簀巻きにされた青年を回収し、青年をそこらへんに放り投げた。

「桝様。警備隊の方はいつごろ到着されますか？」

「もう来る」

桝は刀を既に鞘におさめていた。右手の親指を突き出していくつと自分の後方を見るようにサヨに示すとそこには黒い服に身を包んだ警備隊が駆けつけて来ていた。

「ああ、こつちです。えーと、あそこに転がってる男がですね……」

……」

起こった出来事をペラペラとサヨは警備隊に話す。

この後、パレード隊は全員事情聴取され、榊たちにも色々聞いた後に警備隊は凶器の奇妙なトランプेटと簀巻きにされた男をセツトで連れて行った。

「さて、お嬢様。帰りますか」

「うん。こういう場所で狙われたのすごい久しぶり」

「まあ無事で何よりでござる」

「それでは」

スーは短く呟くと、榊たちは光に包まれ、シャボン玉が割れるようにしてその場から消え去った。

拾巻話 外出参。(後書き)

長いせいか最後のほうが拙くなってしまったような気がします。
まだまだ勉強が足りませんね。

今回はクランツさん暴走してます(笑)

感想、指摘など一言お待ちしております。

それでは。

拾弐話 ある日の朝の光景。

拾弐話 ある日の朝の光景。

町で襲われてから数日、今までよりも夜のスー暗殺目的で侵入してくる者が若干増えた。

いつもなら二日に一度くらいのペースで来ていた暗殺者がほぼ毎日襲ってきた。どの暗殺者の顔にも焦りがあり、暗殺者たちのバックにいる依頼主が苛立ちの表情をうかべているのが榊には良く分かる。前に仕えていた將軍もことがうまく進まないと苛立ち、従者や忍びの者によくあたっていたからだ。よく將軍やその妻に隠れて慰めていたものだ。

「これで、十何人でござるかな？」

指の関節をぽきぽきと鳴らす榊の前には大きなたんこぶをつけた簀巻き状態の黒ずくめの男が一人転がっていた。

最近は無駄な音をたてることなく仕留めることが出来るようになってきたのでスーを無駄に起こすことは少なくなった。

「ふああっ」と榊は欠伸をする。思えば今日は一睡もしていなかったことに気づく。

しかし主を守るため、榊は夜の間は一睡もしないことを心に決めていた。

「さて、この男は朝方にでも牢にぶちこんどくでござるかな」

可愛い顔でさりげなく汚い言葉を使う榊は元男である。

それから時が過ぎ、しだいに太陽が昇りやわらかな日光がスーの寝ているベッドの近くの窓から降り注ぐ。

その光が朝だということをスーに伝えるが、効果は無し。むしろ夜中の時よりも熟睡してるように見える。

口元からでている涎をサヨはティッシュで拭きとる。

（たまたま早起したらお嬢様の寝顔が見られるなんてラッキーですね。早起きは三文の徳です）

スーの寝顔を見て微笑むサヨの後ろには榊が刀を抱いて胡座をかき、壁に背中を預け眠っている。

ちよつとはだけている着物の胸元についつい目がいつてしまうのは生物の性か……………。

ちなみに簀巻きになっていた男は地下牢にもういれてある。

（榊様の寝顔は凜々しいですね。お嬢様とは大違いです。さすがは武者ですかね）

スーのだらしなく開いた口元を見てサヨは思う。

子供っぽくて良いと思う反面、お嬢様だからもうちよつとちゃんと眠ったほうが良いというのはサヨの意見だ。

（そつえば……………）

スーが一人になって何年たつだろうか。

正確にはサヨ達がいるため一人になっていないが、スーの両親や親戚はもうこの世にいない。

ある者は暗殺され、ある者は戦死し、ある者は病で。

あんなにも多かったユガの血が流れる者達はスーを残して一人残らず天に召されてしまった。

自分が来た時にはもう残っているのはスーの母親とスーしかないなかった。

その母親はスーに似てとても白く、まるで絵画からぬけだしてきたのではないかと思わせるほど美しい人物であつた。

自分にも子にも敵しい人物であつたとサヨは覚えている。

よくいろんなことをやらかしてはお母様に叱られたものだ。

時にはスーと一緒に悪戯して一時間弱正座のまま説教をされた覚えもある。

（お母様が亡くなつてから時々お譲さまは昼間の時間帯にお母様の部屋のベッドの上で泣いておられましたね）

今でも思い出す。

声をださずに、涙をぼろぼろ流すスー。

時折ベッドに振り下ろす今にも折れそうなほど細くて白い蠟燭のよ
うな腕の先についた拳はとても痛々しかった。

今、スーが眠っているベッドは母親の物だ。

他の母親に関する物はすべてスーが魔法で焼いてしまった。母の遺言である。

「どうしても焼きたくない物は一つだけなら焼かすにおいても構いません。それ以外は私と共に完全に燃やしてしまいなさい」

一枚の羊皮紙に書かれた読めないほどに崩れた文字。

元々字はヘタクソだったのに病が拍車をかけ、もう何かの暗号のよ
うな文字だったが幼児の頃から長年仕えているサヨは他の従者が苦
戦する中、解読に成功した。

それと同時に、サヨは泣いていた。

自分の尊敬する人物、並大抵の男よりも雄々しく、武術に秀でた、一人の子を持つ強き母親。

そんな人物が死ぬことをサヨは考えたくなかった。自分の好きな人が死ぬのは見たくなかった。

点滴につながれ、ベッドに横たわる痩せ細ったスーの母親を見るたびサヨは涙を流した。

思えばいつもスーは母親に悪戯したり、無理に笑わせようと自分の両手の人差し指を使って母親の口元にもっていきスマイルを作ったりしたことには驚いた。なんで今にも死にそうな自分の母親の前でそんなに明るくいられるのか、分からなかった。死を喜んでいるとしか思えなかった。

「お嬢様はお母様の死についてどのように考えているのですか？なんであんなに痩せ細ったお母様の前であんな行動ができるのか私には理解できません。お嬢様はなんでそんなに嬉しそうな顔をしていつも苦しそうなお母様に接しているのですか？私が予想するに毎日叱られてばかりだったお嬢様は怒りんぼなお母様がいなくなることが嬉しかったのですか？だからそんなことができるんですか！？」

暗い想いが心に積り、ある日サヨはスーが大切に育てている花が沢山咲き誇る花壇で作業をしていたスーにサヨは自分の気持ち伝えた。後から考えてもこれは言いすぎだったとサヨは思う。

最初からあまり考えもせずにとただ怒りにまかせて自分の想いをバケツの中の物をぶちまけるようにサヨは怒りを言葉にしてスーにぶちまけた。

まだ年端もいかなかった当時のスーはその言葉を聞くとニコニコした顔のまま固まった。

当然だ。いきなりこんな酷い言葉をぶつけられれば誰だって固まる。本当に大人げなかった。

そして何を思ったのか知らないがスーはその場にスコップなんか

はいったバケツに、自分の持っていたスコップを入れてすっと立った。

にこにこしたままサヨに近づくと、スーは思いっきりジャンプしてサヨの頬に回し蹴りを放った。

「っ!？」

突然のことにサヨは尻もちをついて蹴られ、赤くなった頬をさする。このときの回し蹴りの痛みは忘れることができない。

なぜなら体の他に“心”にも痛みを感じたからだ。

サヨはスーのほうに顔をむけた瞬間、絶句した。

スーのその美しい顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃに汚れていた。

さっきのにこにこ顔はどこへ行ったのかと思うほどつりあがった眉、固く結ばれた唇、普段の純白の頬より赤い食べ頃のトマトのように紅潮した頬。

それは怒りの表情だった。

「……あ……な……」 ひつくひつくとしやくりあげ、その唇から発せられる言葉。かすれてよく聞こえない。

サヨは首を傾げる。「言いたいことがあったらはつきりと言ったらどうですか？お嬢様」本当に昔は自分も子供だった。今思うとついつい苦笑いしてしまう。言いたいことぐらいもう分かっていたのに。

「貴女にそんなことを言われたくなかったわ！あたしがお母様のことをどう思っているかわかってるでしょ！？好きなのよ！？いつもみたいに笑っていてほしいんだよ、怒ってほしいんだよっ！……」

「……………」

スーはサヨの赤い従者服の襟を掴んでぐいっと自分のほうに引き寄せる。サヨの顔を両手でがっしりと掴み、しっかりと見つめる。

スーと目があったサヨは最早放心状態であった。目の焦点が定まっていなかった。

サヨ自身、自分は壊れてしまったのだらうと思った。スーの母親の死は避けられない。ある日聞かされたその“事実”がサヨをおかしくしてしまった。

なんだかスーの顔を見ているとこっちまで泣けてきた。

サヨは自分の頬を伝う涙を拭うこともせずスーにぎゅっと抱きつき、静かに泣いた。

「ふう……………」

サヨはスーの口元から流れる涎をまたティッシュで拭う。さっきからよく流れるなあとサヨは感心する。

その使用済みティッシュを近くにあったゴミ箱に捨てるとサヨは近くにあった白くて長いベンチのような椅子に腰を下ろす。

「あれからお嬢様はずいぶん成長しましたね。言葉が幼稚になったのは私かクランツ様の教育ミスですかね？」

一人、呟いてみる。

寝息だけが聞こえる広い空間に空しく響く。

スーの口調は実際教育ミスではなかった。

あの回想した日から数日後、スーの母親が亡くなり、スー自身が母親の遺品と体を焼いてこの世から葬った次の日。スーの口調はガラリとまではいかないが変わった。母親が健在だった時よりもやわら

かくなつたのだ。甘えん坊にでもなつたのか？と従者一同は首を傾げたものだつた。

それから急に従者の数が増え、スーの我が儘がエスカレートした。「こりゃ先代よりも厳しいな」という声が従者の間で言われるようになった。

が、逆に「先代よりも優しい人だ」とも言われるようになった。使えない人間をズバズバ容赦なく切り捨て、行く所のない者を平気で人買いに売りさばいたスーの母親とは違い、どれだけ役立たずで行く所もないポンコツでも必ず手を差し伸べるスーは優しくかった。

「なに回想なんてしてるのだから。私も年ですかね？」

ふーと溜息をつくサヨはまだ二十代前半である。この台詞だけを聞かれると絶対おばさんに勘違いされそうだが。

「うーん……………」

（あ、そろそろ起きますね）

サヨはぱんぱんと自分の頬を叩いて気合いをこめると、毛布に包まってもぞもぞと蛆のように蠢く自分の主に最大限に爽やかな笑顔をうかべ、挨拶をする。

「おはようございます。もう朝ですよ？そろそろ起きてくださいね。お嬢様」

「うーん………… おはよう。眠すぎて死んじやいそう」

「そんなバカなことあるわけじゃないですよ。さあ、起きましょうね」

ぱつとスーの毛布をキャベツを剥くようにスーからとる。

この後スーはサヨのことを「鬼い……………」と言い、こつてり絞られた。

拾弐話 ある日の朝の光景。（後書き）

最新話投稿完了です。

今回はサヨが結構出てますかね？気のせいですかね？

まだまだヘタツピな文ですみません。勉強あるのみです。

指摘、感想等一言お待ちしております。

それでは。

拾参話 決心。
(前書き)

すいません。
遅くなりました。

拾参話 決心。

拾参話 決心。

スーがサヨにこつてりと絞られた日の午後。

開け放たれた窓から入り込む風が優雅に紅茶を飲んでいたスーの髪を弄ぶ。乱れる髪をいつものように無視し、スーは紅茶を一口飲む。そして溜息をついた。

(どうしたものかなあ……)

スーの表情がいつもの人懐っこい笑顔から一転、眉間に皺を寄せた難しい表情になっているのは訳が二つあった。

その訳の一つはつい先ほどあった克蘭ツの報告。

つい数日前の狙撃事件に関することだった。話す前に数枚の報告書と思われる内容のプリントをホッチキスで留めた冊子を克蘭ツはスーに渡してきたのでそれをぱらぱらと適当に捲っていた時のことだ。

気になる一文を見つけた。

『強い退魔効果のある魔殺鉱石が使われており、銃弾には主に魔力を吸って毒を分泌する吸毒石が使用されていた』

思わずぞっとした。もしあの時この銃弾が命中していたならスーは助からなかっただろう。

魔殺鉱石はあまり問題ない。スーほどの魔法使いなら。

問題は吸毒石だ。

あれはその名の通り魔力を吸って毒を分泌する石だ。対象の者の魔

力が大きければ大きいほど効果を発揮する。スーほどの魔力を持つ者なら三十分程度でぽっくりあの世へ行ってしまう。

しかし、あれは太古の大戦で様々な鉾山から掘りつくされたため今はもう存在していないはずではないのか……………。

「よくもまあ……………こんな物騒な代物を使ってくるなんてーそんなにスーを殺したいのかなあ？」

「そうですね。吸毒石はもう昔の代物だと思っていたのですが、まさかいまだに使われているとは。少々驚きました」

「だよねえ！？つもう……………本当びっくりしちゃったよ」

『吸毒石』別名magician killer。

とても捻りのない別名だがこの別名はこの悪魔の石にとっても合っている。

大抵の魔法使いなら一度は聞いたことがある名前であり、魔法使いがもっとも恐れる物。魔力がある者ならば触れただけでも静電気がビリッと体内を駆け巡り“体内に入る”死”というのは魔法使い達にとって一般常識である。

「で、クランツう。こちらに仕掛けてきている奴らの動きは最近どうなの？」

スーはクランツに質問をぶつける。

はい、とクランツは無感情な声で返事をしながらスーに渡した物とは別の冊子をぱらぱら捲る。

「最近は館の周りのラファエルの森に狙撃者が目撃されたという報告があります。その他に諜報部隊からは『ちやくちやくと兵を集め、軍事力の強化をしている』との報告がありました」

「戦争でもする気なのかなあー」

「そのようすな。こちらでも軍事力の強化でもしますか？」

スーは首を横に振り、反対の意思を示す。

「うん。そんなに強化しなくてもいいよ。今の戦力で間に合ってるよ」

「そうすかな？聞いたところ相手方は一万ほどの隊を三つ持っているそうですが……」

「そのくらい柵や皆は大丈夫だよ！もし心配なら『蒼』を呼べばあ？」

『蒼』という単語を聞いた克蘭ツは右手を顎に生えている髭にもつていき、弄ぶ。何か考えるときにする克蘭ツの仕草だ。

「ほう……グリム嬢ですか。しかし彼女は戦闘面では本気を出させると敵味方関係なく刈りますが、どうするつもりですか？」

その言葉を聞いたスーはふふつと鼻で笑う。その自信に満ちた仕草はもう策を考えているのだと克蘭ツに覺らせる。

「その時は嫌いになっちゃうよ？つてえ、言えがいいんだよ」

「グリム嬢にその言葉は少々鬼畜だと思いますが……」

「それぐらい言わないとあのアホの子にはわからないよお」

スーはにこにここと笑う。

克蘭ツは他の従者と同じようにスーのことをただ優しいとは思ったことが無い。克蘭ツは苦笑すると、いつになく真剣な表情でスーに確認する。

「それでは、『蒼』ことグリムリーパー嬢を呼ぶことにして良いで

すね？」

「心配なんだねえ」

「保険です。もしもの時の」

「はいはいわかったわかったあ。それじゃあ呼ぼう。あの『死神』を」

スーはすつと右手をあげると少し空気を吸い込む。そして口を小さくあけ、『c a l l !』とえらく透きとおった声で呼び出しをかける。

キンツと空気が張り詰め、まるでテレビの砂嵐のようなザザーツというノイズがスーと克蘭ツがいるこの白い空間に響く。

スーはあげた右手をさげ、家具のない広い場所にむかって右手の人差し指で指す。

『グリムリーパー！スー・R・ユガの名において呼びます！今すぐ召喚に応じなさい！』

前のユガ邸衛生兵召喚の時とは比べ物にならない力を指先に込め、呼び出す神の名前を言う。

スーの指先から発せられる光が白い絨毯に蒼い奇怪な模様がこれでもかと書かれた魔法陣を構成していく。

数秒で構成された魔法陣にある五つの丸の部分に天井のほうから蒼い五つの光が降り注ぎ、勢いよく発光する。

カツと眩い蒼い光が白い空間を蒼に染め上げる。克蘭ツはこういう魔法系の物に耐性があまり無いのかくらくらとよるめく。

蒼い光はものの数秒で収まった。魔法陣のあるところには蒼い煙がもくもくと漂っている。

スーは額の汗を少しばかりハンカチで拭う。

「ふう……とりあえず召喚成功かなあ」

「こういう『魔の光』の部類の物はなかなか慣れるものではありません」

「そうかなあ。今度クランツ専用の『対魔法装備』でも作ってあげようかあ？」

「いえいえ……お嬢様直々に作ってもらうなんて……私ごときの為なんかにはもつたいたいでございます。私よりも先に榊譲やサヨに作ってもらったほうがよろしいかと」

「サヨは自分で作れるから別にいいらしいよ。榊には防具一式作った時に一緒に作ったから別にいいよ。……まあお楽しみに」

「わかりました。お嬢様の好意、素直に受け取っておくとしましようかな」

クランツは無表情だが、内心とても嬉しかった。

人から寄せられる好意は大抵嬉しいものであり、素直に受け取っておくものだという生前の妻の言葉は嘘ではなかったようだ。クランツは思う。

「あのー……お呼びですかー!?」

蒼い煙の中からえらくハイテンションなソプラノボイスが白い空間に響く。

「ねえ、クランツ？何か聞こえなかった？」

「気のせいでしょうな」

「スーちゃん、お呼びでしょ「幻聴かなあ」

「スー「おつかしいなあ……」

「……グスッ……」

無視され続けたためか、声の主は案外早く泣き始めた。泣き虫なの

が無視が悲しかったのか嫌いなのかは誰にもわからない。

（あ、やりすぎた）「どうしたの？『蒼』？」

「うつ……やっぱり『白』ことスーちゃんじゃん。無視なんてひどいよ」

「ごめんねグリムちゃん。無視じゃなくてね、ただ気付かなかっただけなんだよお」

「そうなんだ。気付かなかったんじゃあしょうがないよね！もっと目立たなくちゃ！！」

（危機一髪。泣かれたらここら辺一帯焼け野原になっちゃうからね）

過去にも飴玉一つもらえなかっただけで泣きながら一つの国を潰したことがある娘だ。細心の注意を払って扱わなければ。

まあいくら腐つても神。その強さはチートだ。

「それにしてもさあ、早く煙の中から出てきなよー」

「まって！今着替えてるところだから」

「なんですと！？」

着替えという単語に真っ先に反応したのは克蘭ツ。この爺さんが変態というのは限られた者しか知らない。

「なんで着替え中なの？」

「だってお風呂の最中に召喚されたんだもん。まだ髪の毛乾かしている途中」

煙の中からドライヤーのような音がする。この部屋に電源は無い。どうやってドライヤーを使っているのかはわからない。まさに神のみぞ知るだ。

ともかくグリムリーパーが機械を使って髪の毛を乾かしていること

は大体わかった。

「魔法で乾かせばあ？」

「そっかあ！その手があったね。さっすがスーちゃん。あったまイ
ー」

頭がよいのかとスーはつつこみたくなつたが、抑える。

グリムリパーの反応からするに今まで魔法で乾かしていたわけではないとわかった。

「……………この騒ぎは何だと思つて来てみれば……………またクランツ殿
が興奮してるでござるか。それに他にも客人がいるようでござるな」

スーは入り口のほうに目をやる。そこには呆れた表情でこちら側を
見つめてくる花柄の着物姿の榊がいた。

「その蒼い煙の客人は誰なのでござるか？主」

「ああ、スーの友達のグリムリパー。アホだけど『死神』なんだ
よ」

「なんと！？……………危険因子は斬り伏せる必要があるでござるな」

「やめとけ。榊嬢。一瞬で真つ二つにされるぞ」

いつのまにか興奮の収まったクランツ。冷静に忠告しているように
見えるがその視線は榊の着物の胸元にある大きな果実にくぎ付けに
なっている。

「近い。離れるでござる」

「ならもうちよつと胸元を隠したらどうだ？」

「きついから無理でござる」

榊の胸元は少々はだけており、少しだけでも十分にエロいと言える。

「ん？その喋り方はもしかして『鬼神』さんかな！？」

「拙者の異名を知っているでござるか？珍しい者がいるな」

「やっぱりそうだったんだ！握手してよ！！」

蒼い煙がすうつと消え、そこに現れた白い肌に腰までありそうな髪の毛の近くに大きな毛がピンとアンテナのようにたっていた。巷では『アホ毛』という。他には大きくて勝ち気そうな目に榊には劣るが十分に大きな果実に胸元が大きくあいたふりふりのどこぞのアイドルが着てそうな服を着込んでいることが印象的だった。グリムリーパーこと蒼い人は榊に近づくと榊の右手を両手で力いっぱいぶんぶんと振りながら握手した。蒼いといっても髪の毛とか目は水色に近い。

「いただただっ！？」

榊はあまりの痛さに悲鳴をあげる。

ゴキッという音が聴こえてきたが空耳だろうとスーとクランツは思う。

十数回振られたところで解放された榊の右手は赤を通り越して黒っぽくなっていた。

「ごめんねえ、榊。この子力加減を知らなくて」

（アホの子だから仕方がないんだけどね）

「はあ……」

少々涙目になる榊。普通だったら失神するとはスーは口が裂けても言えない。

「その蒼いのが『死神』とやらでござるか。拙者は榊でござる」

「グリムリーパーだよ。よろしく、『鬼神』さん」

「そういえばあなんでグリムちゃんも榊が『鬼神』だってわかるのー？」

「え？『神様のチャンネル1』の世界では一番有名人だったからよ？この人凄く強いんだよ！？私といい勝負だよ」

『神様のチャンネル』とは『死神』グリムリーパー等の『神』が使用する魔法で映し出される映像。映っているのは色々な世界。一般的に庶民のテレビのチャンネルに近い。

ちなみに『神様のチャンネル1』とは榊がもっていた世界の別名。『神』の間ではそう呼ばれている。

「ぐりむよ。この世界は何ちゃんねるなのでござるか？」

「発音おかしくない？……あ、気にしちゃいけないんだね。分かった。えーとねこの世界は『神様のチャンネル2』だよ」

ある世界のある国では教育テレビのチャンネルである。もっとも、この世界は教育上よろしくない単語が飛び交う世界である。大変教育には向いていない。

「さて、グリムちゃんも榊も揃ったしこれから言うことを頭に入れているね」

「なににー！？」

「何でござるか？」

「それはねえ……………」

「はあ……どうしよかなあ」

今部屋の中では何故か宴会が行われている。

榊が提案したことなのだが「腹が減っては戦は出来ぬでござる」と榊は酒やら刺身やらetc。色々な物をどこからか榊は持ってきて宴会を始めた。無論、戦いに出る全員で。これが訳の二つ目だ。スーが難しい顔をしているのには襲撃事件のこと絡んでいるのだが、主な原因は戦いに出る全員が酔っ払っていることだった。後三日後に戦いに出るのにこんなのでいいのかとスーは思う。

「たまには良いじゃないですか？こうして皆の団結を榊嬢は図ったのではないかと思います」

珍しく克蘭ツは正常だった。榊達をフォローする克蘭ツの顔は好々爺のような笑顔になっている。

その笑顔には“処分は無しにしてください”という意味がこもっており、一緒に戦ってくれると決心してくれた榊とグリムと皆の処分の考えをスーは切り捨てた。

「克蘭ツは飲まないの？」

スーは克蘭ツに尋ねる。

ふっと克蘭ツはその質問を鼻で笑う。

「私はスーお嬢様の執事でございます。何かあつた時の為に酔つ払うことはできません。それに、私は酒が飲めないのです」

「へえー、初耳」

嘘だ。克蘭ツは本当は飲めるが飲んでる姿は見たことが無い。

克蘭ツの妻から聞いていた。「あの人はお酒が入ると泣きながら語る癖があるんですよ。だから妻である私以外の人の前では恥ずかしくて飲めないんですって。それに一人でも飲めないですよ。寂しいとか何とか言い訳しちゃって女々しいですね」

（本当は飲める癖に嘘ついちゃって。それじゃあもう一生お酒飲めないじゃない）

「克蘭ツう？何か聞いてほしい話はなーい？」

「いえ、ありませんよ！？」

「なんならさあ、場所移つて二人だけでお酒も交えて朝まで語ろうよ」

「お嬢様「人の好意は素直に受け取っておくものだよ by 妻」

「…………… すいませんお嬢様。お言葉に甘えさせてもらいます。それでは参りましょうか」

「そうだね」

ドンチャン騒がしい大広間から執事と館の主のお嬢様は小部屋へと場所を移して本当に朝まで語ったという。

拾参話 決心。（後書き）

最新話投稿。

相変わらずヘタッピですねえ。

次回は戦闘系だと思っています。

うまく書けるかどうか………心配です。

指摘、誤字、脱字、感想等一言お待ちしております。

拾四話 レイゼン平原の戦い。(前書き)

たいへん遅くなりました。
すいません!!

拾四話 レイゼン平原の戦い。

拾四話 レイゼン平原の戦い。

蒼い空、白い雲、紅い太陽。

季節は秋のはずだが、とても秋とは思えない暑さがユガ邸より小さいが十分に大きい屋敷以外には何も無い広大な『レイゼン平原』にいる多くの人間を苦しめる。

その熱の発生源たる太陽は蒼い空の中でいつそ憎らしいほど輝いている。その灼熱のまるでルビーのように紅い球体から照射される太陽光はレイゼン平原の大きな鎧を着込んだ大勢の人間を虫眼鏡で焼かれる蟻のように焼く。

レイゼン平原に建つ屋敷『ブレンダン』にいる役三万程の兵の過半数は戦わずして散った。残りの兵は何とか気力で持ちこたえていた。

「くそつ、どうなってやがる！！いきなり気温が上がりやがって……」

兵を率いる兵士団長アトレン・ブレンダンは兜を取り、額を流れる汗を拭く。髭が目立つ三十過ぎのおっさんは顔を真っ赤にし、怒っていた。

先程ラファエルの森にいる自軍の狙撃兵からの救助要請があったが無視。あのラファエルの森に救助に行き、そのまま戦闘にでもなってみる。世界中の人間を敵に回すことになる。ただでさえ正面からぶつかつたら確実に負ける戦だ。そんなことできるはずもない。

狙撃兵達の救助より、今この状況を如何にかしないとやばい。確実にやばい。

偵察兵からのトランシーバーを使った敵発見の報告があつてから数

秒もしないうちに気温の急激な上昇。

時刻は昼。太陽は真上。気温の上昇はあり得るが、十度以上もの急激な気温の上昇は聴いたことが無い。

「これは魔法の部類のモノですね。身回りに行っていた偵察兵の報告後数秒もしないうちの気温上昇。魔法以外では実現不可能です」

「正面から突っ込んでこずに姑息な技を使ってこちらの弱体化図るか。……………卑怯者共めっ!!」

「わざわざ正面から何の策もなしに突っ込んでくるような戦闘狂は兄様以外にはいらっしやらないかと」

「うるさいっ！ミトレンは『調整の結界』を張るのに集中している！」

「了解。では兄様、じきに張り終えますのでその時にまた」

アトレンの妹のミトレン・ブレンダンはいかにも軍師のような格好をしていた。実際に軍師なのだろう。

やる気のなさそうな表情で溜息をつく『調整の結界』を張るために目を閉じて集中する。

今、このブレンダン軍にいる魔法使いは数人。約三万人いた時から人数が変わっていない。

普通の兵士が多い中、極端に魔法使いが少ないのはアトレンとミトレンの父バドレン・ブレンダンの極度の魔法使い嫌いのせいだ。

ミトレンはアトレンよりも扱いが酷い。ミトレンが魔法使いだからか……………。

数分後、バシユウ……………という何かが蒸発するような音と共に屋敷とアトレン達がいるところを囲む水色の大きな『調整の結界』が張られその姿を現した。

水色のドーム状のその『調整の結界』はまるで大きなシャボン玉の様だった。つづいたらパチンと割れそうである。

「それはそうと親父達はとうした？避難したか？」

「いえ、そこはまだ分かりません。なにせ先程の偵察兵の報告から通信系の機器は使い物になりませんから確認のしようがありません」

「通信系の魔法で通信すれば良いじゃないか！！」

「それは無理な話です。この屋敷に魔法が使える以前に魔力がある方が殆どいませんからね。通信できるわけがありません」

その言葉にアトレンは額に筋をうかべる。魔力は生まれついて持っているが、魔法は使えない。魔法は一部の才能ある者にしか使えない。努力で補えるようなものではなく、一回唱えて使えなかったらもう使えないのだ。アトレンは何回も試したが使えたことはない。異様に秀才ぶっている妹の態度と言葉に日頃から鍛錬を欠かさないアトレンはミトレンに苛立った。

馬鹿にされるということがアトレンにとって一番我慢ならないことなのだ。

至極当然なことを言っている自分の妹が憎らしかった。

「親父の傍に魔法使いはいないのか？」

「あの人は魔法使いが大嫌いですが近くに寄せません。さつき確認しましたが誰もついていませんでしたよ」

間髪入れずに答えるミトレン。最初からその質問が来ることが分かっていたかのような回答にアトレンはまた苛立った。

手をパタパタさせて自分を扇ぐミトレン。『調整の結界』の効果で気温は元の秋の気温になっているはずなのだが何故か扇ぐ。

ミトレンの視線の先にはアトレン。やる気のない表情から一変、暑苦しい物を見てうんざりしたような表情で扇ぐ。その様子からアトレンが暑苦しいのだとわかった。

「ミトレン、お前やる気あるのか？」

「ぶっちゃけ無いです。あたしはインドア派なので屋外にはでてあ

まり戦いたくないというか戦闘自体したくないです。めんどくさいし汗かくじゃないですか。血の気盛んな方々でどうぞやっついてくださいと思います。」

ガンツと鈍い音がアトレンの拳がミトレンの頬にヒットしたように見えたが、よく見ると薄い壁のようなものがアトレンの拳を防いでいた。

「おー怖い。血の気の盛んな方はいつもこうですね」

「ふざけるなっ！ーそんなやる気のない脱力系の気を纏って戦場に立つな！ー」

「唾とばさないでください。……………ぶっちゃけ汚いです」

「お前っ！ー！」

ミトレンに掴みかかろうとしたアトレンを必死になって他の数人の兵士が押さえる。

「離せっ！ー！」という怒声が結界内に響く。兵士達は離す気配が無い。

押さえられているアトレンをミトレンは冷ややかな視線で見つめる。

（まったく。あの人にそっくりですね。大の男が女性に掴みかかるなんて……………まるで野獣です）

ふうと溜息をつくミトレン。

不意に。……………トントン。

「……………」

ミトレンは肩を何かやわらかいもので叩かれたかんじがして後ろを振り向く。しかしそこには誰もいなかった。

（気のせい……か……）

なんだっただろうと首を傾げながら前をむく。

「兄様!？」

前を向いた瞬間、ミトレンは叫ぶ。肩を叩かれて数秒後ろを振り向いていた間に何があったのであろうか……………アトレンとアトレンを押さえていた数人の兵士が倒れていた。

慌ててミトレンは駆け寄り、『回復の結界』をさっきの結界とは比べ物にならないほどの速さで展開する。水色の泡がアトレンと数人の兵士を包み込む。

目立った外傷は無かった。というか苦しそうな表情で倒れているのではなく、とても安らかなまるで幼児が寝ている時のような可愛い顔で倒れていた。訂正。可愛らしくはない。倒れているのはあくまでおじさんだ。指なんかしゃぶっていてもおじさんだ。ミトレンは吐き気がしたが我慢する。

「兄様……………しっかりしてください!」

「う……………んうつ……………」という寝ている赤ん坊のような仕草でアトレンの体を揺するミトレンの手をはらうアトレン。まことに気持ち悪い。

アトレン他数名はいくら揺すっても起きなかった。赤ん坊のような

仕草がエスカレートし、ミトレンは胃の中のもの胸の辺りまでこみあげてきた時点で『回復の結界』を消し、後ろを向く。

「……………んぐ」

どうやら吐き気は収まったようだ。当然吐いていない。

ミトレンは深呼吸するとアトレン達のほうへむく。

そこには先ほどと同じように赤ん坊の仕草をするアトレン達がいた。どうしてこのようなことになったのか。

少なくともさっきまでは騒いでいたはずなのに、どうして……………

ミトレンが後ろを向いている間に何があったのか。

あの騒いでいた人達が数秒の間に。

(あれ……………？そういえば……………)

肩を叩かれたと思った瞬間、音が聴こえなくなったような気がする。なとミトレンは思う。

しかしそれは考えすぎかとミトレンは考えを改める。しかし他に考えはつかんでこず、ミトレンの頭をもやもやが支配する。

ガリガリと頭をかくミトレン。何か分からなくなったときの昔からの癖だ。

苛々する中でふと異質な気配を感じたのでミトレンは後ろを振り向く。

「……………どうしたんですか？父様」

そこにはミトレンとアトレンの父、バドレン・ブレンダンが顔色を真っ青にして立っていた。皺が深く刻まれた、いつも厳格なバドレンの顔は何故かひきつっていた。

口をまるで魚類の様にパクパクさせ、ミトレンに何かを伝えようと

しているが、ミトレンは何のことやらさっぱりわからない。

「言いたいことがあるならはっきり言ってください。……ああ、それともアトレン兄様達のあまりの気持ち悪さに言葉を失ってしまいましたか？」

バドレンはぶんぶんと首を横に振る。そして何かを伝えるためか両手を使ってミトレンに後ろを向くようジャスチャーをする。

は？このハゲ親父は何が言いたいんだとミトレンは思いながらも後ろを向く。

「……………は？」

信じがたいことにアトレン達は消え、代わりに頭アンテナという名のアホ毛がぴよこんと立っている蒼い娘が棒のような長い物を持つてにつこりと微笑んでいた。

バドレンはその蒼い娘を指差したまま口をパクパクさせている。：

……………何があつたのかは知らないが、とりあえずこいつは敵だということがミトレンにはよくわかった。そりや自分の父親のあの鬼のような顔が怯えた小動物のようになっていたのだ。明らかに恐れているのがよくわかる。それにこの娘……………バカでかいオーラを隠さずにだしている。人間とは到底思えないような異質ででかいモノを。

ゆつくりとミトレンは蒼い娘に向けて杖を構える。剣は重くて使うのはダルイというミトレンの脱力的な考えからかミトレンは剣をそれなりに扱えるくせに剣は使わない。杖は軽くて持ちやすく、ミトレンの技量もあつてかスピーディーに詠唱しながらの戦闘が出来るのでミトレンは杖が好きだ。長いのが玉に瑕だが。

ミトレンは蒼い娘に杖をむけて詠唱しようと息を吸い、口を開き言葉紡ぐ。

『光よ！』

ミトレンの少々ハスキーな叫び声は蒼い娘………グリムの頭上に光の矢を数本出現させ、グリムにむかつて降り注ぐ。

グリムはそのあまりにも短い言葉で紡がれた光の矢に感心する。降り注ぐ光の矢をグリムは避けることもなく、手に持っている長い棒のような物で光の矢を撃ち落とす。

撃ち落とされても次々と出現する光の矢は次第に勢いを増し、土砂降りの雨のようにグリムを襲う。

その光の矢を制御しているミトレンの手に持った杖には自然と力が込められ、黄金色に発光している。

（なかなかやるね……あたしの光の矢を撃ち落とし続けるなんて。あたし以上の天才かもしれない）

ミトレンは口の端を釣り上げる。久しぶりに骨のありそうな奴がでてきたと内心嬉しい気持ちが湧きあがってくる。ミトレンはアトレンにむけた言葉の中で間違ったことを言っていた。

『戦闘自体したくない』ということだ。ブレンドンの血筋の者は例外なく戦闘好きである。めんどくさいし汗をかくということを本人は嫌っているがいざ戦闘をしてみるとそんな気持ちは吹き飛んでしまう。

無類の戦闘狂であった。今魔法を撃ち落とす者に出会い、その血が騒ぎ出す。

『止まれ！』

「！？」

グリムは棒を両手持ちから右手での片手持ちに切り替えると、棒を

持っていない左手を光の矢に向け、一言叫ぶ。グリムのロリボイスは光の矢の雨を見事に空中で停止させる。

止めてからグリムは棒を両手持ちに切り替えると自分の真上にむかつて振る。

グオツという音がしたかと思うと棒から衝撃波のような蒼い炎が光の矢を飲み込み、そのまま上にむかつて飛んでいった。

蒼い炎が見えなくなるほど上に飛んでいくのと同時にミトレンの杖は黄金の光を失った。この魔法の元の太陽の光の中に隠した光の球が蒼い炎によって消滅したからだ。

光の矢が全て無くなっても矢の発生源の球さえ無事ならまた矢を作り、飛ばすことができるが発生源を失ってしまったえば作ることはいない。

「はあっ！」

ガキイン！という金属同士がぶつかったような音が辺りに響く。

接近戦はどうかと思いミトレンはグリムにむかつて杖を振りかぶり、思いつ切り殴りつけるがグリムの棒にガードされる。

ガードされてもミトレンは諦めることなく殴り続ける。グリムは接近戦に持ち込まれたことに驚きながらもミトレンの魔法使いとは思えないラツシュを棒で防ぐ。

（ただの魔法使いだと思っていただけ、結構インファイターだね。

ユガ邸の兵士よりも強いかもしれないね）

「ねえ、なんで挨拶もなしに戦闘をおっぱじめたの!？」

「だってあんた……あたしにむかつて挑発したでしょう？あたしはそれにのつたの。ただそれだけ」

ミトレンはグリムから少し離れ、杖を自分の頭の上で振り回しながら短く『雷よ!』と叫ぶ。晴れ渡った空から突如降り注いだ雷がグ

リムに直撃する。が、グリムは何事もなかったかのようにけろっとしている。不可視のバリアでも纏っているのかとミトレンは首を傾ける。

「あなた、魔法使い？」

「そうよ？あんたは何者？」

あのでかい雷をくらってもけろっとしているこの娘はただものじゃないとミトレンは思う。

「とても魔法使いとは思えないラッシュだね！！久しぶりに興奮してきちゃった」

「あたしの質問に答えてくれるかしら？あんたは何者？」

「どこにでもいるような可憐な女の子だよ？」

「嘘ね」

ミトレン即答。

その言葉にグリムはばれたかーと左手で持った棒でミトレンの攻撃を防ぎながら右手で頭を軽く叩く。何故かちよつと舌も出している。

（うわっ何この子……すごく可愛い。なんか持ち帰りたいかも）

ミトレンは無性にこの蒼い、アイドルみたいなふりふりで露出が結構ある服を着た少女を連れて帰りたいと思った。

全体的にやわらかそうだから抱き枕なんかにはちょうど良いかもしれない。

「まあいいわ。あんたに勝ってからその正体を暴いてあげるわ」

「あはは！！勝つなんてそんな無謀な。あなたに勝てるかなあ！？」

「せいぜいほざいてなさい」

ミトレンの瞳に炎が灯る。

その瞳には絶対連れて帰ってやるという思いがこもっていた。

拾四話 レイゼン平原の戦い。(後書き)

最新拾四話投稿しました。

戦闘シーンは慣れていないせいかととてもヘタツピです。
勉強あるのみですね。

誤字脱字、指摘、感想等一言お持ちしております。

それでは。

拾伍話 レイゼン平原の戦い。弐（前書き）

かなり遅くなってしまう申し訳ありません。

学校のほうが忙しかったので遅くなっていました。

それでは、拾語話、どうぞ。

拾伍話 レイゼン平原の戦い。弐

拾伍話 レイゼン平原の戦い。弐

「はあ！」

ガキインとミトレンの杖がグリムの持つ長い棒を勢いよく弾く。弾かれたことにグリムは内心驚く。

ミトレンはグリムのガードが空いた一瞬の隙を逃さずに拳を腹に打ち込む。

ゴツという鈍い音と共にミトレンの拳に痛みがはしる。くつとミトレンは痛さのあまりか渋い顔になる。

（堅っ！魔法で強化したのにこんなに痛いのか。相手も強化をしているのだろうが些か堅すぎる）

ミトレンの拳が赤くなる。じゅんと腫れているのが傍から見てもよくわかるほどに。

こんなにも本気で長時間魔法を使った戦闘はしたことが無かった。天才であるからか、大抵の相手ならば数十分からずくに倒せてしまう。

しかし、今回の相手は違った。やわらかそうで弱そうでいかにも少女な外見をしているくせに異常なほど攻撃が効かない。現に今も目の前の蒼い少女はミトレンが最大までに強化した拳を腹に打ち込まれてもけろつとしている。それどころかにいつと笑っている。正直気味が悪い。

さつきから防いでばつかで何も攻撃してこないのも謎だ。ガード以外の行動と言ったらミトレンが光の矢を発射するために作った光の

球を長い棒から発せられた蒼い炎によって一発で破壊したことからいしか思い当たることが無い。

「あんだ、時間稼ぎしてない？」

「ええ？そんなことないよ？時間稼ぎをしようなんてこれっぽちも思っていないんだからね？」

そう言っただけの少女、グリムは左手に持った長い棒で拳が駄目だと判断したミトレンの杖での猛攻を軽く捌きながら右手の親指と人差し指で全然思っていないということを伝えるかのようにジェスチャーをする。

そのジェスチャーを見てミtrenはフンと鼻で笑う。

「嘘ね」

「なんで？なんで嘘だつてわかるの？」

「だってあんだ汗をタラタラ流しながら抗議してるし。一目で嘘をしていることくらいわかるわ」

グリム、絶句。

「もう。ばれちゃしょうがないよね。最初は時間稼ぎして捕まえるつもりだったんだけど、今ここで倒しちゃうよ」

「できるものならやってみ——」

ガキーンッ！！

ミtrenは挑発をやめ、咄嗟のグリムの攻撃を杖で防ぐ。

（くそっ……この娘……死神か）

グリムの目は妖しく光り、体からはプレッシャーに似た冷氣のようなオーラを噴出させていることがミトレンにはわかった。この世界の死神独特のオーラだ。

ミトレンは自身の杖で防ぐグリムの得物を見る。柄と思われる部分に直角についている、よくファンタジーモノに出てくるような形をしたポピュラーな鎌。

しかし、グリムの得物の銀色に光る刃には蒼い何かしらの意味を持つ文字が刻まれ、妖しく光っている。

普段使われている農具の何倍ほどか……少なくともグリムの背丈くらいはある。

ギリギリとミトレンの木製の杖はグリムの鎌に削られる。ほんの数秒で半分近く。

「！？……限界まで強化したこの“祈りの杖”がここまで削られるなんて……！！」

「へえ。その杖が“祈りの杖”か。これが悪しきモノに絶大な力を発揮するというあの“宝具”なんだ。……」

クスクスとグリムは口の端を釣り上げる。

「大したモノじゃないなあ！」

ズバンッ！！

あははとグリムが笑い飛ばすと同時に杖は綺麗に斬られ、ミトレンの左腕が肩の部分から派手に斬り飛ばされた。瞬間、ミトレンの斬り飛ばされた左腕があつた場所から勢いよく血が噴き出す。

「っ！？くあぁっ！！」

ミトレンはあまりの痛さに叫ぶ。咄嗟に残った右腕で治癒の魔法をかけるが、血が止まる気配はない。

「クソッ！止まれ、止まれえー！！」

「止まるわけないじゃん。死神の鎌に斬られたんだよ？どんな魔法を使っても“神殺し”の武器の傷が治ることはないよ」

その言葉を聞いたミトレンの動きが止まる。“神殺し”の武器。確かにグリムはそう言った。

ぞくつとミトレンの背筋が凍る。その顔にあつた痛みに苦しむ顔が一瞬で怯えたような表情になる。

“神殺し”……この世界に存在する武器の中で唯一神と呼ばれる高位的存在を殺せる武器。その武器によってつけられた傷はどんな魔法を使っても治ることはない。傷がついた瞬間から徐々に腐りはじめ、最終的には体全体が腐り、死に至る恐怖の武器。

そんな武器を神である死神が持っているなんて……ミトレンは反則だと思った。

時間が刻一刻と過ぎていく。

時間が経つにつれてミトレンの体は黒く変色していく。

ミトレンの目からは涙がぼたぼたと零れ落ちる。

その様子を見て楽しそうに笑うグリム。完璧に狂っているのか、死神だからなのかは定かではない。

「ねえ」

「……何よ……」

ミトレンはグリムをきつと睨む。しかし、怯えながらの睨みは迫力が無く、グリムは何も怖いとは感じない。

「このまま苦しみながら死にたい？それとも苦しまずに死にたい？」

「……勝手にすれば？」

ミトレンは諦めたのかもう泣いたりすることはなく、恐怖の表情から無表情へと変わっていた。

グリムはつまんなそうに唇を突き出して拗ねたような顔になる。

「じゃあ、このままでいいか」

「……………」

ミトレンはただの屍のように沈黙する。その様子をグリムはただ見つめる。

ミトレンの体はもう殆ど腐り、黒く変色した塊になりかけていた。綺麗に残っているのは顔の部分と右足の脹脛くらいか。

「つままないなあ。本当につままない」

「……………」

喉がほぼ腐ったのか喋られなくなったミトレンはヒューヒューとわずかに開いた口元から呼吸をしている。正直まだ生きていられることが不思議なくらいに腐っているのに。肺はまだ腐って無かったのかとグリムは驚く。

「今頃皆は何してるんだろうなあ」

グリムは地面に鎌を刺し、そのまま体育座りをしながら考え事を始めた。

拾伍話 レイゼン平原の戦い。 弐（後書き）

なんだかグリムがチートみたいな感じに強いですが、あまり気にしないでください。（一応死神ですから）

そういえば主人公である榊中心の話を最近書いていなく、どんどん影が薄くなっている感じがします。

そろそろ榊中心の話を書かなければ……。

指摘、感想等一言お待ちしております。
それでは。

拾六話 レイゼン平原の戦い。 参(前書き)

か・な・り、遅れました。

すいません…………… 本当に自分勝手な作者ですね。

それでは、長らくお待ちしました。

拾六話、始まります。

拾六話 レイゼン平原の戦い。 参

拾六話 レイゼン平原の戦い。 参

ヒュウウウ……と氣候に合った涼しい風がレイゼン平原に風が吹く。先程までのあの暑さはもう失われ、今は氣候に合った気温にまで下がっている。

燦々とまではいかないが、やわらかな日の光が広大な大地に降り注いでいる。

グリムの言う『神様のチャンネル2』の世界の暦の上では秋である。

「榊様っ！先程グリムリーパーが敵の將軍と軍師を倒したとの報告がありました」

広大な大地に作られたそこそこ大きなどこぞの屋敷を思わせる「陣」に全身真っ赤な輕装の偵察兵がこの「陣」の最高責任者である榊のところへ報告にきた。走ってきたのだろうか、肩でせえせえと苦しうに呼吸している。部屋のドアを勢いよくドンと開けたのも疲れのためなのか。

「倒した？もしかして殺したでござるか？」

直立不動の姿勢でどっしりと構えている全身真っ赤な鎧を着こみ、兜はなく、代わりに鬼を思わせる目の部分が大きくあいた厳つい仮面を顔につけた鬼もとい武者、榊は眉を顰め、偵察兵に問う。榊の

鬼のような目を見てびくつと体を硬直させる。ちなみに榊の黄緑の目はよく見えるが、眉は仮面で隠れていて見えないので実際は眉をしかめたように見えたといったほうが表現的には正しい。

「倒した……ということでしょうか、そうではないかと」

「ふう。ぐりむには時間稼ぎついでに両方捕まえて来いと拙者は言つたのに……」

「ま、昔から人の話を聞かない方でしたからね……」

榊の横にいたサヨが若干呆れ口調でぼつりと呟く。サヨの服装はどこかにピクニクにでも行くようなジーパンにワイシャツにベスト。さらには羽付きの帽子なんかをかぶっている。

榊はサヨを一瞥すると、はあ。とため息を吐いた。

「?……どうしたんですか?」

サヨが頭に?を浮かべながら榊に問う。榊は「いや、なんでもないでござる」とサヨに気にしなくて良いという意味をサヨに伝える。サヨは「そうですか? なにか困ったことがあったのなら何でも言うて下さいね?」とにこつと榊に微笑む。いつものゼロ円スマイルとは違い、明るさ二倍増しの笑顔に榊はついついつられ微笑む。

(とても、そんな恰好で戦場に來たのか!? 死にたいのでござるか!!………とは言えないでござるなあ)

そんな軽装備では上半身と下半身がお別れになってしまってもおかしくないと思ふ。榊的にはもう少し何か着こんでいてもらいたいという思いがある。

もうこつちの世界に來てから何日、何週間たったのだろうか。榊は覚えていない。

（まあ、いざとなったら拙者が守るからそれくらいの軽装備で逃げ回っていてくれたほうが助かるという感じもしないわけではないのでござる）

実際、遊撃型なのだろう。そのための軽装備だと言われると納得できる。サヨの腰についているホルスターに収まった二丁の自動式拳銃^{アルティメットサヨバスター}USBは妖しく光っている。

なんともおかしな名前だなと榊は思うが、けっして顔にも口にも出さない。多分殺されるから。

ちなみにモデルは『神様のチャンネル1』の榊の元いた時代の何百年後かくらいに作られたコルトM1900という自動式拳銃らしい。

「で、今ぐりむは何をしているでござるか？」

「はっ、何もやる事が無いのでただひたすらぼーっとしているそうです」

榊はその言葉を聞いてため息を吐く。

「では、ぐりむに主の元に先に戻っているように伝えるでござる。

拙者らはこれからブレンダンの兵の残りを無力化するでござる」

「はっ！」

偵察兵は小型の通信機みたいなものを服の内ポケットから出すと、連絡をするためにアンテナを伸ばしスイッチみたいなものをオンにする。

そして、最初は猫撫で声で柔らかい感じで連絡するとスイッチをオフにする。その小型の通信機を服の内ポケットに入れると榊達の居たところから走って出て行った。

「さっきの子をあやすような声はなんでござるか？」

「アホの子に連絡していたのではないですか？………あの子すぐ泣きますし、軽くここら辺一帯をしようもない理由で焼野原に変えちゃいますしね」

榊の疑問にサヨは即答する。榊は話を聞く限りグリムのことをとてもメンドクサイというかはた迷惑な奴だと思う。

「で、いつ頃敵陣に攻め込みますか？」

「將軍と軍師を倒したらしいから敵は混乱しているだろう。混乱に乗じて一気に攻め込むでござる。……時間は十分後くらいでいいでござるかな」

「結構すぐですね」

「敵の大将はまだ健在らしいでござるからな。放っておくと色々と面倒でござる。策をたてられる前に攻め込み、一気に無力化し、そして大将を捕縛するでござる」

「わかりました。それでは兵全体に伝えておきますね」

そう言うときサヨは近くにあった大きな黒い通信機のスイッチをオンにすると、カラオケのマイクのようなものにむかって少々ドスの効いた声で「十分後にここを出る。各自装備を整え、「陣」の門の前に今すぐ集合！」と短く言うとき、通信機のスイッチをオフにする。

「そういえば、榊様は行くのですか？」

「無論、拙者が先頭になって敵陣に攻め込む。皆の士気を高めるためにも、皆の危険を少しでも減らすためにも。拙者が先頭になって敵を蹴散らすでござる」

へえーとサヨはぼーっとしていた。なんだかカッコいいと思ったのか。

「でも、將軍である榊様が前に出るのは危険なのは……」
「心配することは無い。拙者は負けなideござるよ。拙者がいる限り敗北なんてありえないでござる」

仮面の中の瞳は笑っていた。その瞳を見ていると榊に鬼神なんて言葉は似合わないと思えてきた。誰であろうか、この優しい武者に鬼神の異名をつけたのは。

「さて、そろそろ行くでござる」
「はい」

サヨは榊の右斜め後ろから三步下がって歩く。

これから戦場に行くと思うと、自然といつもと同じように体が強張るものだけれど今日は違った。
なぜなら今のサヨにはとても頼もしい人物がいるからだ。

名前は榊。

異世界から来た鬼神の異名を持つ武者。

初めて会った時から全体的に柔らかく温かい人だと思った、裏表が無くただ純粹で真面目でとても優しい武者だ。

これから戦場にむかうが、少しでもこの武者の役にたてるよう逃げながらも援護しよう。

自分の広い視野と長い射程と狙撃の腕で榊の障害を潰そう。
そうサヨは決意した。

拾六話 レイゼン平原の戦い。 参（後書き）

次回投稿はそんなに遅くならないと思いますが……………自分勝手な作者なのでどうなるかはわかりません。

こんな作者の書いている作品でも楽しんで読んでもくれたら嬉しいと思います。

指摘、感想等ありましたら一言お待ちしております。

拾七話 レイゼン平原の戦い。決着。（前書き）

今回はかなり長いです。（作者的に）
それではどうぞ。

拾七話 レイゼン平原の戦い。決着。

拾七話 レイゼン平原の戦い。決着。

「バドレン様っ！敵の軍が大門を突破しました！」

ブレンダンの銀色の兵が実の娘が戦っている最中に屋敷の最奥の塔にまで逃げてきたブレンダンの大将、バドレン・ブレンダンに状況を報告する。ユガ邸の赤い兵は一人の將軍らしき人物を先頭に真正面から攻めてきた。

あの先程までの猛暑で約三万の兵の過半数が散り、將軍と軍師の自分の実の子供が正体不明の蒼い少女に命を奪われ、他の兵が混乱している時に攻めてきたユガ邸の軍をバドレンは普段の厳つい顔をぐにやっと歪ませ、怯えた表情で望遠鏡を使って遠くから見つめる。兵の声が耳に届いていないのかバドレンはガタガタと体全体を揺らす。恐怖のため震えているのは誰でも見ただけでわかる。

「バドレン様！」

先程バドレンに報告した兵とは別の銀色の兵は自分の主人であるバドレンの名前を声を荒げて呼ぶ。ブレンダンの屋敷の門が突破されたのだらう。声の必死さがそういうことなのだろうと思わせる。

バドレンの持つ装飾過多な望遠鏡はある一人の人物を捉えていた。橙色の長髪の赤い異国の鎧に身を包んだ剣士。長い異国の剣である

刀を振り回しブレンダンの銀色の兵を薙ぎ倒すその姿はその敵つい鬼の仮面からわかるようにまさしく鬼だった。よく見ると一人だけで兵を薙ぎ倒しているように見える。他の赤い兵は皆一人の異国の剣士が切り開いた道をただ進軍している。ブレンダンの兵は何もすることができずにただ倒されていく。

まさしく無双。この戦場にあの異国の剣士と並ぶ力を持つ戦士はブレンダンの兵にはいなかった。

ブレンダンの兵は恐れのためかだんだんと後退し、ものの数分で完璧に退却の姿勢で屋敷のほうへ向かってくる。

「くそう！」とバドレンは装飾過多な望遠鏡を覗いたままちつと舌打ちをする。

「おいっ！どうなっている！……あの勇猛果敢だった我がブレンダンの銀色の兵たちは何故退却などをする！？」

「おそらく、恐れのためかと思われます」

「信じられん！そんなことがあつてたまるものか。……おいっ！この屋敷の門も突破されたのだな？」

「はい。おそらく敵の偵察兵が何かがしたものだろうと思われますが」

バドレンは必死に脳をフル回転させ、最善の策を考える。

屋敷の玄関を突破されたのなら今自分がある屋敷の最奥にある広い庭にある屋敷よりも高い塔に辿り着くまでには一時間弱もいらないだろう。どこぞの屋敷みたいに内部構造が迷路のようになっていないわけだし。

バドレンの頭上にピコーンと電球のマークが現れる。何か思いついたようだ。

「おいっ、この屋敷にいる兵はどれくらいだ？」

「ざっと五千強くらいかと思われます」

「その中の魔法使い共は？」

「ほんの四、五人くらいです」

にやつとバドレンは笑う。

「今からそいつらを庭に呼べ。残りの兵は庭に入られることのないように庭への門を死守させろ」

「はっ。了解しました」

命令を受けた銀色の兵はそそくさと部屋から立ち去る。

バドレンは塔の窓から庭を眺める。そこには先程の銀色の兵に連れられた四、五人の魔法使いがいた。

さつきとは別の銀色の兵が部屋に駆け込んでくる。

「バドレン様。魔法使いを連れてきました」

「御苦労。ではこの塔の儂のいる最上階の部屋まで連れてこい。一人残らずな」

「はっ。了解しました」

銀色の兵は部屋を出ていくと急ぎ足で下に降りて行った。

一人にやつとバドレンは笑う。

（憎き魔法使い共を利用するよい機会だ。ブレンダンの為に働いてもらおうではないか）

バドレンの目は塔の暗い部屋の中できらつと光った。

血と煙と火薬の混じる異様な匂いが辺りに立ち込めるブレンダンの屋敷の中を柵とサヨ達は駆ける。

ほぼ一本道のバカでかい廊下を柵を先頭にサヨ、装甲兵、狙撃兵、装甲兵の並びで奥のほうに突き進む。装甲兵は狙撃兵を守るように前と後ろについて移動する。

サヨはどちらかというと狙撃兵の部類なのだが、足が速く回避能力に長けているため護衛には今までだれも付いていなかったが今日はいつもと違い柵がいるため、柵がサヨを護衛する形になっている。突撃人数はざっと五千人くらい。「陣」には残りの五千人くらいが残って「陣」を守っている。

この屋敷に突っ込む前に柵は約一万くらいの銀色の兵を峰打ちや足などを斬るなどをして薙ぎ倒してきた。サヨは一瞬のうちに百人値で峰打ち等を繰り出し倒す柵を見て惚れ惚れとしていた。

（まさかたった一人で自分達の倍の兵を打ち負かすとは……鬼神の名がつけられたことが納得できます）

まさしく鬼神のような強さ。ここに来るまで自分達は援護射撃以外

に何もしていない。装甲兵なんてただの護衛だ。

（ここまで強い方が見方でよかったです。敵ならもう私なんか一瞬でバツサリですね）

サヨはふうとため息を吐く。榊の頼もしい後ろ姿を見るとため息を吐かざるを得ない。

「サヨ。おかしいと思わないか？」

榊の突然の問いかけ。サヨは首を傾げ、「そういえば敵がいなくてすね」と呟く。
榊は敵が何か企んでいると察知したらしく、周囲をきよろししながら走っている。

「サヨ。前方と後方に何か気配を感じないでござるか？」
「？」

サヨは前方と後方を交互に見る。特に目立った気配は無いが……
……。
はっとサヨは気づく。

「榊様！前方と後方に敵の気配があります。どうやら敵は挟み撃ちをするつもりなんだと思います」

「だろうな。後ろの装甲兵と狙撃兵の半分は後ろの兵を！残りは拙者と共に前の兵を！」

『了解！』

各自、個々の武器を構える。後ろの装甲兵と狙撃兵の半分はその場に立ち止まり、後ろから迫るブレندانの兵を迎え撃つ態勢にはい

る。

榊達は前にひたすら前進する。やがて敵の銀色の兵が剣を構え、榊達に突っ込んできた。

「はああ！」

榊は敵に突っ込むと次々と薙ぎ倒す。華麗に刀を振り回し次々と倒していく赤い鬼は勇ましく吠え、敵に恐怖を植え付ける。

サヨは遠距離から榊を狙ってくる弾や矢を自動式二丁拳銃USBで撃ち落とし、装弾数に制限が無いのかリロードすること無く機関銃のように引き金を引いたまま弾を銀色の兵を撃ちまくる。

乱射しているのに誤射が一回も無いのはサヨの腕がよいからか、榊の運が良いのかはわからない。

狙撃兵は立ち止り、武器を構え、仲間を誤射しないように狙撃する。装甲兵は榊とサヨの猛攻からぬけてきた兵を打ち倒す。

ものの数分もかからないうちに約二千五百程の前方の銀色の兵は全員地面に倒れた。今回仕留めた数は榊よりサヨのほうが若干多かった。乱射していたのだから当たり前か。

「これで前のブレンダンの兵は全部でござるか」

「そうですね。後ろのほうはまだ交戦中の様です。……どうします？ 榊様？」

「拙者とサヨと数人の狙撃兵だけを残し、他の兵は後ろの兵の援護を！」

『了解！』

そういうと、少数の精鋭のような凛々しい顔つきの狙撃兵だけを残し他の兵は後ろの兵の援護に行った。皆まだ余裕があるらしく、表情が柔らかい。了解の声も元氣がある。榊は上手くいっているなと

内心ほつとした。

「さて」

柵は前のブレンダンの兵が守っていた扉を見つめる。その木でできた大きい扉の中央には奇怪な魔法陣と思われる銀色の紋章が浮き出していた。

試しにドアノブを握って引いたり押したりするが開かない。鍵がかかっているのか。

「サヨ。どうにかならぬか？」

「うーん……………結構強力な魔法のプロテクトがかかってますね。下手に開けようとすると防御の魔法で神経を焼かれてしまいます」

アルティメットサヨバスター

というときサヨは自動式二丁拳銃A S Bを腰についたホルスターにしまうと右手を前に突き出して何かを高速でぶつぶつ呟く。その瞬間どこからか光がサヨの右手のひらに集まり、形を形成する。ものの数秒でロケットランチャーのようなものが出来上がる。

そのロケットランチャーをサヨは構えると扉に向けてロケットランチャーの先端についた榴弾を飛ばす。それは見事に扉に着弾し爆発するが扉が壊れるどころか傷すらつかない。

「あれはサヨの話に聞けるけつとらんちゃーか？」

「正確に言つとR P Gです」

柵の横から幼い少女の声が聞こえる。結構ハスキーな声に柵はびつくりして横を見る。

先程の凛々しい表情をした狙撃兵の一人だ。かなり若いのか背がかなり小さい。

「はあ……」

「略さないで言うと Rocket - Propelled - Grenade でロケットモーターで加速する榴弾を射出する無反動砲です」
「はあ……」

ペラペラとよくそんな噛みそうなことを言えるなと榊は感心する。
彼女はこういうことには詳しいのだろう。

「へえ。コーラルちゃんはよくそんなこと知ってるね。お姉さん感心しちゃったよ」

と、サヨが横からその背の小さな少女の頭を撫でながら言う。まるで母が子を褒めるときのようなそんな仕草を見て榊はクスッと笑う。そのコーラルと呼ばれた少女はかあつと顔を赤くしてサヨの手を払いのけて睨みつける。

「お子様扱いしないでよ！サヨ」

「お姉ちゃんは？全く。本当に昔から狼なんだから」

「実の姉妹でも無いくせにそんなこと言えないわ」

ぎゃーぎゃーとコーラルとサヨは言い争いをする。それを見ている他の狙撃兵が苦笑いをする。どうやらこういうことは日常茶飯事らしい。

「そのこーらるという小娘よ。前の扉は何とかならなくてござるか？」

榊の小娘という言葉聞いたコーラルが急に言い争いをやめて扉の前に行くのと左手を前に突き出すと一言「開け」と呟く。

するとどうだろうか。RPGでも傷がつかなかった扉がパカッと気持ちが良いくらいに綺麗に開いた。

「おおっ！すごいござる。やるではないか小娘」

榊はワシャワシャとコーラルの珊瑚色のウェーブのかかった肩ぐら
いまでの髪の毛を撫でる。わざわざ痛くないように籠手を外して撫
でることが榊の女性に対しての対応か。

コーラルは「えへへ」と年相応の少女の笑みをみせる。もつとやっ
てもつとやってという褒めてほしいという思いが榊に伝わったのか
ワシャワシャと榊は撫で続ける。
ふつとサヨは鼻で笑う。

「何がおかしいのよ？」

コーラルは案の定噛みつく。

サヨはいや……とクスクス笑う。

「飼い主に褒められて喜んでいる子犬みたいな表情をしているから
……つい……。普段ツンツン噛みつく癖にそんなにデレるなん
て面白いなあって」

「子犬っていうなっ！！」

コーラルの跳び蹴りをサヨはRPGで防ぐ。RPGはコーラルの蹴
りで碎けると光の粒になって消える。

「元気でござるな。お主らもそう思わぬか？」

「そうですね。あの娘はとても元気で狙撃兵皆のムードメーカーで
すよ」

「だろうな」

「ちなみに狙撃の正確さは彼女がナンバーワンです。正確さだけな
らサヨさんも敵いません」

「ほう。高性能すなばーというやつか」

榊とその他の精鋭狙撃兵達はサヨとコーラルの喧嘩？をみて談笑している。

確かに銃の腕だけならサヨも敵いそうにないと思う。サヨは体に数発当てて倒していたが、コーラルは全部一発で仕留めていた。しかも全てヘッドショット。一人だけ他の狙撃兵よりも遠距離で撃っていたので結構目立っていた。

乱射のサヨと正確なコーラル。弾の無駄使いをするサヨは結構な金食い虫かもしれない。

「あ、ちなみにサヨさんの弾はサヨさん自身の魔力でできています」

「魔力の蓄積量が半端じゃないのか？」

「はい。ちなみにコーラルも魔力の蓄積量は半端じゃありません。

それこそお嬢様の次くらいに」

「やはり主がなんばーわんか」

ははっ と狙撃兵達が笑う。

「そりやもう。いくら次といってもお嬢様とコーラルでは桁がかなり違いますけどね」

「コーラルが一としたらお嬢様は億くらいですからね」

うわあと榊は驚く。

「ちなみにどれくらい？」

「神に匹敵する量の魔力がありますよ」

普段仕えているスーは意外にもかなり強大な人物らしかった。あんな変態なのが。もはやチートだ。

榊は会話を断ち切るようにふつと扉のほうを見ると籠手を装着し、刀を構える。

「さて、サヨと小娘。そろそろやめるでござる」

むーと頬を膨らませるコーラルとげらげら笑ってるサヨは榊の見ている方向を見て背筋が凍った。

そこは大きな庭だった。花が咲き誇るスーの庭に負けなくらいの花畑だ。

普通なら和む風景だが、今はまったく和めない。

そこには五体の巨大な粘土でできた人型の像が立っていた。

サヨが「嘘……」と声を震わせる。

「あれはなんでござるか？サヨ」

「あれはゴーレム。簡単に言うると鉄壁の門番です。なにかを守るために作られ、自分からは攻めることのない人形です」

「ほう。で、あの人形の中に入っているモノはなんでござるか？」

サヨは驚く。榊がゴーレムを見ただけで中に何かが入っているのかわかったかのように聞いてきたのだから。その声はとても澄んでいて榊の決意がひしひしと伝わってきた。

「生きた人間です」

「ほう。やはりな」と呟くと榊はゴーレムのほうに歩みを進める。ゴーレム達は口のような部分からプシューと蒸気を吐きだす。曇った赤い大きな一つ目が榊を見つめる。

「榊様っ！一人では無茶です。一回後退して作戦を練りましょう！」

「何故でござるか？」

「見たところあれは古代の大戦で使われていた旧式のゴーレム。核となる人間は入っています、中の人間の制御は全く効きません。」

一言で言うなら狂戦士^{バーサーカー}です」

「何が言いたいでござる？」

「それ以上近づくとたとえこちらが攻撃する意思が無くても徹底的に攻撃を仕掛けてきます。そして中の人間の命が尽きるまで無限に再生し、止まりません」

榊は足を止め、後ろを向く。

サヨをまっすぐ見つめる榊の目は少し潤んでいた。

「中の人間を、救い出す方法はあるか？」

「ありません」

サヨは榊の目をまともに見る事ができずに視線を逸らす。榊の目をみていると自分が泣きそうで怖かった。

ずっとコーラルが右手を挙げる。

「どうした小娘」

「正確にはまだゴーレムは本格的に起動していない。……………方法がある」

「ほう。言ってみるでござる」

決心した顔でコーラルは榊を見つめる。

「スーお嬢様を呼び、中の人間を取り出してもらうことです」

「コーラル！それは膨大な量の魔力をつかうからお嬢様に負担がかかる。…………お嬢様の体が弱い知ってるの？」

「知ってるけれどそれ以外に方法は無い。本格的に起動する前なら

それでいけるけど本格的に起動したらもうゴーレムの中の人命救助は不可能。……………まあとりあえずはお嬢様に連絡してみても指示を仰ぐのが最善の策だと私は思うよ」

サヨはキツとコーラルを睨みつける。優しいお嬢様のことだ。二つ返事で了承してゴーレムから中の人間を救出するだろう。自分のことを全然気にしないで。

サヨに睨みつけられたコーラルの表情は思いのほかけろっとしている。こういうことには慣れているのだろう。

「サヨ」

「なんですか」

サヨは榊の目を見ず、コーラルを睨みつけたまま返事をする。

「主に連絡を」

「嫌です」

「強情を張るな。主に連絡を」

「嫌です」

ふうと榊はため息を吐く。

「ではサヨ。拙者の予想だとこのまま何もせず放置しておくとな敵の大將は主暗殺を企てる黒幕のところへ逃げるであろう。おそらくはあのごれむは時間稼ぎ用。中に入っているのはおそらく敵の大將が嫌っていた魔法使いだろう」

サヨは反応しない。

「そして力を蓄え、ユガ邸に大群で押し寄せるであろう。それこそ

ユガ邸の兵力の何倍、何十倍、何百倍の大兵团が」

サヨははっと反応して榊を見る。

「サヨの話を聞く限りもしこのまま突っ込むと拙者らは間違いなく壊滅。かなりの犠牲を生む。そして近いうちに兵力が極端に減ったユガ邸が襲撃され間違いなく滅びるであろう。少なくとも拙者の今の力では守りきれぬ自信は無い」

サヨは榊の目を見つめる。

「で、最後に残った選択肢は主に連絡を取ることだ。仮に主が助けに来たとしても、何も一人で来る訳はあるまい？」

「あつ……………」

サヨは気づく。

「主と同じかそれ以上の魔力を持つグリムも主は連れてくると拙者は思うでござる。主も馬鹿ではない。ちゃんと考えているだろう」

榊はサヨの目を見つめる。

「死神でも神でござる。魔力は有り余っていると思うでござるよ。

……………さあ、サヨ。連絡するでござる」

「はい……………」

ポケットからトランシーバを取り出し、サヨはスーに連絡を取る。

「もしもし、お嬢様？」

「なあに？サヨ？」

ふっと、サヨの真後ろから声がした。サヨは慌てて後ろを振り向く。そこには後ろのブレンダンの兵と戦っていたユガ邸の兵を引き連れたスーとグリムと……何故かクランツがいた。クランツの肩には何故か簀巻きで猿轡までつけられた威しい男性が担がれている。

「お嬢様！………なんでこんな前線に」

「いやあ……暇だったから来ちゃった。敵さんの大将もあつさり捕まえちゃった。本当に転移って便利だねえ」

「いやあそうですね。難なく侵入するにはもってこいの魔法ですな。………それにしてもまったくブレンダンの人間がどれほどの戦闘力を持っているのかと期待した私が馬鹿でした。まさか拳一発で終わるとは」

「主？いつからそこに？」

榊は驚愕の表情でスーを見る。

「榊があ、旧式のゴーレムに突っ込みそうになる前から。姿隠してた」

「あなたという人は………では拙者らの話も？」

「うん。全部聞いていた。………さてグリム？人命救済を始めるよ？」

「わかった。………まあ死神が人を助けるのってあまりないからあ皆凝視しなさいよ！」

その場一同別に凝視しなくてもいいだろというツツコミはしなかった。グリムを泣かせる危険性があつたからだ。泣かせたら全てが「ばあ」だ。

ずっと魔法で浮き上がるスーとグリム。柵達が米粒ほど小さくなるまで上昇すると二人は止まる。柵達は邪魔にならぬよう屋内に避難した。

スーはゴーレム達の動き出す一歩手前のところで止まり、右手を突き出す。その手のひらに光が収束すると真っ白なスーの身長ほどの長い杖が現れる。

スーはゴーレム達に杖の先端を向けると一言『固定』と呟く。白い縄状の光がゴーレム達を地面に縫い付ける。

次にスーは『停止』と呟く。白い縄状の光はゴーレムの全身に突き刺さる。ゴーレムの曇った赤い瞳は色を失い、黒く変色する。機能が完全に停止したのだろう。

刃を隠した棒を頭上でぶんぶんとグリムは振り回し、棒の先端をスーに向けて『対象を選択』と呟く。スーの足元に蒼い魔法陣が現れ、そこから柔らかな蒼い光がスーを包む。

次にグリムは『対象捕捉。魔力の供給を開始』と短く呟くとグリムの体は蒼く発光する。スーの体はグリムと同じように蒼く発光する。もつとも、その光は蒼というよりは水色であった。

『これより、救命の大魔法陣を形成する』

スーとグリムの二人の声が見事に重なる。二人の体が強く輝くと水色のブレンダンの庭をすっぽり覆うほどの魔法陣が一瞬で地面とスー達のすぐ足もとに形成される。

『玉を形成』

魔法陣に五つの大きな玉が形成される。その玉はゴーレム達の頭上に一つずつ形成される。

『目標を捕捉。照射！』

水色の大きな光の柱がゴーレム達を包み込む。膨大な魔力が地面を震動させる。榊達も揺れている。

やがて、ゴーレムの体から核にされた魔法使い達が出てくると、空中に引つ張り上げられる。

ゴーレムから全ての魔法使いが出るとゴーレムは崩れ、元の土になる。

『照射を中止。救命の大魔法陣を分解』

光の柱が消え、魔法使い達がふわふわとゆっくり落ちる。

救命の大魔法陣は文字通り徐々に分解されていき、空中に四散して消えた。

魔法使い達が柔らかい草花に受け止められ、その数秒後にスー達が降りてきた。

榊達は揺れで倒れた自らの体を起こし、スー達に近づいていった。

「主……………ぐりむ……………」

「これでえ、一件落着う」

にっとなスーは笑って榊に抱きついた。

拾七話 レイゼン平原の戦い。決着。（後書き）

今回はかなり長いので（作者的に）誤字、脱字が結構あるかもしれません。

これでレイゼン平原の戦いは終わりです。

また日常に戻ります。実はこの後のネタを考えてなかったり。またゆっくりと更新していきます。

指摘、感想等一言お待ちしております。
それでは。

拾八話 戦の後はゆっくりと……。 (前書き)

大変お待たせいたしました。

拾八話です。

今回はちよつと榊視点で書いてみました。誰かの視点で書くのは初めてでへたくそかもしれませんが、楽しんでいただけたら良いなと思います。

それではどうぞ。

拾八話 戦の後はゆっくりと……。

拾八話 戦の後はゆっくりと……。

レイゼン平原での戦いはユガ軍の勝利で終わった。

ブレンダンの兵はほぼ全員（將軍のアトレンと軍師のミトレンと数名の兵士は死神グリムリーパーによって殺された）ユガ軍に捕らえられた。それはブレンダンのリーダーであるバドレンも例外ではなかった。

バドレン・ブレンダンはユガ邸地下の牢獄に入れられ手と足に魔法で鍛えられた金属製の枷をつけられ、看守数名が常時見張られているブレンダンの兵の大半は片足がユガ軍の將軍、榊によって斬られた為義足をユガ軍の衛生部隊につけられ、ユガ邸内にある医療系フロアに入れられた。

ユガ軍の兵は負傷者こそいたが、死者は一人も出ていなく、ユガ軍のリーダーであるスー・R・ユガは皆が無事戻ってこられたことをとても喜んだという。

レイゼン平原の戦いは勝利し、スーを狙う暗殺者はいなくなつた。

暗殺者はいなくなつたものの、榊はスーの眠るベッドの近くに胡座をかいて護衛を務めた。それに対し、主であるスーは「別に護衛しなくてもいいよ。…… ゆっくりベッドで寝ればあ？」と提案したが、榊は首を振って断固拒否した。

何回もスーは言ったが、止める気はなさそうなのでスーは言うのをやめた。

今宵も榊はスーの護衛のため、スーの眠るベッドの前に胡座をかい

て座る。

主が寝てからどれくらいの時間が経ったのだろうか。

拙者、榊は今宵も主の護衛のため主の部屋で夜を過ごす。この世界に来てから自分の主の護衛がいつの間にか習慣になった。拙者が前に仕えていた主の護衛は十分居たため、拙者は夜はきちんと休んでいた。

無論、眠ってはいなかったが。きちんと、体を休めていた。

前の世界では護衛をする必要がなかったので拙者は夜になると武具の手入れをしたり、外で素振りをしたり、月を眺めたりしていた。

拙者は勉強はさっぱりなので勉強系の物には全然手をつけていなかった。ちなみに字は読める。これはできなければ色々と不便だと母様に教えてもらっていたからな。

そういえば、この世界に来てから一度も月を眺めたことがない。今仕えている主の護衛のため、そういうことはできないからか。

久しぶりに月を眺めたいものだ。あの美しい、丸々とした黄金の月を。

「ねえ」

「!!!」

不意に、後ろから主の声が聞こえたかと思うと拙者の体に残るから凭れ掛ってきたではないか。物思いに耽っていた所為か、全く気がつかなかった。

主の吐息が拙者の右の耳にかかる。頬が高揚するような奇妙な感覚に襲われた。

「主、どうしたでござるか？」

主の返事はない。気になって後ろを振り向くと、やけにとろーんとした顔の主が拙者の体に凭れ掛ったまま拙者の顔を見つめていた。何がしたいのか、さっぱりわからない。もう一度、拙者は聞いてみようと思った。

「主？……どうしたでござるか？」

「……ねえ……」

ねえ？だから何なのだろうかと拙者は疑問に思っ。

「榊はあ、今さっき何を考えていたの？」

なんだ。そんなことか。いつものようにやましいことを考えているくてよかった。

「ちょっと昔のことを」

「昔？……ふーん……」

何なのだ？どうしたのか？主の考えていることが良くわからない。

「榊。たまには一緒に月でも見る？」

「は？」

一緒に月でもみる？……まあ別に良いか。

「主は眠らなくて良いのでござるか？」

「コーヒーの飲みすぎなのかなあ……全然眠くないんだあ」

「そつでござるか。……なら暇つぶし代わりに見るでござるか」

そう言うと主はその場にすくと立ち上がる。するとそのままべらんだに続く大きな硝子の扉のある壁側に歩いていき、白いかーてんを紐で縛ると露わになった硝子の扉を大きく開け放った。

「主、何か着なくて大丈夫でござるか？」

「別に寒くないから要らないかなあ。この世界の季節は榊の居た世界の国の春と秋くらいしかないからあまり寒くないよ」

でも流石にねぐりじえのままでは寒いのではないかと拙者は思うが主は要らないと言ったので無理に勧めないことにする。秋蓮様は無理に勧められるのが嫌いだったから。主も歳が近いからきつと嫌いだろう。

拙者は刀を腰に差すと主の待つべらんだの方へ向かった。

広大な屋敷の中では珍しく一人か二人しか入れないべらんだに出ると、主が端によってくれた。拙者は申し訳ないと思い主に謝ろうとするが「別にいいよお」と笑いながら止められた。優しい方だと改めて実感する。

「あ、今日の月は満月だあ」

主の一言で拙者は斜め上の空を見上げる。雲一つない夜空に大きな丸い月が光り輝いている。他の細々とした星よりも一際輝いているその月は拙者の故郷の空で見た月と同じように黄金色に輝いていた。

「……美しい。……何日ぶりだろうか。この満月のように美しい月を眺めたのは」

「この世界の月は綺麗だよ？特に満月はね。……榊の元居た世

界の月はどうなの？」

「拙者の元居た世界の月は綺麗というか……………美しかったでござる。どんな形の月でも」

「へえ……………いいなあ」

主の顔が好奇心丸出しの年相応の可愛らしい子供の顔になる。今の主は眼鏡をかけていない所為かいつもよりも可愛い。

「ねえ榊？……………ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいかなあ？」

「？……………どうしたでござるか？別に……………良いでござるよ」

いきなり如何したのだろうか。頬を少し赤くしてもじもじとした主はさつきよりも可愛らしく感じた。

「じゃあ……………榊って、正直今の主であるスーと前の主の娘の秋蓮って人のどちらが好きなの？」

「！！？……………どのような意味で？」

「どのようなって……………うーん……………一人の……………じゃなくて、意味はあまり無いけど、榊の思ったとおりに」

なんだか訳の分からない質問だなと拙者は困った。どのように答えようかと。好きとは色々な意味があるから答えにくい。

「主は優しくて、面白くて、可愛くて人間的に好きな方でござる。

……………秋蓮様は、可憐で今にも折れてしまいそうなほどに儚く、本当に護ってあげたい……………そんな意味で好きな方でござる。……………どちらが好きというか、拙者は二人とも好きでござるよ」

拙者は思ったとおりに話した。拙者の気持ちとしてはこれが事実だ。

途中主の悲しそうな顔を見て心が痛んだ。

主はうんうんと頷く。拙者が疑問に思っているうちに主は突然拙者の胸にとびこんできた。

「！？……どうしたでござるか？」

「いや……………榊の正直な気持ちが聞けて嬉しかったなと思ったらなんだか抱きつきたくなってつい」

なんじゃそりやと拙者は思った。……………まあ主の顔が笑顔だったから本当に嬉しかったんだろうなと思う。

「はあ」と主は拙者の胸の中でため息を吐く。

「それにしても、妬ましいねえ。何を食べたらこんなになるんだか」「主？そろそろ離れてくれないか？」

「やだ。だってえ榊が暖かいんだもん。……………それに眠くなって来ちゃったから体が言うこと聞かないの」

「ふう……………。ではそろそろ部屋に戻るでござるよ。全く世話がかかる人でござるなあ」

拙者は主を背負うとべらんだから出て硝子の扉を閉め、かーてんを閉める。

「抱っこがいいなあ」

「我が儘言わないでござる」

「ぶー。スーはこの屋敷の主なんだよあ？偉いんだよあ？」

「だからといって我が儘を許すと将来ろくな大人にならないでござる」

脳裏にクランツ殿の顔が過ったが気にしない。気にしたら負けな気がする。

「よつと」

べつどに主を降ろそうとした瞬間主に胸を掴まれたが、平常心を保って主の手を引き剥がし、布団を被せる。取り乱したら主の思うつぼだ。

全く。今からこれじゃあ将来が心配だ。

「けち」

「けちじゃないでござる」

ここから寝かしつけるのに数十分も時間をかけてしまった。全く。

拾八話 戦の後はゆっくりと……。 (後書き)

冬休みになっても暇が無いってどういうことじゃー！

……はい。白鳩です。大変遅くなつてすみません。
覚えてくれている方はいらっしゃいますかね……。

最新拾八話投稿です。 夏頃？に書きはじめたこの「ある武者の希
有な物語」が結構続いていることに作者である白鳩自身もびっくり
しております。

今年もできる限りたくさん更新したいと思っております。
見守っていただけたら嬉しいです。

誤字脱字、感想等の一言お待ちしております。

それでは。

拾九話 今日も平和です。（前書き）

どれくらい遅れたのでしょうか。

気が付いたら二ヶ月以上も更新していないという事態に陥ってしまった今日この頃。

忙しいという言い訳はしません。

楽しみにしていただいていた読者の皆様、大変お待たせいたしました。
た。

拾九話、少々変態チックな物語の始まりです。

拾九話 今日も平和です。

拾九話 今日も平和です。

あの戦から四力月。何事も無い平和な日々を榊達は過ごしていた。戦の後の夜から暗殺者の影は姿形も無く消え、榊は夜の主の警護の時間がとても暇になっていた。何もすることが無いのである。かといって、眠ってしまうと何時暗殺者が再び現れて主の命を奪うかもしれないのでおちおち眠るわけにもいかない。

ある日の午後、榊は六畳一間の元倉庫である自室で久しぶりに刀を抜いて手入れをしていた。といっても、榊の刀は何故か錆等が全く無い所為か刀身を拭く必要も無ければ斬れ味が全く変わらないので油を使うことも無い。またにも刀の手入れをしたことは今までの人生の中で一度も無い。

そんな奴が武者をやっている良いのかと榊は時々疑問に思うが、別に手入れをしてもしていなくても外見が武者なので武者をやっている良いだろうと全く良い大人なのに子供のような考えで自己完結する榊は、榊の居た世界の遥か未来で言う「頭の緩い馬鹿」なのである。

「それにしても……………」

榊は溜息を吐く。

「暇でござるなあ」

カチツと金属音を立てて鞘に刀を納めると榊は胡座を掻いて両手を前にぐっと伸ばして伸びをする。

ブレンダンの主はあれからずっと口を割らずにと不敵な笑みを浮かべている。まるでこちらの反応を見て楽しんでいるようだ。榊は尋問の担当では無いのでブレンダンの主の顔をあの戦以降見えない。

早々に、暗殺の真意を吐いてくれればこちらもあちらも気が楽だといふのに。と、榊は心の中で思う。

「だが拙者はたとえ敵に捕まったとしても口は割らんでござろうなあ」

榊は一人、ケタケタと笑う。

主君のことを思えば、口を割るなんて馬鹿なこととはしない。しかしブレンダンの主は何故口を割らない？自分が主なのに。………もしやブレンダンの主を陰で操っているような輩がいるかもしれない

——と、榊は頭の中に妄想を膨らませる。ありえそうな展開である為、あながち間違っているわけではないだろうと榊は思う。

「気にしても仕方が無い。今日も主の所へでも行くでござるかな」

榊はすつと立つと、近くに置いてあった草履を履くと部屋の扉を押すようにして開く。……榊の使っている部屋は和室だが、この「ユガ邸」の造りは榊の居た世界で言う西洋式なので大体西洋の建物の造りに則った

形で造られている。よって、部屋の出入り口は扉だ。

「あつ」と、榊は唐突に自分の右手についている紅い二本の剣が交差したような紋章のことを思い出した。

あの戦の後、主から教えられていたことがあった。

契約の紋章…………… ユガ邸の従者なら必ずつけている二本の剣が交差したような紋章は色によって違うことがある。

ユガ邸の施設を自由に利用できること、ユガ邸の全域の部屋や施設の光景が何時でも見られること、ユガ邸の主の元へ一瞬で飛んでいけること。

紋章の色は緑、青、紅。

施設利用は緑、千里眼のような物は青、瞬間移動は紅。

榊の右手に輝く紋章の色は紅色。つまり瞬間移動ができる。

結構便利な能力なので有効活用してほしいと榊はスーに頼まれていた。

「試しに使ってみるでござるかな」

榊は右手を前に突き出すと、目を閉じてスーのことを思い描く。

眼鏡をかけた「灯り要らずの少女」の姿が頭の中にはつきりと浮かび上がると榊は短く息を吸って「主の元へ」と呟く。確かこんな感じで良いんだなと榊はスーに聞いた方法で試してみた。

「あ、榊いらっしやい」

ふと目を開けるといつの間にか榊は真っ白な空間の中に立っており目の前に榊の主であるスーが居た。突然のスーの登場に榊はぎょっとする。

その様子を見たスーは頬を膨らませる。少しむっときたのだろうか。

「なーに？何かファンタジックな事でも起こると思ったのあ？」

「そのとおりでござる」

何かしらのアクションが起こると思った榊にしては、少々残念な飛び方だった。普通に魔法が使われていたりする世界だからやたらと派手な演出でもあるのかと期待したのが間違いだったのかと榊は頭を軽く叩く。

「あはは」とスーは脹れ顔から笑顔になると榊にぎゅっと抱きついた。

「速度重視だもん。それにスーは派手な演出嫌いなもの」

「緊急用だったりするのでござるかな？」

「あつたりー！」

スーは榊の胸に顔をつつこんで猫のような何とも気持ちよさそうな表情で陽気に笑う。少し前まではこんなことを恥ずかしがってた榊は慣れの所為もあつてちよつとやさつとの事は平気になった。

そんなきやつきやうふふな光景を見て、スーの後ろに直立している老執事は嘆息する。

「どうしたでござる、克蘭ツ殿？」

「羨ましいなあ。出来れば私も加わりたい……」

「変態はすつ込んでいるでござる」

左手でしっしつと虫を追い払うような仕草をする榊を見て克蘭ツはまたもや嘆息する。最近急に老けた克蘭ツにはそう言った変態的な物が欠けているらしい。年の所為なのか？と榊は疑問に思うが少しの間だけ。変態のことなんか気にしてどうすると榊は溜息を吐く。

ふと、何か胸が異様に熱くなったなと榊はスーの顔を見る。

「ふ……………ふふふふ」

「お嬢様！？」

克蘭ツはスーの元にすつと寄ると榊からスーを引き離す。

「ふふ……へへへへ」

ぶしゅーと顔から蒸気が出そうな程………というか既に出ているスーは顔が茹でたタコのように赤くなっていた。

克蘭ツは懷から長方形のシールみたいなものを取り出すとスーの額に張り付ける。それからスーを抱き上げると大きなベットに寝かせる。

「オーバーヒートしておられる………それほどの破壊力があればはあったのか……恐ろしい、いや素晴らしい」

何が素晴らしいのだろうと榊が頭にクエスチョンマークを浮かべる。くくくと克蘭ツが不気味な笑い声を出す。小刻みに震える体はとても気味が悪いと榊は思う。

「何が素晴らしいのでござるか克蘭ツ殿？」

スーの額からシールを優しく取ると、近くにあった冷蔵庫から氷をありったけ出すと克蘭ツは薄茶色の袋に入れてスーの額にのせる。冷蔵庫の隣にあったゴミ箱にシールを捨てると克蘭ツはくるつと体を回転させて榊の方に頭を下げてそのままの姿勢でつかつかと歩み寄る。傍から見たら奇人だ。

「榊嬢の………おふっ」

克蘭ツは頭を上げて榊を見た瞬間、両手で鼻を押さえた。ぐつと力が体から抜けていくのが傍から見ても分かるくらいに弱弱しく、

その場に崩れ落ちる。

「クランツ殿！」

榊は崩れ落ちたクランツを片膝をついた姿勢で抱き起こす。

「大丈夫でござるか！？」

榊はクランツを揺する。クランツの瞳は焦点を失ってあさつての方向を向いていたが、やがて焦点が合うと榊の顔に視線が向かう。ふっと、クランツは笑う。

「大丈夫でござるか！？」

「わ……………ざと……………か？」

「は？」

「わざとか…………？」

「何が言いたいのでござるか！？しっかりするでござる」

榊はクランツを揺する。榊の瞳は涙が零れ落ちそうな程潤んでいた。こんな変態爺でも良い人だった。一番の年長者としての貫録もあった（？）、自らの命を投げ出す覚悟で主であるスーを守るうとしたこともあった、戦の時は戦って敵の大將を捕らえた。たくましくて、笑顔溢れる優しい執事の命の灯が今にも消えそうで榊は悲しかった。瞳が閉じかかっているクランツを見た榊はまだ逝かないでくれ、まだ逝かないでくれ！！とクランツを激しく揺する。

ごふっと、両手を鼻に押さえたままクランツは口から息の塊を吐き出すと、榊の顔を見た後に榊の胸元を見て溜息を吐く。

「立派なものだ。……………なあ」

「……………」

遺言だと思った榊は叫び、揺するのを止めて静かに耳を傾けた。

「立派なものだ。……………その大振りで丸い果実のようなそれは雪のように白く、先についた桃色の程良い大きさのそれはとても淡く、美しい」

克蘭ツはゴホツと咳をすると同時に少量の血を吐く。榊は克蘭ツの瞳をしっかりと見据えている。

「それを、こんな間近でこの老いぼれの眼に焼き付けることが出来たなんて……………私は幸せ者だ。ただ……………」
「ただ……………？」

克蘭ツは静かに微笑むと榊の今にも泣きそうな瞳を見つめて静かに息を吸った。

「最後に、私はそれを……………むしゃぶりつく……………することが出来なかったのが……………がはっ……………残念だっ……………」

ふっと克蘭ツは口を開いたまま静かに目を閉じた。

榊は克蘭ツを静かに横たえると、床に正座をして両手を合わせ、黙祷をした。

克蘭ツが逝って数分後、部屋の扉が勢いよく開け放たれ、ドタドタという荒々しい足音と「大丈夫ですか!？」というサヨの声と共に数人の従者が部屋に入ってきた。

榊は黙禱を止めるとサヨの方に振り向く。と、榊が振り向くとサヨの後ろにいた重装備の衛生兵と思われる人物たちの被っていた透明のヘルメットが赤く染まり、その場に崩れ落ちた。

「大丈夫ですか！？……………」

一人の従者の元に駆けつけるとサヨは従者の左手首を取ると自身の右手人差し指をあてる。

「脈はあるみたいだから大丈夫みたいですね」

ふうと溜息を吐くサヨ。サヨは残りの従者の様子を確認した後榊の方を向くと、顔を真つ赤に染めて息を短く吸う。

「大変申し訳にくいのですが――」

「何でござるか？」

「榊様。前。貴女様の至宝が丸見えです」

「は？」

榊は自分の胸元を見下ろす。

ちゃんと収まっていたはずのそれは、重力に逆らってその形を保持し、部屋の明かりに照らされて神々しく輝いていた。

榊はサヨの方を見る。サヨは鼻を押さえて溜息を吐く。

瞬間、ユガ邸に甲高い少女のような悲鳴が響き渡ったのは言うまでもないことだ。

拾九話 今日も平和です。（後書き）

どうも白鳩です。皆様に多大なご迷惑をおかけしたことを深く反省しております。

といってもそこまで大きくないなと思ったり（殴

お前ふざけんなよと友人に怒られて更新した次第であります。なんて自分勝手な作者でありましょうか。

今回の話は少し変態チックであり、多くの血が流れました。
この小説の「中身」はとても平和です。

貳拾話 とりあえず落ち着こつよ。(前書き)

すみません、遅くなりました。
楽しんでいただければ幸いです。

貳拾話 とりあえず落ち着こうよ。

貳拾話 とりあえず落ち着こうよ。

臭いと匂い。読み方は同じなのに何故か意味は違う。

前者の臭いの意味は、臭いとか悪臭等の生物を不快な気持ちにさせるモノであり、後者の匂いの意味は香しいや芳しい……………同じような意味か。…………とまあ生物の気分を良くするモノだ。

対象的というか善悪というか兄弟というか……………なんで兄弟？なんでだろう。

ああ、もうわかんない！

「何をそんなにいらついておられるのですかグリム様」

「何でも無いよっ！」

一人のボーイが私に声をかけてきた。多分悩みがあれば聞いてあげようと気を使ったのだろうが、今の私の心境からしてとても話をする気分ではないのだ。

そのボーイは私の人を突っぱねるような言葉を聞いてただ苦笑していた。なんだよこの優男。私はあなたに興味ありません。

私は早くあっちに行ってくれという意思を伝えるためにぷーと脹れて見せる。あ、案外今の私って可愛いかも！……………何考えてるんだか私は。ナルシーか！

「あはは」とボーイは懐からメモ用紙と鉛筆のような物を取り出してにつこりと笑う。何が可笑しいんだこのボーイ。

「ウザいのですか？グリム様」

小首を傾げて私の顔色を窺うように聞く羊君。髪の毛が羊みたいな白色で天パだから羊君でいいや。ボーイよりかはこっちの方が可愛げがあって良いだろうし。

てかウザいって何よ。ウザいって。私一言も言っていないよー！

「別に、ウザいというわけじゃないけど……………てかウザいって何がウザいのよ」

「僕に聞かれましたも……………」

羊君は困ったような顔をした。高身長でひよろひよろとまではいかないけどそこそこ細く華奢で可愛い顔立ちの羊君は頭をポリポリと掻いている。

それにしてもウザいって何だろう。最近の若者の言葉ってわかんないなー。伊達に何千年も生きてるわけじゃないよ。あ…………誰か私のこと、ばあさんって言わなかった？酷いなあ。ばあさんなんて。これでもぴちぴちな十何歳なんだぞ？見た目はね。

私は疑問に思った為羊君に聞いてみた。

「ウザいってなんなのよ」

「は？」

「は？……………じゃなくてウザいって何なのよ」

「意味ですか？」

「そう！」

「はあ……………」

羊君の頭を掻く速度があがる。この子は頭を掻くのが癖みたいだなと私は勝手に思い込む。

暫く頭を掻いた羊君は、自信なさげな表情で「あー……………」と見るからに弱弱しそうな感じに私に答えを伝えようと口を開いた。

「ウザいというのは……一般的な若者言葉で、代表的な意味では鬱陶しいとか気持ち悪いとか……そんな意味だったと思います」
「ふん……」

ま、意味なんて別に頭の中に入れておかなくてもいいや。どうせ使わないだろうし。そんな言葉を使う生物は気色悪いというか気持ち悪いと思う。……あ、意味同じだっけ？ ああ、もういいや。全ての生命に死を与える死神はそんなことを気にしてはいけません。……何故敬語？ なんでだろ。

「ところで……」

「なによ」

「ご注文は何になさいますか？」

「は！？」

「……一応ここは食堂なので」

言われてみて辺り一面を見渡す。

円形のテーブルと二、三個の椅子がセットになった物が何十個も無造作に並べられ、空気中には美味しそうな匂いが漂っているこの室内はいかにも食堂といった感じだった。

ピシリとメイド服やスーツを着こなした老若男女が他愛もない世間話に花を咲かせながら食事をしている。どのテーブルも笑顔が溢れてて良いなあ。

「ねえ」

「はい、何でしょうか？」

「なんで私のテーブルには人がいないの？」

「……一応ここはVIP専用なので」

「VIPで何？」

「おもに賓客という意味です」

「私ってVIPなの？」

「はい。お嬢様の御友人の方はVIPです」

そうなんだ。要するに私は重要なお客様ということなのね。ただ遊びに来てるだけなのにVIP扱いなんてお金持ちはすごいね。本当は遊びに来たんじゃなくて召喚されたんだけど。

私はテーブルの上にある正方形の氷と綺麗に透きとおった水の入った蒼いグラスを手に取ると、一気に飲み干した。

「ねえ」

「はっ、ただいま！」

まだ何も言っていないのに、水のおかわりだと勘違いされたのか羊君は早足で厨房の方へ行ってしまった。一人じゃ寂しいし、何かお話ししようかと思ったのになあ。仕込まれてるのかな。接客とか諸々もちっと勉強した方がよいよ？「ねえ」だけで判断しちゃいけないんだからね。

数分……いや、数秒で羊君は水の入った蒼い容器を持ってきて私のグラスに水を入れた。本当は容器にも名前があるんだけど私にはわからない。だってアホだもん。

「ねえ」

私は右手でグラスを持ってカランと氷と氷をぶつけて音を出して遊びながら羊君に話しかけた。

「はっ」とその場で気をつけをする羊君。相当仕込まれてるのかな、妙に固い。………妙に固いのは勉強不足なのかな。普通自然体で要望とか聞くものでしょ。

「固いね」

「……………申し訳ありません！」

深く、土下座する羊君。だから固いんだって。

「あのね、もうちょっと自然体で接してくれないかな？そうやって土下座することか、気をつけとか、話を聞かないことか……………
…なんだか固いよ」

「申し訳ありません！」

額を床につけて深々と謝ってる羊君を見て他のテーブルで見えていた従者たちは「あーあ、やつちゃった」とか「何やってんだあいつは」みたいな目で羊君を見ている。そんな冷たい目で見えるかな普通。

私ははあつと溜息を吐くと右手に愛用の鎌の棒の部分だけを召喚して羊君の左肩をぼんぽんと叩く。

「頭上げなつて。いちいち謝らないの。分かる？私はさっきから固いって言っているよね？それは君の接し方が固いっていう意味なの。ちよつと注意して土下座するようなところもね固いの……………あ、これつて謝り方だっけ……………」

「はあ」

羊君は直ぐに立ち上がって気をつけの姿勢で私の話を聞いていた。そのくりつとした目は私の目を一心に見つめている。

「ともかく、私は今君とお話したいの。リラックスした状態で私に接してくれない？」

「了解致しました」

「とりあえず、その席に座って？」

私は羊君に私の向かいの席に座るように促した。羊君は「ええっ！」と困惑したような表情になる。どうしたのだろうか。

「そこはVIP専用……」

「私が良いって言っているの。良いに決まってるでしょ」

「はあ………」と恐る恐るといった感じに椅子を後ろに引いて腰掛ける羊君。何怖がつてんだか。
周りの目を気にしている羊君は周りをきょろきょろと見回す。それを見た私も見回す。

他の従者たちの目が羊君に集中していた。何でだか。

「やっぱり僕が座るのはまずいですよぉ」

「周りの目なんか気にしないの。君は私が許可したからそこに座って良いの。恐がつたりしない」

「はい」

この子、若者言葉で言うビビりだなと私は思った。周りの目なんか何で気にするのだから。

「あのお………」

「何？」

「聞いてもよろしいでしょうか？」

「どうぞ？」

おずおずと手を挙げて羊君が私に質問の許可を得た。

「それでは………」と羊君が深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

「グリム様って、死神ですよね？」

「そうだけど、何？」

何当たり前のこと聞いてるんだこの子。

「今までどれくらいの人を狩ったりしたのでしょいか？」

あれ？それって普通聞いちゃいけないようなタブーの域の質問じゃないっけ？まあ自然に接してくれと私が頼んだんだし別にいいか。

「人は一億から先は数えてない」

羊君の顔が強張る。結構大事なことをさらつと言った私を見てビビったのかな？それともちまちま数えてた私にびっくりしたのかな？どうなのかな？……………まあどうでも良いんだけど。

「他には何か狩ったモノとかあるのですか？」

周りの従者達の目が「それは聞いてはいけないだろう」と羊君に語っていたが、羊君は周りの目を気にせず、私の目をまっすぐ見つめていた。……………真剣になると他の事は気にしなくなる質か。そういう質は良いよ。私はその質だけは好きだな。

「んーとねえ」と私はわざとアホらしく考えるふりをする。あんまり真面目に語るとお食事中の皆に悪いし？テキストに温度調節しなきゃね。

「星とか世界とか神とか……………かな。星は百幾つか、世界は五個くらい、神は狩りすぎて覚えてないなあ」

笑って見せる。人という生物にとって大きな存在である星や世界、信仰の対象でもある神にも生命がある。生命があるなら狩れる。望むならさくつと狩ってごらんにいれましょいか？……………なんてね。

「神様を……………狩ったことがあるのですか？」

「うん」

「何故？あなたと同族の神を狩るのでしょうか？」

羊君は真剣な眼差しで私を見つめる。いいねえ、その目。気弱な人なら殺せちゃうような目だねえ。ま、鬼神さんには到底敵いっこないけど。

私は笑う。真剣な眼差しを心の底から嘲笑うように。

「理由は一つ。傲慢で欲が強く、無駄に生命に拘るからだよ。そんなやつは人だけで十分。——私達死神は、そんな欲を持つ神やダメダメな人間、魂を失った凶星、力を失った世界を狩ることを生業としている」

「あなたも神じゃないですか」

「仮だけどね」

「何故？」

「神であつて、神でない。私には何かを創造する能力なんて無いよ。私にあるのはとびきり強大な破壊の力と少しばかりの何かを変える誰でも使える変化の力。神様は創造の力と破壊の力を併せ持つ存在。どちらが強くてダメ。均等に力を持たなければ、それを神とは呼ばない。……私達破壊神でもある死神の対となる創造神も本当は神と呼ばない」

羊君は「そうですか」といつの間にか持ってきた透明なグラスに注がれたオレンジジュースを飲む。

「片方に秀でたグリム様は神ではないと」

「そゆこと。だけど力が強大過ぎた所為か他のいろんなモノから神と呼ばれたの。他の同じ境遇の奴等もそう。私達はめんどくさくな

「つたので死を与える神として死神と名乗ったのよ」

「なんだかものすごくチンプンカンプンで何話しているのだから分りませんよ」

「だって私アホだもん。話すことなんて物凄くチグハグ」

「はあ」

私は脹れて見せる。

それを見た羊君がごろごろと笑う。笑うと羊君は可愛いな。とても男にしておくのが勿体ないなあとは私は思ったのでちよつと提案してみる。

「ねえ君……女になる気は無い？」

「ぶっ！！」

オレンジジュースを盛大に噴き出す羊君。綺麗な放物線を描いたオレンジジュースは他のテーブルよりも二回りも大きなテーブルを橙色に染める。

そんなにびっくりすることなのかなあ。男で可愛いから女でもイケると思うんだけど。

「今ならちんぷいっ！でできるよ？」

「本当ですか？」

羊君がテーブルの汚れを拭こうと席を立とうとしたのを私は止めて指パッチンをする。

一瞬で元通りになったテーブルを見て羊君がびっくりした。一応神なのでこれくらい当然……のはず。

「すみません」

「いえいえー！」

ぱちんと指を鳴らして私は口の中で小さくちちんぷいっ！と呟く。
私的には、相手のメリットとこちらのメリットを考えたうえで魔法をかけてみた。デメリットなんて気にしない。

ぷしゅーと羊君から煙がでて、その煙が羊君を包み込む。周りの従者達が何事かと見入っている。ただのマジックショーですよ。

煙が消えると同時にそこから美少女が―――と思った
ら毛むくじやらの何かが出てきた。

毛むくじやらの何かは困惑の表情で私の目を見つめ、口を開く。

「めえー」

「間違えた」

「めえー！！」

「ごめん」

「めえ、めえ、めえー！！」

早く元に戻してくださいよ！と言っているのだろう。鳴き声から分かるに羊になってしまった羊君。服は毛に変わったらしく何処にもない。体を構成している色んなモノを魔法で書き変えたら羊になってしまいました――！なんて洒落にもならない。

すぐに私は指を鳴らしてちちんぷいっ！と呟く。今度は上手くいくだろう。

先程と同じように煙が羊君を包み込む。……………頭の中に思い浮かべた羊を消して、羊君の容姿と女の子の容姿を頭の中でクロスさせて書いて構築したちちんぷいっ！の魔法の煙はきつと羊君を草食獣から人の姿に変えるだろう。

煙が晴れてくると、先程の草食獣が居た場所には腰まで届く白くてまきの強い長髪のとて可愛らしい少女が何故か泣きながらそこに立っていた。大きく丸いその瞳からポロポロと大粒の涙を床におとしながら羊君は私の瞳を見つめると「先程はどうなるかと思いまし

たよ！」と少々ハスキーな声で私を怒鳴りつけた。……見た目が羊なのに声がハスキーってどうなのよ。

「まあ、人間になれたからいいってことで」

「即刻戻してください。服のサイズが違うし背が低くて見える範囲が違うし声がおかしいし……」

「文句言ってんじゃないの！」

私はついつい怒る。こちらら慣れない作業で手間取ったんだからそんなに文句言わないでよ。……私はやっぱり魔力をドバドバと使った派手な戦闘の方が向いている。

「歩きづらいのですが……」

「我慢しなさい！……女の子になった気分はどう？」

私は再び怒ると、気持ちを切り替えて質問してみる。意見聞きたいし。だって神様だもの。……関係無い？後で首刎ねるよ？

羊君は涙を自分のハンカチで拭くと、人差し指を顎にあてて考える。「うーん」と考える様は正しく悩める少女だ。

「胸の存在感と、股の喪失感が何とも言えませんね。……男の勲章を失った感じです。個人的に言えば悲しいです」

「じゃあつけて欲しかったの？」

「いえいえいえ！そんな教育上よろしくない姿にはなりたくありませんよ！」

女の子の容姿でアレをつけるのは流石にまずいよね。色々とまずいよね。そんなことしたらスーちゃんに怒られる。……下手すると絶交される。そんなの嫌だ。

「ところで……」と羊君は私に質問してきた。

「早く戻してくれませんか？」

羊君は両掌を合わせて懇願してくる。まいったな……。……………何故まいったのかというところ「ちちんぷいっ！」の魔法は簡単で誰でも扱えるモノだが、その魔法で変えたモノは再び元の姿に戻すことは出来ない。何故羊君が人間に戻れたのかと言うと、それは男ではなく女だったから。性別が違う、種類が違うなら戻せる。（人種を変えて、一度変えた性別を変えることはできない。人種を変えても生物としては同じだから雄雌は戻らない）いくら神様でも破壊に特化した死神だからそこら辺の細々したことは変えられない。変えられるのはチャネル共通で神様のまとめ役をしている大神、新しく魔法をつくるにはつくることに特化した創造神と膨大な魔力を持った大賢者くらいしかない。私の知っている創造神はめんどくさがりやで三度の飯より昼寝が好きでグータラだから使い物にならない。他の創造神は死神を毛嫌いしていて話し合いにならないから無理。大賢者は今のところスーちゃんと他二人しかない。

「シープス、それは無理だよお？」

と、私がどうしようかと考えていると後ろから間延びした様な良く知っている声が聞こえた。スーちゃんだ。こんな変わった話し方をする人物はスーちゃんくらいしかない。傍に鬼神さんやド変態執事や気味の悪いペツタンコ侍女が居て、スーちゃんを護る様に立っている。

シープスと呼ばれた羊君は慌ててその場に気をつけをすると一礼する。なんで鬼神さんに向かってなんだろう。普通主であるスーちゃんじゃないの？……スーちゃんは特に気に留めずに語り始めた。

「ちちんぷいっ！の魔法は誰にでも使える超絶便利な魔法だけれど、

一度変えたモノはちんぷいっ！の魔法ではもう二度と戻せない。
大神の気が変わらない限り」

スーちゃんの言葉を聞くと羊君はがっくりとうなだれた。そんな羊君をフオローしようとしたのか、ド変態執事は羊君の傍によって肩に手を置くとニツコリと微笑んだ。

「落ち込むことは無い。君は立派なモノを手に入れたじゃないか。
夢と希望の塊を」

ド変態執事は羊君の胸に話しかける。羊君は「はあ？」と何やら困惑した表情でド変態執事の顔を見つめる。

「榊嬢程ではないがこれはなかなかの代物だ」

ド変態執事なりに褒めているのである。しかし羊君は頬を朱に染めるとド変態執事の顎目がけてアッパークットを叩きこんだ。アッパークットは見事にド変態執事を上に撃ち上げる。なかなかセンスが良い。あのド変態執事が油断していただけかもしれないが、ド変態執事は二十メートルくらい上に撃ち上げられると、降下しながら体勢を整え、見事に着地した。

「とりあえず、お嬢様のお世話は私に任せてお眠りになってください」

着地した瞬間、気味の悪い侍女はド変態執事の首筋にスタンガンを押し当てるとド変態執事の骨が透けて見える程に電流を流す。その場にドサツと倒れたド変態執事を肩に担ぐと気味の悪い侍女は目で羊君に謝ると鬼神さんの斜め後ろに下がった。そのスタンガン、出力おかしいよ？どうやったら人の骨が透けて見えるくらいの電流を

スタンガンで流せるの？やっぱり改造？それも魔力をこめた？……私わかんない！

「とりあえず、落ち着いたので飯にするでござるか」

全然落ち着いていない気がするけれど、まあいいか。

テキトーに鬼神さんがその場を締めると、皆その流れでVIP席に座るとご飯を食べる為に注文を始めた。羊君は危なっかしいので私の傍に置いておき、気味の悪い侍女はド変態執事を椅子に縛り付けると皆の注文を聞いて厨房の方に駆けていった。

この後、ド変態執事だけが飯抜きになっちゃったのは当然のことだ。

貳拾話 とりあえず落ち着こうよ。(後書き)

今回はグリム視点で、結構はっちゃけてます。

話がかみ合っていない、文法めちゃくちゃな気がしますすが気のせいだと信じたいです。

遅くなって申し訳ありませんでした。
それでは。

貳拾壱話 鬼神伝説（前書き）

毎回毎回毎回毎回毎回毎回………お久しぶりですか、遅れてスイマセンとか言っている気がします。

期待している読者の皆様（去ってしまったかもしれませんが……）お待たせしました。

最新貳拾壱話、はじまります。

式拾壹話 鬼神伝説

式拾壹話 鬼神伝説

草木も育たない、荒野の中で、昔、自分は誰かに質問された。

「何の為に戦うのか——」と。

何の為に——金の為、名誉の為、家族の為、等々様々な理由があるが、この時、自分はこう答えた。

「生きる理由を知る為」と。

その答えを聞いた誰かは「ふうん」と頷くと、腰に携えていた自身の得物を抜刀した。

自分は、その誰かの得物の長い刀身を見て思わず身構えた。反射的な動作での構えた。得物を下段に構えた誰かを見つめ、自分は神経を張り詰めた。

「では□□よ。——拙者と戦い、生きる理由を見つけてみせよ！」と、声を荒げて、その誰かは下段に構えたまま音も無く、五十メートルもの距離を一步で詰め、自身の得物——刀を斜め上に斬り上げるように斬りかかってきた。

自分は、その誰かの動きを見抜くと、裸足の足を滑らせてシュツと刀を斬り上げた誰かの側面へと回ると、脇腹を狙って一発、手刀

による突きを放つ。その突きは、綺麗に……まるで脇腹に吸い込まれるようにすうっと、その誰かの脇腹を貫いた。肘の少し手前辺りまでが、その誰かの血で紅く、染まる。

その誰かは、顔を激痛で歪めながらも……手刀で貫いた自分を見て、笑う。

「□□、そなたは………良い目をしている。流石は、拙者の□□か」

その時、自分は“多分”こう言った。「自分は、もうお前の□□では無い」と。

その言葉を聞いた誰かは、声高らかに笑った。

「ああ、そういえばそうだな。そなたは、もう拙者の□□では無い——今の拙者は——そう。鬼神だ」

その誰かの額から生えた雄々しい乳白色の一本角。天をも貫くと思わせるその角は、どこからどう見ても……人間の持つべきモノではない。脇腹を貫かれているのに声を荒げたりもしなく、ただ醜悪な表情で嗤う。痛みなんか忘れてしまったかのようなその表情は、正しく鬼だった。

「そなたに貫かれた拙者の脇腹——思っていた以上に痛くは無いなあっ!!」

脇腹……で一旦言葉を切る誰かは、一呼吸置いた後に、一気に早口で叫ぶ。その雄々しい咆哮は、荒野の罅割れた大地に響き渡り、その亀裂を肥大化させる。

咆哮した誰か……もとい、鬼神は——自分の、脇腹を貫いた腕を筋肉を締めあげることによって切断する。肉や骨を押しつぶす音が自分の腕から聞こえてくると共に、凄まじい嫌悪感が自分を襲う。自分は、嫌悪感から逃れる為に鬼神から離れた。

鬼神はクツクツと嗤う。

「さて、片腕で拙者と戦うつもりか？」

自分は考える。片腕………利き手の右を潰された自分は、圧倒的に不利になるであろう。果たして自分は………力の差が歴然としている、神の名を冠するモノに対してどうやって対峙したものか。

「そのつもりだ。何せ、数多くの戦士を倒してきた自分の………生きる理由を見つける為にだ」

鬼神は相変わらず嗤う。

「生きる理由………か。そなたは、もう見つけたのではないかな？」

え？と自分は言葉に詰まる。鬼神は狂ったように嗤い続け、自分は………ただ困惑する。

「そなたの生きる理由………それは、拙者に殺される為にだ」

それは生きる理由にはならないのではないか、そんなモノ見つけてはいない——と考え、言おうとした瞬間………

目の前の鬼神が、ゆっくりとした動作で、自分の脇を歩いて通った。一步一步確かめる様なその動作はともわざとらしかった。自分の脇を歩いて、自分の背後に回った鬼神を見ようと、自分は振り向こうとしたが――出来なかった。

なぜならば、視界が宙を舞っていたからだ。高いところから落ちるように、視界に映る景色がころころと変わり……頭全体に、何かにぶつかるような衝撃が来た瞬間……色鮮やかな視界は、黒く塗りつぶされた。

ブシューッと血を噴き上げる頭の無い体を見た鬼神は、自分の刀に付着した血を刀を振るうことによって落とすと、静かに納刀した。

顔から笑いを消して、鬼神は荒野を彷徨う。

●

広大な森に囲まれた大きな屋敷で、純白の少女が、自分の身近な従者達を捕まえて絵本を読んでいた。

「鬼神伝説」という題名のその絵本は、数百年昔から今に至るまで存在するこの世界の鬼神のお話が描かれた絵本である。大分古い絵本なのか、随分紙が脆くなっている。

ちなみに、この絵本に出てきた荒野は、この屋敷からずっと東に行った島国の約半分の面積を占めている荒野であり、鬼神はいまだにそこで彷徨っている。血を求めて、強者を探して。

「めでたしめでたしい」と、純白の少女――この屋敷の主である スー・R・ユガ は、最後まで絵本を読み聞かせるとパタ

ンという音をたてて絵本を閉じた。

「全然めでたくない気がするのですが……………」

「同感でござる」

と、そんな主に反論するように呟くのは——この屋敷の従者の一人である サヨ とこの屋敷の実質的な將軍である 榊 の二人だ。人を斬り殺しておいてめでたしめでたしは無いだらうと、二人は思う。

その発言に、スーは口を尖らせ「ぶー」と可愛くブーイングをした。ジト目で、二人の顔を交互に見つめる。その視線は「何が不満なのさっ！」と誰が見てもそう感じ取れる視線だった。従者と將軍は、ポリポリと頬を搔く。どう伝えたら良いか迷っているようだ。

「いいじゃん。カッコいいじゃんこの鬼神。男らしくて」

「……………そういう問題では無いのでござるがなあ……………」

……………」

この屋敷——ユガ邸の將軍であり、鬼神である榊は溜息を吐く。

「めでたいことがあるでござるか？この鬼神はやたらめった人をばっさばっさと斬っているようでござるが……………」

「作中で、いっぱい人助けているよお？道に迷った老人に親と逸れた商人の子供に野党に襲われた貴族等々、色んな人を助ける為に斬り殺しているんだと思うけど」

「助ける為だったら殺しても良いでござるか？……………人を殺さずとも助けることは可能でござる。……………斬るとしてもせめて足や腕一本」

「斬り落としちゃダメですよ、榊様」

金色の長いツインテールを持つサヨは、榊を「めっ！」と叱る。戦が終わってから榊に対するサヨの扱い方が何故か子供の面倒を見る母親の様になっているのは気のせいではないか、と榊は思うが……………気のせいでは無い。絶対ない。

榊は「えー……………」と軽くブーイングをするが、サヨの眼力によって抑えつけられてしまった。

「もうおとぎ話の様なレベルの鬼神伝説ですが、お子様の教育的には多少よろしくない描写があるようですね。こんな暴力的なお話お嬢様には合いません」

「歳、それほど離れてないくせに。時々スーよりもお子様なところあるくせに」

スーは嗤う。字はこれで合っている。泣きながら怒鳴りつけてきたりすぐに感情的になるとか子供だ、とスーは思う。

「……………それはそれ、これはこれ。お嬢様。人を斬り殺している描写を見てカッコいいなんて思っではいけません。鬼神は戦闘狂武を極め、その多くは血や力に溺れた異常者。人々に恵みを齎す正常な神とは違う、荒神です」

「なんだか侮辱された気がするのは気のせいなのでござるか？」

「榊様は例外中の例外です。悪を挫き、弱気を助ける可憐なる鬼神……………いわば英雄ヒーローです」

「だったらその絵本の中の、この世界の鬼神だつて英雄ヒーローだよ？ちゃんと救つてるよお？」

「……………言いたいことは分かるのでござるが、サヨの口から出る言葉はどれもこれも支離滅裂な気が……………」

「うるさいうるさい！」

スーが「ほら、子供っぽい」と嗤う。顔を真っ赤にしたサヨは、反論できずに俯く。そんなサヨの頭を榊は「よしよし」と撫でる。

「榊様あ……………」

「うん。少しサヨは黙っているでござる」

榊は、涙で潤んだ瞳を自分に向けてくるサヨに対して言い放った。「お前じゃあ埒が明かないから少し黙つてろや」という意味を少なからず込めたその言葉はサヨを黙らせるのに十分だった。サヨは榊の胸に顔を預ける。

「おい、なんて事をしているんだっ！」と、スーの傍で固まっていたクランツは、サヨが榊に泣きついていてる姿を見て叱咤した。比較的この屋敷の中では新人な榊にベテランのサヨが甘える事があつ

てはいけないという意味を込めて克蘭ツは言った。が……

「そんな……羨ましいことっ！！………して良いはずがない！」

直後、克蘭ツの腹からボゴオツという音が聴こえた。腹を押さえて、克蘭ツはその場に蹲る。

「………お祖父様。榊様に対してその変態発言は如何なものかと」

「………だからって、殴ることは無いだろう。シープス」

その場に蹲った克蘭ツを無表情で見つめるシープス。昨日、スーの友人であるグリムリーパーによって興味本位で魔法をかけられて女に変えられてしまったという不幸な元青年従者である。接客等々の奉仕系の仕事が残念だったのと、この屋敷の中ではトップクラスの戦闘力を誇るとの理由から、スーの護衛に回されてしまった。

ちなみに、克蘭ツの孫である。全然似ていないが。

シープスは、溜息を吐くと榊に向かって一礼した。

「すみません、榊様。うちのお祖父様がおかしなことを言ってます………」

「いや、気にすることは無いでござるが………しかし、本当に似ていないでござるなあ」

「………何がですか？」

「外見から性格の何から何まで」

シープスは「あははは」と苦笑いする。

「これは……もう仕方が無いことです。僕のお祖母様の方が、お

祖父様よりも血が濃かったのでしょう。それに、母方のお祖父様とお祖母様の血も混ざっていますから、薄まったのでしょう」

「そうか。薄まってくれて良かったでござる。度を越えた変態は害虫以下でござるからなあ」

「………虫ケラ以下………」

克蘭ツはゴフツと咳込むと、その場に崩れ落ちた。近くに居たスーは、合掌する。

「とりあえず……………」と、榊は息を吸う。

「主。カッコいいというのは分かるが、殺すことはいけないう事でごさる。拙者、職業柄今まで数多の人を斬り殺してきたが、その度に罪悪感を覚えた。……………悪いことをしている人をやつつけるのは良いが、殺すことはいけない。罪を償わなければ、な」

「……………はい」

「うん。素直で宜しい」

と、榊はスーの頭を撫でた。スーは少々捻くれているが物分かりが良い子供だ。間違った事を教えてはならない。

「そういえば……………」

「ん？どうしたの、榊」

榊は、頬をポリポリと掻きながらスーに自分が疑問に思っていた事を尋ねる。

「なんで鬼神伝説なんていう絵本を拙者達に読み聞かせたのござるか？」

朝の早い時間帯からいつもの護衛の面々を集めてわざわざ絵本を読み聞かせていたのだ。何か理由はあるのだろう、と榊は思っていた。そうでなければ暇だったとかただの酔狂だったとか……………榊の頭ではそれくらいの事しか考えられない。

「知りたい？」と、スーは意地の悪い笑みを浮かべ逆に尋ねる。

榊やシープスは頷いた。

「しょーがないなあ！」

スーは絵本を机に置くと、両手を大げさに広げて「実は！」と声を張り上げて皆の注目を集めた。視線が自分に刺さる中、スーは息を吸う。

「鬼神の討伐命令が出たから」

『は？』

一同、声を揃えて『は？』と言った。スーの顔から意地の悪い笑みが消え、人形の様な無表情になる。

「聴こえなかったの？……………鬼神の討伐命令が出たからだよ」

討伐命令？と、スー以外の者は頭の中で思い浮かべた。鬼神の討伐命令とは何だ、と。

ふと、シープスが手を上げた。スーは喋る様に促す。

「はい。今日の朝、新聞を見た仲間から鬼神の討伐命令が出たとの話を聞かされました。この世界各地の強者に向かって、東方の「黒雲の荒野」で彷徨っている鬼神を討伐しろ、と」

「うん。でね、この屋敷にもその命令が来たんだよお……………榊とグリムちゃんに向けて」

「拙者に？」

榊は頭に？を浮かべる。なんで自分に来ているのだと、思ったからだ。

「うん。この世界で一番大きな権力を持っているアズバ帝国の国王から直々の命令……………いや、もうお願いかな？」

「もう？」

スーは溜息を吐く。もうどうしようもない……………という若干諦めの気持ちが入った様な……………そんな溜息だった。

「実はね……………もう、この世界に居る強者の中で鬼神に太刀打ちが出来るのって榊とグリムちゃんくらいしかないの。他の強者は殆ど殺されちゃった」

「殆ど……………とは、共和国の剣聖と大傭兵団「焰」の団長と他の大賢者と神以外……………ですか？」

「うん。剣聖と団長はただいま二ヶ月ほど睡眠中で使えなくて、私以外の大賢者は研究に没頭中。グリムちゃん以外の神様は「地表人だけで何とか出来るだろう」とタカを括ってて動かない」

シープスは驚愕した。この世界には、他にも強者がいっぱい居たのに、その全てが殺されたという事実には。

榊は冷静な目で、サヨの頭を撫で続けながら……………スーに問う。

「肝心のぐりむは、どこに居るのでござるか？」

「それが……………中の良い数人の死神達と一緒に他の世界を潰しに、さつき出てっちゃったからダメ。二日は戻らないよ」

榊は「ふむ……」と呟く。

「主には、命令とやらは来なかったのをごさるか？」

「来なかった」

（榊嬢）

スーが悲しそうな表情で首を横に振る中、意識を失って倒れていた克蘭ツがすつと立ち上がり、榊に近寄って耳打ちをした。

（お嬢様は、比較的戦闘向けの魔法使いでは無い。大抵の討伐ならこなせるが………今回ばかりは相手が鬼神だ。足止めは出来ても、討伐は出来ない。それに、万が一お嬢様が殺されたらこの世界はピンチに陥る）

（ピンチ？）

（そうだ。お嬢様は、この世界で「白」の名を冠する魔法使いであり、大賢者の一人だ。「白」とは、回復等の「癒し」の最高峰の名だ。医療の最先端を行くお嬢様が殺されたら、そこで医療がストップすると言っても過言ではない程に）

（大賢者であるのに問題は無いのか？）

（ここで、話をするモノでは無い。現に、こうやった耳打ちでもお嬢様には聴こえているであろう。……この世界に関係すること………とでも言うておこうか）

「あ、克蘭ツ。余計なことまで話さなかったあ。ちよつと意外」「意外で結構です」

克蘭ツは、スーの傍らに立つと、石像の様に固まった。

スーは、そんな克蘭ツを見て溜息を吐くと、榊の瞳を見つめる。

「で、榊は受けてくれるの？そのお願い」

「ああ。良いでござるよ」

榊はニツコリと微笑み、二つ返事で了承した。このことに、スーは驚愕する。

「え！？………受けるの？そのお願い」

「ああ。他に、太刀打ち出来る者がいないのをごさるう？………

…それなら、拙者が行く。丁度最近暇だったから」

暇……………そんな理由で戦うのか……………とスーは震えた。確かに、他に太刀打ち出来る者が居ないからなのであるうが……………いくらなんでも簡単に引き受ける話ではないだろう、とスーは感じた。

「い、いや……………でも」とスーは他の案を言った。

「共和国の剣聖や「焰」の団長を叩き起こすという事も出来るよ？……………というかそのほうが安全だよ。……………まあ、両方とも寝起き最悪なんだけど、出来ないこと無いし……………」

「主は、拙者の腕が信用ならないか？」

「え……………」とスーは詰まった。榊のその発言に。

「いやね、信用できないっていうわけじゃあ……………」

「ならなぜ止めるのでござるか？」

スーの言葉は、榊の静かな問いに消された。

「だって……………この世界の鬼神は、伝説になる程の力を持つてるんだよ？今までどれだけの人が討伐しに行つて返り討ちにされたのか分かったもんじゃないんだよ？そんな危険な相手の所に自分の大好きな従者を送るなんて……………そんなことできないよ」

「だったら、最初からその命令を断つておけばいいのではないか。主以外の大賢者みたいに。剣聖や団長みたいに適当に理由つけても構わない。……………なんで断らなかつたのでござるか？」

「榊嬢……………」

「主は、拙者やぐりむ……………と言つてもぐりむは居ないが……………その鬼神に勝てると思つてその命令……………いや、お願を受けたのでござろう？でなければ最初から受けないだろう」

「……………榊様。仰りたいことはよく分かりますが……………」

「なら黙つてろ」

榊は、低い声で胸元のサヨを黙らせる。分かるなら黙つとけ。これが榊の考え方である。

スーは、静かに口を開いた。

「……………もしかしたら、死んじゃうかもしれないよ？」

「……………戦場で死ぬ事……………いわば本望でござるな。が……………」

榊はスーの頭を撫でる。

「従者を殺したくなければ、回復なり補助なり……サポートでもしてみたら如何か？」

榊は意地の悪い笑みを浮かべ、そう言う。殺したくなければ精一杯護れとこの従者は言っている。普通、従者は主を護る側なのに……

……その関係を逆転させようとしているこの従者の考えを聞いて、スーは溜息を吐いた。

「……………一緒に戦うってことね。その場合、榊はスーを護ってよお？」

「御意。……補償はしないでござる。絵本の伝説を聞いている中で、一瞬で距離を詰める歩法を使用することから……主は防壁の魔法で壁でもつくったり自身に不可視の魔法でもかけておくでござる」

「いや、鬼神にはそんな子供騙しじゃあ通用しないよお。それに鬼神は榊と同じ武者。壁なんて在って無いようなモノだよお？」

「ほう。同業者か。なら、壁は無意味か……………しかし、主の使えない不可視の魔法は子供騙しでは無いでござろう？……………主は大賢者の一人。神をも騙す不可視の魔法をかけることぐらい可能……………いや、出来る。」

「言ってくれるじゃん。従者の癖に、主にそこまで言っただねえ……………やるよ。必ず」

「そうと決まれば、早速討伐に向かうでござる」
「その前に連絡ね」

何だか訳の分からないうちに、二人の間では決着がついたようだ。クラランツは目を閉じて溜息を吐き、シープスはおろおろし、サヨは榊の胸から離れて机の上に在る白い電話の受話器を取って、帝国にこれから討伐に行くという連絡をいれた。

この時の二人の表情はとても明るかった。

この数時間後に起こる戦いを、従者とその主は共に乗り越えるべく算段を立てる。

式拾壹話 鬼神伝説（後書き）

遅くなってすいません。

学業や生徒会が忙しいとかの言い訳は無しに、謝らせていただきます。

夏休みにはいるので、比較的数量更新が容易になってきましたので
どんどん書いていきたいと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1674n/>

ある武者の希有な物語

2011年8月2日13時31分発行